

富山大学人間発達科学部・附属学校園
共同研究プロジェクト 平成24年度報告書

富山大学スクラムプラン

ー学校バリアフリーへの挑戦ー

2012

富山大学人間発達科学部
富山大学人間発達科学部附属幼稚園
富山大学人間発達科学部附属小学校
富山大学人間発達科学部附属中学校
富山大学人間発達科学部附属特別支援学校

はじめに

附属学校園と学部とが連携して進める共同研究プロジェクトは、教育学部時代の平成12年度にスタートしました。附属学校園の教員も、学部の教員も多忙の中、自主参加を原則として、協力してプロジェクトを継続してきました。そこで目指したものは、教育実践の向上につながる共同研究、子どもたちの成長につながる共同研究でした。

附属学校園にも学部にも構成員の入れ替わりがある中で、このような自主的な研究活動が多く参加者により10年以上も継続しています。これは、このプロジェクトによる研究を進める中で得られる成果が、子どもたちの学びや育ちに確実に貢献しているという実感があるからではないでしょうか。

平成24年度は、14の研究グループ、100名近くのメンバーによって研究が進められました。たくさんの教科・領域等にかかわる実践的な研究が、子どもたちのよりよい学びや育ちのために展開されました。附属学校園の教員と学部の教員が力を合わせて進めた研究は、学術研究的な知見と、附属学校園で日々行われ、蓄積されている授業実践における知見の両方を十分に活用して進められた研究であり、その意義は大きいと考えます。

平成23年度の研究より、研究成果報告は、冊子として作成・配布するのではなく、人間発達科学研究実践総合センターのホームページ上に公開することにしています。今まで以上に、この研究成果を多くの方々からご覧いただきたいと考えております。そして、本報告や共同プロジェクトへの忌憚のないご意見やご指導ご鞭撻を賜うことができましたら大変ありがたく存じます。

今後とも附属学校園と学部の連携にさらなるご理解、ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

平成25年6月

共同研究プロジェクトWG委員長

長谷川春生

目 次

今年度の活動の概要	1
グループ研究	
国語科教育	5
社会科教育	7
算数・数学教育	32
理科教育	37
音楽教育	55
造形教育	57
家庭科教育	59
健康教育	64
英語科教育	72
生活・総合	77
支援ツール開発	85
ムーブメント教育	97
障害理解教育	108
特別支援教育キャリア教育	116

平成24年度のプロジェクトの概要

(1) プロジェクトの実施体制

富山大学人間発達科学部と同附属学校園の共同研究プロジェクトは、平成24年で13年目を迎えた。本年度のプロジェクトは、昨年と同様、学部に設置されている附属学校運営委員会の所管事業として実施された。同委員会のもとにプロジェクト推進のためのワーキング・グループが設置され、企画・運営に当たった。プロジェクト実施にかかる経費は学部共通経費から措置された。

(2) プロジェクトの内容

今年度の共同研究プロジェクトは、ここ数年来と同様、グループ研究を中心に進めた。グループ研究は、学部および附属学校園の教員が、研究したいテーマを出しあい、そのテーマへの参加者を相互に募ってグループを作り、グループごとに研究活動を進めるものである。本年度は以下のような14のグループが作られた。

グループ名	研究内容	代表者
国語科教育	研究発表会や教育実習などの機会を通して、よりよい国語科の授業のあり方を探る。	米田猛（学部）
社会科教育	楽しく分かる社会科の授業づくりについて考える。	岡崎誠司（学部）
算数・数学教育	授業実践や協議会を通して、数学的な見方や考え方を育てる指導の在り方について追究する。	河原弘幸（附属中）
理科教育	理科の授業実践について、テーマを決めて、単元構想を行い、実際の授業を通して、検証する。	松本謙一（学部）
音楽教育	よりよい音楽授業のあり方について研究する。	松本清（学部）
造形教育	幼小中のつながりを意識しながら、造形教育で身につける力について研究する。	隅敦（学部）
家庭科教育	新学習指導要領にもとづいた授業実践の開発と研究を行う。	磯崎尚子（学部）
健康教育	児童・生徒の生活習慣について実態を捉え、心身ともに健康な生活を送るための支援のあり方を探る	神川康子（学部）
英語科教育	小学校における英語活動を含め、楽しくわかる英語科の授業づくりを考える。	岡崎浩幸（学部）

グループ名	研究内容	代表者
生活・総合	幼稚園（生活単元学習）、小学校（生活・総合）の授業をビデオに撮り、授業分析を行いながら、支援のあり方を探る。	松本謙一（学部）
支援ツール開発	障害をもつ子どもたちの自立を促す支援ツールの開発について研究する。	阿部美穂子（学部）
ムーブメント教育	幼児の運動遊び、小学校低学年の体ほぐしの運動、特別支援教育の自立活動や体育で実践するムーブメント教育を取り入れた授業づくりについて考える。	阿部美穂子（学部）
障害理解教育	障害理解教育のあり方やその効果について、実践を通して追究する。	西館有沙（学部）
特別支援教育 キャリア教育	知的障害特別支援学校における新たなキャリア教育のあり方に資する有機的な取り組みのあり方について、授業実践を通して検討する。	水内豊和（学部）

（３）ワーキング・グループ会議

第１回 平成２４年４月１６日（月）

- ・今年度の企画・参加者募集について（持ち回り）

第２回 平成２４年５月１６日（水）

- ・今年度のグループの確定（持ち回り）

第３回 平成２４年５月２３日（水）

- ・今年度のグループ予算の確定（持ち回り）

第４回 平成２４年１２月４日（火）（於：附属中学校第１研修室）

- ・来年度のプロジェクトについて

（４）グループ研究代表者懇談会

９月１９日（水） グループ研究を実施する上での情報交換

（５）運営組織（平成２５年３月３１日現在）

①附属学校運営委員会

- ・学部： 北村潔和（学部長）、小川亮（附属人間発達科学研究実践総合センター長）、橋爪和夫（教務委員長）、野平慎二（発達教育学科長）、堀田朋基（人間環境システム学科長）、笹田茂樹
- ・附属幼稚園： 徳橋曜（園長）、平井久美子（副園長）
- ・附属小学校： 岡崎誠司（校長）、荒治和幸（副校長）

- 附属中学校： 米田猛（校長）、矢野勝也（副校長）
- 附属特別支援学校： 大川信行（校長）、泉溪正十（副校長）

②ワーキング・グループ

- 学部： 小川亮、笹田茂樹、野平慎二（長）、長谷川春生
- 附属幼稚園： 加藤ちえみ
- 附属小学校： 北岡明
- 附属中学校： 北岡聡
- 附属特別支援学校： 書川隆行

グループ研究

国語科教育グループ 国語科授業の研究

代 表 : 米田 猛
附属小学校 : 草野 剛、北岡 明、松井智史
附属中学校 : 長澤信行、萩中奈穂美、宮崎理恵
附属特別支援学校 : 加藤雄一

1. 活動の方針

附属小学校・附属中学校の日常的な研究活動に即した研究実践内容にする。具体的には、

- (1) 研究発表会で公開する授業や校内研究授業などの学習指導案検討を行う。
- (2) 日常的な授業において、お互いに観察を行う。
- (3) 教育実習の指導の在り方について、検討を行う。

したがって、特別に研究主題を設けてする研究ではない。また、上記(1)～(3)の研究は附属教員にも学部教員にも喫緊かつ重要な課題であり、この研究を行うことは、そのまま附属校園の使命を果たすものでもある。

2. 活動の実際

2012. 4. 12 (於附属中学校)

- (1) 附属小学校「春の教育研究発表会」(2012.6.14)における公開授業の学習指導案検討会を行う。

「じゅんじょをせいりしてつたえよう」(小学校1年 授業者・北岡 明)

「自分の考えを明確にしながら読もう」(小学校5年 授業者・松井智史)

- (2) 附属中学校「教育研究協議会」(2012.6.5)における公開授業の学習指導案検討会を行う。

「『類義のオノマトペ』の微妙な違いを分かりやすく説明しよう」(中学校2年 授業者・萩中奈穂美)

「人物像をとらえよう」(中学校1年 授業者・宮崎理恵)

- (3) 教育実習の打合せ

[教材の問題]

- ① 実習生に授業させる単元・教材について、年間計画の時点で決めてほしい。
- ② 実習生が基礎的・基本的な知識・技能を学べる教材であってほしい。
- ③ 毎年同じ教材ではなく、意図をもって選んでほしい。
- ④ 学年のバランスを考え、文種等のバランスをとってほしい。

[学習指導案の問題]

- ① 学部・教育法で指導している指導案

[実習生への指導内容の問題]

2012.6.20（於附属中学校）

（1）協議会等で指摘された課題について

- ① 学習課題について
- ② 単元構想について
- ③ 教材の特性について

（2）附属学校として、個人として今後の課題としたいこと

- ① 教材文に向かう子どもの動機付け
- ② 思考の組み替え場面

2012.10.5（於附属小学校）

（1）教育実習の在り方について協議する。

3. 活動の成果と課題

（1）附属校園の重要な使命であり、かつ日常的に常に問題意識のある「教育研究発表会」の授業検討（事前・事後）について論議できたことはよかった。特に、小学校・中学校の授業について（本年度は特に中学校が小学校のことを）知ることができたのは、小学校・中学校の連携の観点から収穫である。

（2）附属校園のもう一つの重要な使命である「教育実習」について、学部と附属校園とが情報交換できたのは収穫である。今後具体的な教材（実習で扱う教材）について、学部と附属校園との連携を強化し、実習生に対して一貫した指導ができるように、工夫したい。

（文責・米田 猛）

社会科教育グループ 「おもしろい社会科授業」の創造（7）

人間発達科学部	岡崎 誠司・笹田茂樹
附属小学校	岩滝修二・阿久津 理
附属中学校	堀内 和直・北岡 聡・坂田 元丈

はじめにー研究の目的と方法ー

これまで本共同研究プロジェクトでは、公開された社会科授業の観察・批評を通して、あるべき社会科授業の姿を探求してきた。そして、五年前までは、「資料活用能力とは何か」「思考力とは何か」に焦点を当ててあるべき社会科授業の姿を明らかにしていった。ただし、四年前より評価問題の検討を通して、上記の問いに答えていくこととした。その際、実践した授業との関わりのもとで、評価問題とその背景となる理念を明らかにしようとした。そこで、本年度もこれまでに引き続いて、授業実践との関わりのもと、評価問題を検討し育成するべき能力を明らかにすることとした。以下、研究目的と方法を明示し、共同研究プロジェクトの概要を説明する。

（1）研究の目的

授業実践の事実を明らかにし、実践後実施した評価問題を検討することを通して、学力についての考察を深める。

（2）研究の方法

各会合での提案者を決め、提案する評価問題は評価に至る過程での授業内容と合わせて提案し、それぞれ協議する。そうして、「おもしろい社会科授業の条件」を探求する。

第1回共同研究プロジェクト（7月） 研究の目的と方法の検討・研究計画案の検討

第2回共同研究プロジェクト（7月） 評価問題の検討

第3回共同研究プロジェクト（10月） 評価問題の検討

第4回共同研究プロジェクト（12月） 評価問題の検討

検討会の提案においては、これまでと同様、評価問題の実物はもちろん、評価範囲・評価問題作成の意図・評価基準を明らかにするよう努めた。それぞれについて、昨年度同様、以下に確認しておこう。

〈評価範囲〉

具体例として提示した評価問題は、「実際の授業でどのような学習範囲に該当するのか」を明示することにした。必要があれば、検討会において教科書の該当ページのコピーを配

布した。

〈評価問題作成の意図〉

「なぜこのような評価問題が作成されるのか」意図を明示することによって、評価問題が適切なものかどうか議論を深めた。ここでは、作成者の学力観や学習指導要領の解釈が検討されることになる。

〈評価基準〉

個別的個性的な授業であれば、評価問題に対する評価基準は、やはり個別的個性的にならざるを得ない。これを作成者が明らかにすることで、学年に応じた発達段階の仮説を設定できるだろう。

以上の手順・視点で進めてきた共同研究プロジェクトをまとめるに当たり、一定の結論を出すことはしていない。本プロジェクトの最大の目的は、メンバー一人ひとりの教師としての力量形成にある。したがって、一人ひとりがどのような実践を積み、どのような学力観に至ったのかを大切にしたいと考えているからである。そこで、基本的には、全員が執筆することにして、単元の実践概要・評価問題・成果と課題を全員書くことにしつつ、具体的内容については自由記述とした。そのような過程を経て、本プロジェクトは、さらに数年かけて、この研究を進め、成果を挙げることをめざしている。

(岡崎誠司)

2. 小学校第4学年「思考・判断能力」を育成する授業概要と評価問題

ー単元「わたしたちの生活とごみ」の評価問題の検討を通してー

(1) 単元「わたしたちの生活とごみ」の実践概要

① 単元のねらい

- 富山市のごみが最終処分場に至るまでの仕組みを意欲的に調べ、ごみ減量化についてできることに進んで取り組もうとする。 (社会的事象への関心・意欲・態度)
- 調べた事実から自分の生活の仕方とごみ処理との関係や未来の富山市のよりよい在り方について考えることができる。 (社会的な思考・判断・表現)
- 自分たちの生活を理解するために、家庭でのごみの処理のきまりを調べたり、市全体のごみ処理の現状を読み取ったりすることができる。 (観察・資料活用の技能・表現)
- 富山市のごみ処理が計画的に行われていることや自分たちの生活とごみ処理との関係を理解することができる。 (社会的事象についての知識・理解)

② 単元について

- 本質は良好な生活環境の維持ときまり

廃棄物を適切に処理しなければ、良好な生活環境を維持していくことはできない。そのためには、きまりが必要となってくる。ごみを排出する人と処理する人が異なっているため、同じ目的に向かうためにきまりが必要となってくるのである。

きまりは、見方を変えてみると、問題点の裏返しである。問題点を改善するためにきまりは作らうに取り組んでいる。このような富山市の取組には、市民の協力が不可欠であり、今後、より一層の協力が求められている。

一方子どもたちは、富山市の取組について、ごみを家庭から出してから最終的に処分するまでの仕組みに目を向けて学習を進める。そうすることで、子供たちは家庭からのごみ出しの様々なきまりが、実はごみを効率よく、計画的、組織的に処理するためであることに感心したり、ごみの処理・利用のされ方の工夫を知って驚いたりしていこう。そして、廃棄物の処理の仕方や資源として利用していく取組、行政の計画的な取組を学習していく中で、行政の取組のよさや法やきまりが良好な生活環境や廃棄物処理量と関連していることを感じていくと思われる。

このような流れで学習し、現在の仕組みやきまりが抱える最終処分場建設の問題と出会うことで、子供たち自身が、自分の家庭でのごみの減量化や資源の有効な利用の在り方を真剣に模索していくと考える。

(2) 単元の展開 全14時間

学習活動	子どもの概念と思考の深まり・学ぶ喜び
<p>第1次 わたしたちは、どんなきまりのもと、ごみを出しているのだろう(6時間) <small>美しい富山市→きまり</small></p> <p>○ ごみが山積みの他都市の様子を見る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 町は美しいのが当たり前だったけど、処分する所がなくて、きまりが守られないと大変なことになる。 	<p>素朴概念</p> <p>多くの人がごみ処理に携わって工夫や努力をしてきれいな町が保たれている。</p> <p>問題意識<他都市と富山市の比較></p>

- ごみをだす際の家庭でのきまりについて考える。
 - ・ ぼくの家では、水切りをしたり、串などは折ってから新聞にくるんで出しているよ。その方が軽いし、ごみ集積所も汚れないよ。
- ごみ収集車の様子を見学、インタビューを行う。
 - ・ 安全に収集するための服装だ。車を近くにとめて素早く収集している。決められた時間に持っていくためだ。水切りをしているから、軽くて速く運んでいる。家でのきまりが活かされている。
- クリーンセンターでのごみの処理の様子を知る。
 - ・ 効率よく、安全に、衛生的に処理をしているはずだ。害のあるものは外に出さない仕組みだと思う。きまりを守ることで、安全に処理できるんだ。

第2次 ごみの量は、きまりによって、どのように変化しているのだろう（5時間）

- 富山市のごみの処理量について考える。
 - ・ ごみ処理のきまりや仕組みがきちんとしているのに、なぜこんなにごみの量が増えているの？
 - ・ 昔は、ごみを家で燃やしていた。今は、ダイオキシンの法律ができていて、それはできないんだ。
 - ・ 昔の様子と比べると生活の仕方やきまりが変化している。ごみの量とも関係が深いなあ。
 - ・ 今は、リサイクルの法律ができて燃やせるごみの量が減っているというより、リサイクルの量が増えて、ごみが減っているんだ。
- 最終処分場の様子を知り、今後、予想される問題について考える。
 - ・ そんなに前から次の処分場のことを計画していたんだ。でもまだ何もしていないのは、どうして。
 - ・ 処分場の近くの人も協力する気持ちはある。でも灰を捨てるところが近くになるのは、心配なんだ。まだ決まっていなかったらどうすればいいのだろう。

第3次 ごみを減らすには、どうすればよいのだろう（3時間） きまりー美しい富山市

- 現在のごみ出しのきまりを見直し、未来を見通したきまりを考え、行政の人に提案する。
 - ・ ごみを処理する人たちは、これ以上できることは少ない。ごみを出す人たちが考えないといけない。

どんなきまりや仕組みによって、きれいな富山市が保たれているのだろう。



思考の深まり

ごみを出す人のきまりとごみ処理という事象が関連付けられていく。ごみを出す人の立場から「安全・効率・衛生的」という見方が養われる。

新しい概念の形成 学ぶ喜び

ごみを出す人とごみを処理する人が、きまりを意識し、『安全に、効率よく、衛生的なごみ処理』に努めているから、美しい富山市が保たれている。



問題意識＜昔と今の比較の構成＞

どうしてこんなにごみが増えているのだろう。



思考の深まり

時代の変化とごみ処理の変化の 관계に気づく。法とごみ処理量の変化の関係を知る。

新しい概念の形成 学ぶ喜び

時代の変化や変化にあったきまりをつくることによってごみの処理量は減る。



問題意識

きまりを作って処分場を作っているのに、次の最終処分場が決まっていないのはどうしてだろう。



思考の深まり

ごみを出す人、ごみを処理する人、以外の新しい立場で考える。



見えてくる本当の問題

ごみを出す人が、ごみを減らす取組をしなければ、処分場の問題は解決しない。どんなきまりをつくらばいいのだろう。



思考の深まり

<p>もっと厳しいきまりにすればよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> なぜ、富山市の袋は無料なの？お金をとる決まりにすれば、ごみも減るのに。 ぼくたちが考えた”ごみを出すときのきまり”を聞いてもらってから修正して、多くの人に見てもらおう。 	<div data-bbox="877 210 1361 392"> <p>誰に、どんなきまりを、どのように作ると効果的なのかを、獲得した知識をもとに、判断する。</p> </div> <div data-bbox="877 392 1361 593"> <p>上位の概念の形成</p> <p>学ぶ喜び</p> <p>市民や行政がきまりの意味を考えて行動することによって、美しい都市が保たれている。</p> </div>
---	--

(3) 評価問題

富山市では今まで、もえないごみとしてうめたてていた小型家電の収集の仕方をかえることにしました。右のようなチラシを配り、小さな電気製品（小型家電）をしげん物ステーションで集めます。

① Aのらんには、今の富山市がかかえている問題を伝え、市民に協力することをお願いしたいと思います。今の富山市の問題を入れて書きましよう。

② この取組は、いずれ、富山市のきまりにしようという考えがあります。きまりにするときには、次のような反対意見が考えられます。

あなたは、この反対意見に答えるために、チラシのBのらんにどんなことを書きますか。授業で習った費用のことをつかって答えましよう。



反対意見
市民のためのお金を小型家電のしよ理のためにつかうことになり、ごみしよ理の費用がさらにふえる。

○ 問題作成の意図と解答例

・問題①…観点【社会的事象についての知識・理解】

<授業で取り扱った富山市がかかえている主な問題>

ごみが増加している。資源物として出されている量が伸び悩んでいる。

そして、最終処分場の建設が中止になり、処分場の7割以上が埋まってきている、等

＜解答例＞

- ・「今、富山市は、最終処分場がいっぱいに近づいていて、次の処分場のことでまっています。みなさんが出すごみの量をへらしたいので、今までうめたてていた小型家電を集めます。協力してください」

・問題②観点…【社会的な思考・判断・表現】

＜授業で取り扱った費用に関する事象＞

- ・ごみ袋の有料化 費用：スラグにかかる費用になる
- ・一人が1日卵1個分のごみを減量すれば費用の大きな節約になる
- ・処理場がいっぱいになり、新しい施設をつくるには、調査にも費用がかかり、建設には100億円かかる（八尾の事例）

＜解答例＞

- ・ごみ袋を有料化して、その費用をまわします。そうすれば、有料化によってごみもへるし、小型家電のリサイクルでさらにごみがへります。協力してください。
- ・費用はかかりますが、このきまりのことを考えて、ものを大切に長く使ってください。
- ・費用は、ふえますが、処分場は長持ちします。もし処分場がすぐにいっぱいになると、建設にはたくさんの費用がかかるので、このきまりを守ってください。

（４）成果と課題

プロジェクトチームで検討した点、「授業で獲得した知識や概念をもとにして公正な判断をする能力」がどのくらい育成されたかをはかる問題として作成した。

この問題では、子供たちが授業で獲得した「ごみ袋の有料化のよさ」や「ごみ処理は市民と行政が協力して取り組むことにより減量化することができるという考え」、「処分場の延命に直結するという考え」をもとに解答を考えることができる。

ただ、問題を解くに当たってこのチラシが表している次のような因果関係をとらえなければならぬ。「行政が小型家電を回収する（手段・原因）→埋め立てるごみが減る、リサイクルによって再資源化が図られる（目的・結果）」

これは、問題文を正確に読み取り、授業で学習したリサイクルの意味を想起する能力が必要であることを示していると考え。

このように「思考・判断・表現」のうちの「思考・判断」の拠り所となる知識や概念を授業で獲得した後、ポスターに掲載する言葉を書くという課題によって行政の立場になって「表現」という形式であれば「授業で獲得した知識や概念をもとにして公正な判断をする能力」をはかることができる。今後も、身につけたい知識や概念を明確にして授業を行い、このような問題の結果を分析し、授業改善につなげていきたい。

（阿久津 理）

3. 小学校5学年「社会的な思考・判断力」を育成する授業概要と評価問題

(1) 単元「わたしたちの生活とお米」の実践概要

第5学年(2)の内容では、稲作が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかかわりをもって営まれていることを学ぶ。また、ア「稲作が国民の食生活を支えていること」イ「食料の生産物の分布や土地利用の特色」ウ「人々の工夫や努力、運輸のはたらき」を具体的に調べることとなっている。

ここでは、我が国の稲作についての理解を深めるだけでなく、食料生産の意味や今後の在り方まで考えることが大切である。だからこそ、農家やJAなど稲作に直接かかわる人の立場、流通する量を調整し一定の米を確保しようとする国の立場、主食である米を食べる消費者の立場を通して、自分たちと米とのかかわりを考えていく必要がある。

我が国の農家の経営の様子は、規模によって大きく異なっている。稲作が盛んで規模の大きなところでは、地形条件や気候条件を生かしながら、圃場整備や機械を使った農薬散布などで、生産の効率化を図っている。一方で、兼業農家としての悩みを抱えながらも、「受け継いできた水田を守りたい」「食べる量だけは確保したい」といった願いで生産している場合もある。日本の稲作を考える上で、身近な事例、複数の地域を取り上げ、見方を広げていくことは重要である。両者を比較することで、「安心できる米を安定して届けたい」という共通した願いにも気づくことができるようにしたい。

昨今、貯蔵技術や陸上輸送が発達したこと、生産者が見える形の販売方法に変化してきたことは、「生産」を支える一つの要因となっている。「消費」が減り、生産量を調整せざるを得ない現状、収入減に伴い農家数も減少している問題をとらえながら、我が国の今後の食料生産の在り方を考えるようにしていきたい。

第一次で、農家の工夫や努力に共感した子どもたちは、「生産者には、質のよい米をこれからもたくさん届けてほしい」と願うだろう。だからこそ、第二次で、米を作る量が国によって調整されている事実提示に、子どもたちは驚き、その原因を探っていくと考える。「畑作には見られない生産調整を、国は、どうして適応しているか」と考えることで、食料確保のための米の役割、生産と消費のバランス、農家の収入や後継者不足などの稲作の課題が、浮き彫りになってくる。子どもたちは、様々な視点から日本の稲作の現状と課題について考えていくと思われる。



そこで、第三次では、今後の稲作についてどうあればよいか、農家、生産者、国などの立場に立って考える場を設けることで、自分の見方や考え方の成長に気付くことができるようにしていきたい。

(2) 単元の展開

① 知識概念の構造図

知識概念の構造図「わたしたちの生活とお米」

【子どもたちの価値判断 例】

農家の人々は、食料生産の中心となる米を一生懸命作っているんだな。でも、米の消費量の減少や高齢化など様々な問題があるな。地域で集約したりさらに協力したりすると、経費が節約でき、米作りが元気になるかもしれない。農業の会社をたて、おいしい米を作って海外に輸出したり、新幹線の駅で売ったりするのもいいかもしれないな。消費者である私たちは、米の大切さを感じ、もっともっと食べるようにしたいな。

⑩ ⑪ ⑫

【学習指導要領の「内容」との関連】

○ 内容(2)

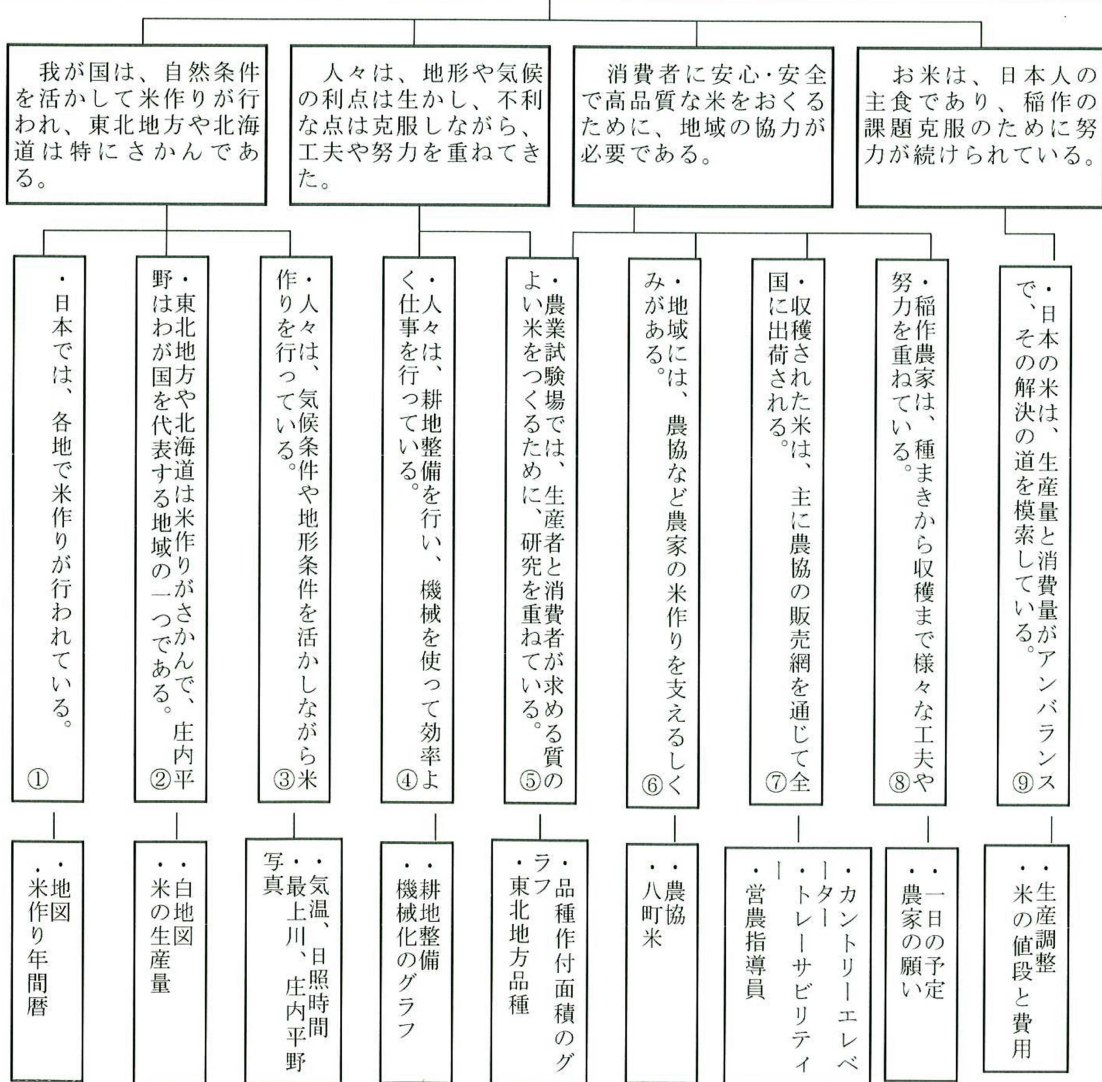
稲作が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかかわりをもって営まれていることを考えるようにする。

ア「稲作が国民の食生活を支えていること」 イ「食料の生産物の分布や土地利用の特色」

ウ「人々の工夫や努力、運輸のはたらき」

【中心概念】

稲作は我が国の農業の中心で、各地の様々な自然条件に合わせて、農業やそれに関係する人々の工夫や努力を生かしながら営まれている。



② 本時の学習例（9／12時間）

（1）ねらい

- ・ 米が生産調整されている理由から、稲作が国民の食料を確保する上で重要な役割を果たしていることに気づくことができる。

（2）展開

学習活動	指導上の留意点と評価（下線は資料）
<div> <div>どうして国は、米を作る量を調整しているのだろう</div> </div>	
1 資料を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>政府からの通達である生産調整に関する資料</u>を提示し、内容を読み取る場を設ける。
2 米を作る量が調整されている理由について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米の消費量に着目した場合には、<u>一人が食べる米の量の推移や米の消費量と生産量の推移（グラフ）</u>を提示する。価格から、農家の収入の話になった場合には、<u>ある農家の支出入</u>を提示する。農業経営が成り立たなくなっている現状を理解することで、子どもの素直な思いを引き出していく。 ・ 生産調整する米と、調整しない野菜を比較することで、稲作の役割について焦点化していく。
<div> <div>どうして国は、米だけを調整するのだろう。</div> </div>	
3 食料確保における稲作の役割について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>米の価格、戸別保証などの資料</u>を提示し、食料確保における稲作の役割を考えることで、国の打ち出している方針の意味を考えていけるようにする。 ・ 今後の稲作の生産や消費の在り方について、どのようにすべきか価値判断している子の意見も認め、立場ごとに分けて板書をする。
4 学習を振り返り、考えを書く。	

③ 授業実践の成果

- ・ 子どもたちが調べ活動や体験活動で獲得した見方や考え方では、「説明ができない資料（政府からの生産調整通達、新聞記事）」を提示し、焦点化した話合いの場を構成した。その結果、子どもの心が揺さぶられ、新たな視点から考えを生み出すことができた。
- ・ 生産調整という切り口から、食料確保のための稲作の役割に迫り、事実認識を確かにしていった。主食として安定供給させようとする政府の意図を知り、様々なジレンマを抱えながら米作りに励む農家の思いに共感することで、これからの米作りはどうかあればよいか切実感をもって考えることができた。

(3) 評価問題

① 評価問題例（一部のみ抜粋）

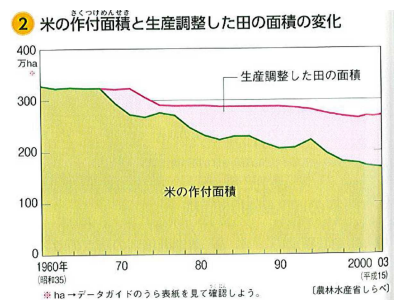
1. 右の写真のように、農協（JA）が中心となって消費者に農作業を体験してもらうイベントを開いているところがあります。この取り組みは、生産者や消費者にとってどんなよいことがありますか。それぞれの立場で書きましょう。

【社会的な思考・判断・表現】



2. 1960年代から、政府は米の生産調整をして、米の作付面積を制限しています。しかしながら、この政策には、賛成・反対の2つの意見があります。あなたは、この政策に賛成ですか、反対ですか。考えを書きましょう。

【社会的な思考・判断・表現】



② 評価問題作成の意図

1. 複数の立場から、一つの事象をとらえることができるかをみる。
2. 根拠を明確に示して、考えを表現できるかをみる。

(4) 成果と課題

- 1の正答率は93%と高かった。これまで社会科の学習では、一つの事象がどんな意味をもつのかを話し合い、多様な見方や考え方にふれることを意識して授業を構成してきた。また、中学年から継続的に、様々な観点や立場に立って事象をとらえるようにしてきた。それらの成果と考えられる。
- 2の正答率は88%と、想定よりも高かった。しかし、問題のスペースの制限により、問題に載せた資料の数が少なく、しっかり評価できたかどうか曖昧さも残った。価値判断を問うには、数個の資料ではなく、資料集全てを活用したり、複数の資料を関連づけて述べたさせたりするなどの工夫が必要であった。
- 子供たちの誤答をみると、考えたことを表現する力、説明する力が十分に育っていないように思われた。たとえば、田の耕地整理前と耕地整理後の様子を表す絵から、農作業をしやすくなった工夫を読み取り記述する問題も、観点をとらえにくいものがあった。社会的な事象について、資料を根拠にして説明することは、社会的な見方や考え方を広げるために有効である。表現力が向上できるよう、一人一人にあった指導をしていきたい。
- 社会参画の基礎を培うといった視点から、社会的な事象を自分ごととして捉えることが必要である。今後も、単元を通してこれまでの自分を振り返ったり、これからの自分の在り方を考えたりする場を設けていきたい。

（岩滝 修二）

4. 中学校 1 年生 思考・判断・表現の仮説設定

—単元「世界の諸地域 ～南アメリカ州～」の評価問題の検討を通して—

(1) 単元「世界の諸地域 ～南アメリカ州～」の実践概要

①全体計画

- 第1次 南アメリカの多様な自然環境・・・・・・・・・・ 1 時間
- 第2次 南アメリカの歴史と文化・・・・・・・・・・ 1 時間
- 第3次 変化する農業と鉱工業・・・・・・・・・・ 1 時間
- 第4次 ブラジルに見る環境問題と対策・・・・・・・・・・ 2 時間（本時 2 / 2）
- 第5次 南アメリカのまとめ・・・・・・・・・・ 1 時間

②本時の学習

ア 本時の目標

- ・ ブラジルにおける森林法改正案について、ブラジルの国会議員の立場で「どうしたらよいのか、どの解決策がより望ましいのか」を経済発展と自然保護の両面から思考し、根拠を明確にして自分なりの判断を行うことができる。

イ 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点（言語活動との関連）
課題の設定・把握	○ 本時の学習課題を確認する。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> あなたがブラジルの国会議員なら、森林法の改正案についてどう判断するだろうか。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時にまとめた自分の考えを確認するとともに、価値判断を行う活動であることを意識させる。 （①教科の付けたい力）
課題の追究・解決	○ 改正案について、全体で話し合う。 【森林法改正に賛成する。】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料 1 より、現行法を遵守できないほど農民は困っているのではないか。農民を守るために改正は必要だ。 ・ 資料 1 によると現在は所有地の 80%を残しておくことが求められているが、厳しすぎると考える。農地に転用することができるように緩和してはどうか。 ・ 資料 6 からアメリカの穀物メジャーに縛られている農民の姿がわかる。自国の農民を解放するためには、開発できる範囲を広げて自らの農地が持てるようにする必要がある。 ・ 地球温暖化が心配だというが、資料 11 によると二酸化炭素量に影響はないとある。ある程度の開発は必要ではないか。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">反論</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートをもとに生徒の意見を把握しておき、意図的指名が行えるようにしておく。 ・意見は根拠を明確にして述べるように助言する。

<p>課題の追究・解決</p>	<p>△ 賛成派の言う、「国民の生活を守る」ための方法はほかにもある。現状を改善することにこだわらず、産業構造を変えていくなどの工夫を行うことで、アマゾンの熱帯雨林の保護と両立する方法を模索すべきではないのか。</p> <p>【森林法改正に反対する。】</p> <ul style="list-style-type: none"> このままでは森林がなくなり、地球温暖化が進んでしまう。 資料10から生物多様性を守らねばならないと思った。多くの生き物のすみかを考えると、改正案には同意できない。 資料10から、先住民の住処、薬用植物を活用する知恵などが奪われていくと、民族が途絶え文化も途絶えてしまう。保護を緩めて開発を促進するわけにはいかない。 資料9より、消失した森林が世界一であることがわかる。もはやブラジルだけの問題ではなく、地球規模の問題として森林保護の問題をとらえる必要があるのではないか。 資料7より、日本の国土の2倍の面積の森林が失われるのは大きいことだ。また、世論調査で85%が反対しているものを議員として賛成してもよいものなのか。 <p>反論</p> <p>△ 地球規模の問題であることはわかるが、国会議員として国民の生活について真剣に考える必要があるのではないか。資料2のレベロ氏のように、農民を少しでも救うことを考えなくては国は成り立たない。</p> <p>【森林法の改正は一部とする。】</p> <ul style="list-style-type: none"> 保全も必要だが開発も必要。資料1にある、法定アマゾン地域においては所有地の森林の80%を保護、その他は20～35%の保護というようにこれまでも開発と保護のバランスを考えながら法律が作られてきている。今の生活に合わせたちょうどよいところを注意深く探っていく必要がある。 資料7より、世論調査で85%の反対があるということから保護は必要だと思われるが、開発の観点から見た法規制の緩和は必要ではないか。山の尾根や斜面、河川周辺の開発には反対だが、小規模農業者に対する免除は認めていくとよいと思う。 国会議員は国民全体が幸せに豊かに暮らせることを考えなくてはならない。様々な考えを考慮しながら、それぞれのよさを取り入れて結論を出していかなくてはいけないのではないか。だから、規制を緩めるのではなく、農民の生活がよくなるよう生活援助をしていけばよいのではないか。 <p>反論</p> <p>△ 森林はこの法律で今まで保護されてきた。一部改正であっても法律を緩めることには変わりなく、確実に環境破壊が進む。森林を守る法律は少しも変えてはならないのではないか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの立場について理由を述べさせた後、反論を述べさせる場面を設定する。 (②思考を促す) 賛成、反対、一部改正に分けるとともに、理由と反論を別の色で書くなど構造的な板書にする。 (②思考を促す)
-----------------	---	--

課 題 の 定着 ・ 発展	<p>○本時の話し合いを通して考えたことを隣とペアで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農民のことを大切に考えなくてはいけないことは十分にわかったが、地球環境を長い目で見るとやはり自然保護の立場は譲れない。今を乗り切るためにしたことで、後の世代にツケを残すわけにはいかない。 ・僕は自然保護が大切だと考えて改正には反対の立場だが、国民を守るという考えから賛成の人の思いもわかった。ブラジルの人たちも自然保護と経済発展のどちらも大切だとわかっているから葛藤しているのだろう。 <p>○課題についてわかったことや討論を通して考えたことをもとに、自分の考えをワークシートにまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国会議員として、国民も守らなければならないし、地球全体のことも考えなくてはいけない。開発と保護のバランスを考えて、小規模農家に対する植えなおしの免除のみ認めることとし、そのほかは認めないことが望ましいと考える。 ・ 改正には経済発展の観点からやはり賛成だが、自然保護の重要性もよくわかったので、これ以上の伐採や法律違反が起きないように監視をしっかりとしていくようにしなければならないと思う。 	<p>・自分が討論を通して考えたことを相手に伝えることを通して、全員が自分の考えを述べるようにする。</p> <p>・最後に自分の考えを書き表すことで、より望ましい解決策を考えるようにする。</p> <p>(① 教科の付けたい力)</p> <p>(③全員が主体的に取り組む)</p>
---------------------------	---	---

ウ 資料

資料 1 これまでの森林法 資料 2 森林法改正と農業 資料 3 アマゾン横断道路
 資料 4 大豆集積所 資料 5 大豆生産者 資料 6 ブラジルにおける産業別労働者数と所得
 資料 7 法改正によって失われる森林 資料 8 森林法改正の問題 資料 9 消失した森林
 資料 10 生物多様性 資料 11 アマゾンの熱帯雨林

(2) 評価問題

① 評価問題

問い ゆうこさんとまいこさんのクラスでは、下の資料 A をもとに「あなたがブラジルの国会議員なら、森林法改正案についてどうしますか」という課題で討論を行った。資料 1～8 を見て、次の問いに答えなさい。

まいこさんは、はじめは反対派の立場であったが、**資料 3** および **資料 4** を用いた賛成派の意見を聞いて「森林法は改正すべきである」と立場が変わった。まいこさんは討論の**最後の結論**をどのようにカードに書くと考えられるか、**はじめにもった考えからの変化も入れて**書きなさい。 (「わたしは森林法の改正に・・・」につづけて書きなさい。)

資料 1 これまでの森林法 資料 2 大豆生産者 資料 3 森林法改正と農業
 資料 4 ブラジルにおける産業別労働者数と所得 資料 5 アマゾン横断道路
 資料 6 生物多様性 資料 7 森林法改正の問題 1 資料 8 森林法改正の問題 2
 資料 9 法改正によって失われる森林

② 評価問題作成の意図

この単元は、学習指導要領解説では、アマゾンの森林破壊の実態、サトウキビ・小麦の生産地域の編成、バイオ燃料の普及、焼畑をする人々の暮らし、環境保全に対する農民の意識

や政策など追究することで、環境問題やエネルギー問題を地域に即してとらえ、南アメリカの地域的特色の理解する、ことにあたる。

本問題は、中学校第1学年の思考・判断・表現の能力を評価しようとしている。授業では、ブラジルの国会議員の立場になって、森林法改正の是非について「討論」を通して判断させる展開であったが、今回は価値判断を行う実験群の学級と行わない統制群の学級とを分けて本単元を進めた。本問題では、話し合いを通して自分の考えの立場が変わった場合の結論について書かせる問題となっている。「資料3と資料4をもとにした意見によって考えが変化した」ことと、「はじめにもった考えからの変化を入れて書く」ことを条件としたことで、資料が表わしていることを正確に読み取り、どのような思考をし価値判断をしていくことが考えられるのかを表現することが必要となる。

用いる資料を同じにするが、授業の中ではなかった思考の流れを設定として取り上げることで、授業を応用して考えなければならない。だから、思考・判断・表現の能力が身に付いているかを評価する応用的な問題にしやすい。そこで、上記のような出題となった。

③ 評価基準

解答欄

☆正解のポイント1
結論が書かれていること

☆正解のポイント2
問題で指定された「はじめの考え」が書かれていること

わたしは、森林法の改正に **賛成します。**
はじめは、森林がなくなり地球温暖化が進むと考え反対していましたが、そこに住む人のことも大事にしないといけないと感じるようになりました。森林をできる限り農地として切り開くことで農業が発展しアメリカを追い越せるようになれば、国も発展するし低い所得しかもらっていない農業で働く人たちを助けることができると考えました。
その上で、伐採しすぎないように見張っていけばよいと考えます。

☆正解のポイント3
資料3、4から読み取れることがどちらも書かれていること

(3) 成果と課題

① 成果

資料の読み取りがしっかりできていると同時に、その資料に基づいた思考の流れがしっかりと整理されている回答が多く見られた。提示された課題について、資料を基に考え思考を整理して考えを深めることができたかどうかを評価することができる問題となっていたと考える。

② 課題

実験群の学級と統制群の学級では、あまり大きな回答の質の差が見られなかった。今回の評価問題においては、「討論」を通した価値判断を行う授業の効果を検証するには至らなかったといえる。資料の用い方、問題の設定の仕方をより工夫していく必要がある。

5. 中学校第2学年・思考・判断・表現の能力の仮説設定

ー单元「欧米諸国の衝撃と日本」の評価問題の検討を通してー

(1) 单元「欧米諸国の衝撃と日本」の実践概要

1) 単元の目標

- ・欧米諸国における近代社会の成立とアジアへの進出に対する関心を高め、意欲的に追究しようとする。
【関心・意欲・態度】
- ・欧米諸国における市民革命や産業革命、アジア諸国の動きなどについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。
【思考・判断・表現】
- ・開国とその影響について、多面的・多角的に考察し、公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。
【思考・判断・表現】
- ・開国とその影響に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。
【技能】
- ・欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことを理解し、その知識を身に付けている。
【知識・理解】

2) 全体計画（全7時間）

- ①フランス革命がおこったのはなぜだろうか……………1時間
- ②産業革命によって社会はどのような変化をしていったのだろうか……………1時間
- ③片貿易から三角貿易へと変化したのはなぜだろうか……………2時間
- ④あなたが当時の幕府の老中だったら

ペリーにどのような回答をするだろうか……………3時間(本時2／3)

3) 本時の学習

ア 目標

- ・開国を迫られた際の幕府の対応について、当時の世界情勢や日本国内の世論などを踏まえて、公正に判断することができる。

イ 展開

学 習 内 容	学 習 活 動	指導上の 留意点	配時 (分)
課 題 の 設 定 ・ 把 握	○本時の学習課題を確認する。	・ 配布資料を確認させ、課題意識を高めさせる。	5
課 題 の 追 究	○幕府の会議に出席しているという形で意見交換を行う。 ・ 国書の内容をすべて受け入れる 〈理由1 ペリーに対抗できない〉	・ 座席は、互いの表情が見やすい	35

<p>・</p> <p>解決</p>	<p>①日本の船と黒船は大きさも装備も違い過ぎる</p> <p>資料1によると、ペリーの乗っていた戦艦サスケハナは日本の大型船の20倍の大きさであり、日本にはない約20門の大砲が装備されている。また江戸を火の海にできると言っている。(本時の配布資料)</p> <p>②清と同じように不平等条約を結ばされ半植民地状態になる</p> <p>前回の授業から、大国の清でさえイギリスに負けて不平等条約を結ばされた。(前時までの授業内容)</p> <p>〈理由2 通商を認めた方ほうがよい〉</p> <p>○外国の技術を取り入れることは利点が多い</p> <p>資料2によると、アメリカの技術力がとても高い(本時の配布資料)</p> <p>←攘夷を主張している天皇や大名が納得しないのではないかな</p> <p>←当時の世界情勢を説明すれば、納得させられる</p> <p>・国書の内容をすべて拒否する</p> <p>〈理由1 日本が通商すると不利なことしかない〉</p> <p>①日本の在来産業が大きなダメージを受ける</p> <p>資料3によると、貿易する国の間に経済力の差があると後発国の在来産業が打撃を受ける。(本時の配布資料)</p> <p>②日本は外国に品物を輸出する能力がない</p> <p>資料3によると、日本の海運力、生産力が欧米諸国に比べて大きく劣る(本時の配布資料)</p> <p>〈理由2 日本国内では多くの人が開国に反対している〉</p> <p>①天皇は開国に反対している</p> <p>資料4によると、天皇は開国し通商することをとても嫌っている(本時の配布資料)</p> <p>②大名の半分以上が開国に反対している</p> <p>資料5によると、大名の意見の半分以上が開国を拒否するものだから(本時の配布資料)。</p> <p>前回までの授業内容によると、改革に失敗し続けている幕府に対して改革に成功し力をつけた藩もいるから</p> <p>③庶民の意見も無視できない</p> <p>資料6によると、庶民は黒船に対してあまり動揺しておらず幕府の弱腰姿勢を非難しているから(本時の配布資料)</p> <p>←黒船で江戸が火の海にされてもいいのか</p> <p>←天皇や大名の協力を得ればよい</p> <p>・通商以外の内容を認める</p>	<p>ようにコの字型になるよう配置する。</p> <p>・根拠となる資料や読み取った内容、課題との関連を指摘するよう、他の生徒にも投げかけ、互いに高めあっていくようにする。</p> <p>・読み取った内容と課題との関連が不十分な場合、他の生徒に投げかけて指摘させるか、教師の方で指摘し、より合理的な説明を意識させる。</p> <p>・生徒の思考を助けるような構造的な板書を工夫する。</p>
--------------------	---	---

	<p>〈理由 日本が通商すると不利なことしかないから〉</p> <p>①日本の在来産業が大きなダメージを受ける</p> <p>資料3によると、貿易する国の間に経済力の差があると後発国の在来産業が打撃を受ける。(本時の配布資料)</p> <p>②日本は外国に品物を輸出する能力がない</p> <p>資料3によると、日本の海運力、生産力が欧米諸国に比べて大きく劣る(本時の配布資料)</p> <p>③すでに薪水給与令を出している</p> <p>前回までの授業内容から、アヘン戦争で外国の力を知った幕府は異国船打払令を取り消し、薪水給与令を出した</p> <p>←ますます弱腰だと天皇や大名が批判するのではないか</p> <p>←すでに行っていることであることや攘夷は難しいということを説明すればいいのではないか</p>		
課題の定着・発展	○他人の意見を聞いた上での回答をワークシートに記入する。	・はじめの回答と比較し、変化した理由を考えさせる。	10

ウ 資料

資料1 黒船の力

資料2 ペリーが持参した献上品

資料3 貿易の利益

資料4 孝明天皇(ペリー来航当時の天皇)

資料5 開国に対する大名の意見

資料6 ペリー来校時の狂歌

(2) 評価問題

1) 評価問題

問い 青島君のクラスでは、「あなたが幕府の老中だったら、ペリーにどのような回答をするだろうか」という課題で話し合いを行った。そして青島君は、「日本国内では、明確に攘夷を実行すべきだという意見はあるものの、ペリーの乗船している船は日本とは比べものにならないほど大きく太刀打ちできないので、国書の内容をすべて拒否するのは大変難しい。しかし、アメリカのような先進国との貿易は日本の産業にとって不利であるから。」という理由で、「通商以外の国書の内容をすべて受け入れる」という回答を考えている。根拠となる資料をすべて選び、解答欄の当てはまるものを囲みなさい。

資料(本時の学習と同じ資料であるが、資料番号は異なっている。)

資料1 貿易の利益

資料2 ペリーが持参した献上品

資料3 ペリー来校時の狂歌

資料4 孝明天皇（ペリー来航当時の天皇）の書簡

資料5 黒船の力

資料6 開国に対する大名の意見

2) 評価問題作成の意図

この単元は、学習指導要領解説では、幕府が対外政策を転換して開国したことと、その政治的及び社会的影響を理解させ、それが明治維新の動きを生み出したことに気づかせる、ことにあたる。

本問題は、中学校第2学年の思考・判断・表現の能力を評価しようとしている。授業では、幕府の会議に参加している老中の立場になって、ペリーへの回答について判断させる展開であったが、本問題では、ペリーへの回答の根拠となる資料をすべて選ばせる展開となっている。例えば、「明確に攘夷を実行すべきだと意見はある」というのは、資料4「孝明天皇（ペリー来航当時の天皇）の書簡」に「幕府は攘夷を決行し、蛮人たちを打ち払わなくてはならない」とあるので、解答欄の資料4を囲む。

用いる資料を同じにするが、授業で話し合われていない内容について出題することで、授業を応用して考えなければならない。だから、思考・判断・表現の能力が身に付いているかを評価する応用的な問題にしやすい。そこで、上記のような出題となった。

3) 評価基準

・資料1、資料4、資料5、資料6

解答は、上記の通りである。授業と同じように出てきた意見に対して根拠となる資料を考えればよいので、容易に考えることができる。だから、すべての資料を選ばなければ「思考・判断・表現の能力は身に付いていない」と言わざるを得ない。

4) 思考・判断・表現の能力の定義仮説

ここで紹介したような授業を実施し、評価問題を作成している筆者にとっては、思考・判断・表現の能力とは、以下のようなものと定義することができるだろう。

社会的事象について合理的に思考・判断・表現を行う能力

(3) 成果と課題

1) 成果

授業で学習したことを覚えれば解ける問題ではなく、授業で身に付けた判断の能力を応用して解く問題を作ることができ、より質の高いものとなった。また、回答が選択式であるため、採点基準をはっきりさせることができた。

2) 課題

授業で使用した資料が大変多く、問題を解くのに時間がかかるので、定期考査にはふさわしくないとと思われる。今後は、資料を精選した問題も検討したい。

（文責 堀内和直）

6. 中学校第3学年・思考・判断・表現の能力の仮説設定

ー 単元「現代の日本と世界」の評価問題の検討を通して ー

(1) 単元「現代の日本と世界」の実践概要

1) 単元の目標

- ・ 現代の歴史的事象に対する関心を高め、意欲的に追究して現代の特色を捉えようとしている。 【関心・意欲・態度】
- ・ 現代の特色について課題を設けて追究したり、意見交換したりするなどして、歴史的事象を関連付けて予想を立てたり、検証するために資料を基に考えたりすることができる。 【思考・判断・表現】
- ・ 現代の特色について、資料から読み取れることを検証の根拠として活用することができる。 【技能】
- ・ 現代の特色について理解することができる。 【知識・理解】

2) 全体計画 (全14時間)

第1次：なぜ、人は歴史を学ぶのか・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

第2次：戦後は、いつ始まったのだろうか・・・・・・・・・・・・・・3時間

(本時3／3)

第3次：なぜ、戦後の諸改革が行われたのだろうか・・・・・・・・・・1時間

第4次：なぜ、日本国憲法が制定されたのだろうか・・・・・・・・・・1時間

第5次：なぜ、冷戦が始まったのだろうか・・・・・・・・・・・・・・1時間

第6次：どのように日本は国際社会に復帰したのだろうか・・・・・・・・1時間

第7次：どのように高度経済成長を遂げたのだろうか・・・・・・・・・・1時間

第8次：なぜ、沖縄返還が実現したのだろうか・・・・・・・・・・・・2時間

第9次：どのように日中国交正常化が行われたのだろうか・・・・・・・・1時間

第10次：なぜ、冷戦が終結したのだろうか・・・・・・・・・・・・・・1時間

第11次：現代の時代の特色はどのようにまとめられるだろうか・・・・・・・・1時間

3) 本時の学習

ア 目標

戦後の始まりの時期について、様々な資料を互いに関連付け、根拠を示しながら解釈することができる。

時代の転換の様子について近代の特色と現代の特色の違いを捉えるとともに、歴史には見方・考え方によってさまざまな解釈が成り立つということを理解する。

イ ねらいに迫るために充実させたい言語活動

時代における変革の特色を考えて、時代の転換の様子をとらえる活動を行う。戦後の始まりの時期について、解釈するために用いた資料を根拠に発言させる。さらに、複数の説について、互いに反論の資料なども参考にしながら、解釈したことやその根拠の妥当性を対話させる。

ウ 展開

	学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点
課 題 の 設 定 ・ 把 握	<p>○前時までの学習を確認する。</p> <p>F 出版社の編集会議の場面を想起させる。</p> <p>○本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>戦後はいつから始まったと言えるのだろうか。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ いくつかの考え方に分けられるかを尋ね、視点を分類させておく。また、最も重視する意見はどれか指示し、意見を絞り込ませておく。
課 題 の 追 究 ・ 解	<p>○課題に対して意見交換する。</p> <p>A案「玉音放送」があった1945年8月15日 ＝【戦闘のない日本が始まった】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料には、天皇が自らポツダム宣言受諾について国民に伝え、国民の多くが、この日に戦闘が終わったと認識したとある。また、この日以降、空襲や灯火管制も終わり、国民は平和を実感したから。 <p>⇒しかし、戦闘はこの日に終わったかもしれないが、法律をはじめとする戦時体制や国民生活の混乱は終わっていないので、戦時中と変わっていないのではないか。</p> <p>B案「ミズーリ号上の降伏文書調印」の1945年9月2日 ＝【アメリカ主導の占領・改革が始まった】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料には、正式な降伏が調印された結果、戦闘が終わり平和が訪れたとあるから。また、樺太などではソ連と8月15日以降も戦闘が続き、この日、正式に連合国側との戦争が終わったとされているから。 <p>⇒しかし、降伏文書調印は文書上であって、国民の多くは8月15日以降戦闘が終わったと認識していたし、「国民主権」という視点からは説得力に欠けるのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ C案「日本国憲法公布」の1946年11月3日 ＝【国内の体制が新しく始まった】 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 座席は互いの表情が見えて話し合いがしやすくなるようコの字形に配置し、案ごとにかたまる。 ・ 前時に回収したワークシートから、生徒の意見を把握しておき、さまざまな考え方やその根拠が出るよう、意図的指名を行う。 ・ 戦後の始まりとそれまでの時代の様子について対比し、「主張」と「根拠」となる資料とをつなげる「理由付け」を整理できるようワークシートを工夫する。 ・ 戦後の始まりを「より

決	<p>・資料には、象徴天皇制や憲法の三大原則とある。それまでは天皇を主権者に国民の権利は制限されていたが、国民が日本国憲法公布以降は主権者となったことや戦争を放棄したことで、国民を中心とする国づくりが始まったから。</p> <p>⇒しかし、政治的な理念や法制度が変わっても、混乱する国民の生活がすぐに変化したわけではないのではないか。資料にはすでに世論があったと書かれているから、ここを始まりとは言い切れないのではないか。</p> <p>○A案からC案まで、採用するかしないかを採決する。</p> <p>・多数決により採用を決める。多様な解釈を認めているので、採用するかしないかは、それぞれの案について行う。</p>	<p>よい社会をめざして」「平和」「国民主権」など「選択の基準」を想起させ、妥当性の検証を行うための話し合いで、論点がずれないように助言する。</p>
課題の定着・発展	<p>○課題について分かったことをまとめる。</p> <p>○次時への見通しをもつ。</p> <p>現代の特色について、学習していくことを確認する。</p> <div data-bbox="225 1104 1453 1218" style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>なぜ、戦後の諸改革が行われたのだろうか。</p> </div>	<p>・気付いたことをまとめることで、自らの学びを振り返らせる。</p>

エ 評価

戦後の始まりの時期について選んだ理由を、様々な資料を互いに関連付け、根拠を示しながら主張を展開することができたか、ワークシートの記述や発言によって評価する。

時代の転換の様子について近代の特色と現代の特色の違いを捉えるとともに、歴史には見方・考え方によってさまざまな解釈が成り立つということを理解できたか、ワークシートの記述や発言によって評価する。

(2) 思考・判断・表現の能力の定義仮説

ここで紹介したような授業を実施し、評価問題を作成している筆者にとっては、思考・判断・表現の能力とは、以下のようなものと定義することができるだろう。

課題となっている社会的事象について、他に応用して考え、自ら解決方法を見つけ、

取捨選択したことを言語化して説明する能力。

(3) 評価問題

1) 評価問題

次の赤羽出版社の会話文を読んで、問いに答えなさい。

問い 会話文の説明Aと説明Bを、それぞれ参考にした①～④の資料番号を明記して、説明しなさい。

康編集長：『日本中世史』の本を出版するんだけど、「武士の世はいつから始まるんだろう」かね？こ

こでは武士にとっての「よりよい社会」を朝廷の影響を受けず「武士が支配できる土地」と「政治的決定権」と定義付けるね。

優 子：それだったら、大河ドラマでやっている松ケン演じる【平清盛】なんじゃない？

友 美：でも、中学校の歴史で習った【源頼朝】の方が「武士の世」って感じがするなあ。

麻 衣：私はあえて、【北条泰時】を推すねー。

敦 子：「ホウジョウ ヤストキ」って誰？？

みなみ：それまでの武士が土地も位も少なかったけれど、【平清盛】は全国各地の荘園を獲得したり、自ら太政大臣に就くなど朝廷の高い位を一族で独占するようになったから、武士の世の始まりと位置づけられるよ！

こじはる：私は資料から【源頼朝】だなあ。→説明A

まりこ様：資料を見ると【北条泰時】だよ。→説明B

康編集長：最終的には「ジャンケン」で決めよっか？

(一同)：編集長ーっ！そりゃ、ないでしょう(汗)

資料① 乱後の幕府・朝廷政治への影響

後鳥羽上皇は隠岐島、順徳上皇は佐渡島、土御門天皇を土佐に流した。上皇が処罰されるのは前代未聞のことであり、計画の中心であった貴族や武士が何人も斬罪に処された。上皇方の貴族・武士の所領はすべて没収され、功績のあった御家人に与えられた。これにより幕府の影響力が西国まで全国に及ぶようになった。また、京都に「六波羅探題」が設置された。おもな役割は朝廷の軍事面での監視、西国の行政・司法(裁判)である。朝廷の政治のあり方まで影響を受け、朝廷はも

資料② 征夷大將軍になるとできること

征夷大將軍はそもそも東国を平定する(蝦夷を支配する)ために出陣する軍団の長ですから、都にいない必要があります。都から離れたところに臨時基地をつくり、そこに常駐していればいいわけです。この臨時基地を「幕府」(基地に置いたテント)といいます。そして、征夷大將軍は何しろ遠隔地の幕府に常駐しているわけですから、いちいち都(朝廷)にお伺いを立てずに、徴税したり(税金を集める)徴兵したり(兵を集める)、悪い人を罰したり(裁判する)など、自分の裁量で現地の行政を行うこ

はや独自の政治が行えなくなった。	とができます。
資料③ 守護・地頭の設置	資料④ 日本で最初の武家法
<p>源義経を捕らえることを口実に、1185年全国に守護・地頭を置くことを朝廷に認めさせました。家来となることを誓った武士を御家人にして、先祖から引き継いだ領地の支配を認めたり、手柄に応じて領地や守護・地頭の職を与えたりし、これを御恩といいます。御家人は土地に応じて合戦に出る義務を負い、これを奉公といいます。武士は朝廷や貴族の許可がなくても、土地の所有を認められることになりました。そして、御恩と奉公による結びつきにより、武士が住民と土地などを支配するしくみができました。</p>	<p>手紙の内容…「あらかじめ訴訟の裁きの基準を決めておき、身分に関係なく公平な裁きが行うことができるように細かなことを記録しておくのである。この式目は律令と少し違うところもある。(中略)律令の決まりは立派なものだが、武士や民間にはそれを知っている者は百人千人に一人くらいだ。だから朝廷の役人が勝手に法令を用いるので、みな迷惑するのである。」</p> <p>この式目はその後の武家政治の手本とされました。</p> <p>例) 武士が20年をこえる間、実際にその土地を支配していれば、慣習どおりその支配を認める。(第8条)</p>

2) 評価問題作成の意図

この単元は、学習指導要領では「冷戦、我が国の民主化と再建の過程、国際社会への復帰などを通して、第二次世界大戦後の諸改革の特色を考えさせ、世界の動きの中で新しい日本の建設が進められたことを理解させる」とある。また、「改訂の要点」では、歴史的分野の言語活動の充実について、「各時代における変革の特色を考えて時代の転換の様子をとらえる学習などを通じて、歴史的事象について考察・判断しその成果を自分の言葉で表現する学習を行う」とある。「時代の転換の様子をとらえる学習」は「思考・判断や表現などの活動を通じて、歴史について考察する力や説明する力を育てる学習」であり、「政治面をはじめとする変革に着目し、それによって前の時代と違うどのような特色が生まれたのかを考察し自分の言葉で表現」する学習と位置付けられている。

本問題は、中学校第3学年の思考・判断・表現の能力を評価しようとしている。時代の転換の様子を表現するためには、前の時代の様子と後の時代の子のの違いを説明する必要が出てくる。また、その転換点の説明の妥当性を判断する際の「選択の基準」が必要になる。本問題では、「武士にとって『よりよい社会』」が「選択の基準」であり、より具体的に述べるならば「朝廷の影響を受けず『武士が支配できる土地』と『政治的決定権』」にふれる必要が出てくる。この「選択の基準」を明確にした上で、時代の特色をとらえることで、思考・判断・表現する場が生まれると考える。

3) 評価基準

(○は2点 △は1点 ×は0)

○：前後の違いを説明することで、「転換点」を解釈している。

武士にとっての「よりよい社会」の条件を生かして説明している。

△：前後の違いについての説明が不足しており、転換について説明できていない。

武士にとっての「よりよい社会」の条件を無視した説明を行っている。

歴史的な知識理解に若干の誤りがあり、前後の説明がやや成立していない。

×：説明自体が成立していない。

無解答

<正答例>

・説明A【源頼朝】について

資料②を利用 これまでは朝廷により政治的な決定が行われていたが、頼朝が征夷大將軍となってからは、幕府は武士独自の政治的な決定や土地支配が行えるようになった。

資料③を利用 これまでは武士の土地所有には朝廷や貴族の許可が必要であったが守護・地頭の設置以降は、武士の土地所有は幕府によって独自に認められるようになった。

・説明B【北条泰時】について

資料①を利用 これまでは西国では幕府よりも朝廷の力が及んでおり、朝廷独自の政治も行われていたが、承久の乱以降は幕府（武士）が全国の土地支配や朝廷も含めて政治的な決定を行えるようになった。

資料④を利用 これまでは朝廷がつくった律令によって訴訟の基準が決められていたので、朝廷が裁判の中心であったが、御成敗式目により、律令とは独自に武士の判断で裁判(政治的な決定)ができるようになった。

(以上の説明の最後に)

これらのことにより、武士にとっての「よりよい社会」が実現したと言えるので、武士の世の始まりとすることができる。とつづける。

4) 正答の分布 (40人中)

(人)	○正答	△(知識理解ミス)	△(前後説明不足)	×(無解答)	×(誤答)
説明A	23	5	6	5	1
説明B	22	2	6	9	1

(4) 成果と課題

1) 成果

他に応用して考え、自ら解決方法を見つけ、取捨選択したことを言語化して説明する能力を評価するという点から、授業の内容は「現代」で、評価問題は「中世」を扱ったものであることから、仮説について検討できる問題であったと考えられる。

正答の基準が、前後の時代の特色を比較しながら説明する点と「選択の基準」である武士にとっての「よりよい社会」が実現した点の2点両方にふれて正答する生徒が過半数を超えたこと。

2) 課題

無解答がそれぞれいる点については、今回の50分の時間内で、最終問題であった点を考慮に入れたとして、全く解けなかったのか、時間不足であったのか（説明Bの方が無解答者が多く、9名もいる）を分析する必要がある。最初の方に設問を設ける必要があったのではないか。

前後の説明不足という点で正答に至らなかった生徒がいることから、今回の授業の「転換点」を説明する力がまだ身に付いていないと考えられるので、指導の課題点として残った。

歴史的な事象を説明させる際には、正しい知識・理解がないと、説明そのものが成立しなくなるので、日頃の授業でも配慮しなければならない。

（文責 坂田元丈）

算数・数学教育グループ

附属小学校	萩中 泰弘、前田 正秀
附属中学校	河原 弘幸、長田 正臣、中林 雅史
附属特別支援学校	柳川 公三子
学 部	岸本 忠之

I 算数教育

1 小学校での今年度の取り組みについて

簡潔性や的確性に着目して問題解決を進める中で、より一般的という点から考えを練り上げ、その考えを発展させたり、統合したりしていこうとする子どもを目指して、以下の点を中心に研究に取り組んだ。

- 子どもが自分なりの着眼点をもって問題解決を図るには、教材や活動の場をどのようにするとよいか。
- 子どもが他の考えに心を揺さぶられ、より確かな考えを求めていくには、話し合いの倍において教師はどのような支援をすることが大切か。
- 子どもが自分の考えや教材とのかかわりを深め、自分の変容に気づくことができるには、どのような振り返りの場や試行の場を大切にするとよいか。

2 目的に応じが概数の表し方について納得を深めていく学習活動の工夫

<実践事例1> 第4学年「およその数」

(1) 提案の概要

概数を指導するに当たり、用いる目的によって概数の取り方は異なってくるという点が理解できるようにすることが大切だと考える。そのためには、どのような問題場面を取り上げてそれを配列し、そこではどのような概数についての算数的活動を取り入れていくかを工夫することが重要である。本実践を通して、概数の表し方の意味について必要感をもち、思考を深める学習とするための手立てについて確かめていきたいと考えた。

(2) 成果と課題

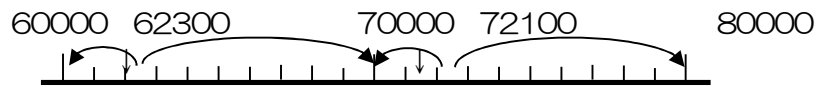
- ・ 右のような海外旅行代金を、絵グラフを用いて「およそ何万円」という概数で表す活動を取り入れた。絵グラフに表すことで、一万円よりも小さい金額を省略すると簡単に大きさが捉えられることを確かめることができた。
- ・ 子どもが考えた方法には、次のようなものが見られた。

ア 島めぐりコース	72100円
イ ビーチコース	62300円
ウ 歴史コース	58900円

四捨五入によるもの	切り上げによるもの	切り捨てによるもの
ア ①①①①①①① (7万円)	ア ①①①①①①①① (8万円)	ア ①①①①①①① (7万円)
イ ①①①①①① (6万円)	イ ①①①①①①① (7万円)	イ ①①①①①① (6万円)
ウ ①①①①①① (6万円)	ウ ①①①①①① (6万円)	ウ ①①①①① (5万円)

切り上げによる方法に対しては、多くの子どもが「反対」を示した。その子どもたちが「なぜ四捨五入にするとよいのか」について、数直線を用いて、次のように説明した。

C1 (数直線を使って) 72100 円はここで、8万と7万を比べると7万の方に近い。62300 円も6万と7万を比べると、6万に近い。



C2 いちばん大きい位の一つ下の位を四捨五入する。1～4の小さい数を捨てて、5～9の大きい数を10にする。

C3 千の位が5より上というのは、半分より上のこと。55000 より大きいのは6万に近い。近い方が、「このくらい出せばいい」と分かるから。

C4 (数直線を使って)境界線はここ(5000 円)になる。60000 の範囲は60000～65000 で…。



このように、数直線を用いて範囲を確かめることにより、四捨五入する方法を「近い数にする方法」として捉えることができた。

- ・「切り上げ」の方法について話し合う中では、子どもは次のように発言した。

C5 72100 円を約8万にすると、お客さんは安いを選ぶから、高いのを見せることになる。

C6 72100 円を約7万にするのは差が2100 円。72100 円を約8万にすると7900 円の差になる。差が少ない方がいいと思う。

C7 72100 円と80000 円はけっこうの差がある。パンフレットを見た人は「高いな」と思う。一万の違いでお客さんの感じ方はすごく違う。72100 円が約7万ならすごく近い。

C8 約7万にすると70000～75000 を表すことになる。予想しやすくなる。

四捨五入をするという理由として、実際の値と近い数であるために誤解が少なくなったり、大きさの見通しがもてるようになったりすることが挙げられた。ここでは、「切り上げ」の方法との比較を取り入れたことにより、受け手がどのような情報を得ることになるのかという「概数の目的」について考えることができた。

3 既習を生かしながら、新たな見方を獲得していく学習の場の工夫

<実践事例2> 第6学年「資料の調べ方」

(1) 提案の概要

1200 円のお小遣いをもらっている子が「みんなのお小遣いはもっと高いよ」と母親に訴える物語を提示し、「みんな」とは何なのかを討論していった。

平均値では1200 円よりも高いのだが、中央値や最頻値では1200 円よりも安くなるように、提示する資料の数値を工夫した。そうすることで、資料を見る観点によって、「みんな」のとらえ方が変わり、子どもたちは様々な視点から、資料を読み取っていくことができると考えた。

(2) 成果と課題

本時では、次のような思考の道筋を通ると仮定して、授業を行った。

【道筋1】考えをつくり上げる（既習をもとに考える）



【道筋2】考えが揺さぶられる（それまでの考えでは矛盾が生じてくる）



【道筋3】考えを見つめ直す（考えが変わる）（根拠がより明確になる）

資料を見た当初は、「最初は平均を求めればよい」と考えていた子どもたちだったが、「1200円より安そうに見えたのに、平均すると1200円より高いのは、どうして？」という矛盾に考えを揺さぶられ、外れ値の扱い方について、考えを見つめ直していった。

Ⅱ 数学教育

1 中学校での取り組みについて

主体的な学習を実現するためには、課題意識をいかに育てるかということを大切にしなければいけない。課題意識とは、自分は何をしなければならないかということを生徒自身が意識することである。今年度は、「課題意識を高める学習展開の工夫」を主題に研修を進めた。

2 自ら考えることを可視化することで、課題意識が高まる学習展開の工夫

<実践事例1> 第1学年「平面図形」

(1) 提案の概要

課題に対する意識を高めていくために、紙のように折り曲げることができない黒板にかかれた角を2等分する問題を設定した。また、解決にあたっては既習の数学を活用することのよさを味わえる学習展開を工夫した。ここでの既習の数学とは、点や線、多角形、円など小学校算数で学習した図形の定義や、線分や半直線などといった新しい数学用語についての定義、そして平面図形の対称性である。平面図形の対称性についての理解を基に、図形の対称性に着目して、基本的な作図を自ら見いだすことで、「図形の概念や性質の理解を深め、それらを活用して考えたり判断したりしようとする」ことができると考える。また、自ら見いだした作図の過程を、自分なりの言葉で説明することを通して、論理的に考察し筋道を立てて説明するといった「推論の過程を他者に分かりやすく正確に表現する」ことが培われるだけでなく、数学的活動のよさを実感できると考えている。さらに、作図の学習では、実測による限界や具体的操作の限界を感じられるよい機会でもある。これらのことを総合的に鑑みると、作図の学習は論証の素地を培う、大切な学習過程であると考えている。

具体的には、角の二等分線を作図する方法について考える。紙を折るといった方法や分度器を利用する方法を取り上げ、その方法の限界について確認する。ユークリッド幾何学における作図の公法からコンパスや定規を使った作図を考える。いろいろな方法を試行する中で、直観的に角の二等分線を作図ができる生徒が多いであろう。しかし、作図の手順の根拠が明らかになっていないことに気づき、平面図形の対称性や合同な図形の性質を使って、作図がなりたつ理由を考える。このように、既習の数学を基にして、新たな数学を生みだしたり、数学的な表現を用いて根拠を明らかにし、筋道を立てて伝え合ったりすることで、数学的活動のよさを実感できると考えている。

(2) 成果と課題

- ① 作図の方法に気づき、手順を言葉で表すことは他の単元でも取り組んできたので、抵抗はなかったようである。しかし、学習したばかりの半直線などの数学用語を正確に使用することは

不慣れなようであるが、生徒相互の思考の可視化により正確な数学用語を使用した説明になった。黒板に、作図の手順を言葉で残しておくことで、その後の気づきや思考の高まりができたようである。

- ② ひし形の作図を用いて角の二等分線の作図を考えている生徒が多かった。また、ひし形が線対称な図形であることは、気づきやすかったようである。そのため、角の二等分線の作図は線対称な図形の対称軸を作図すればよいことに理解しやすかったようだ。そこで、線対称な図形はひし形以外にも存在しており、たこ形でもよいことも見通しをもちやすかったようだ。
- ③ 考えを言葉で書き表すことは、生徒にとって時間のかかる作業である。また、数学用語を正確に使った説明も不慣れなことから、思考の可視化を意識した指導を全単元を通して行う必要があると感じた。また、本時の取り組みでは時間が足りないと感じた。十分な学習効果を期待するうえで、二時間設定にした学習展開に修正する必要があると考える。

3 自ら考えようとする態度を育むために、課題解決への見通しをもつことができる学習展開の工夫 ＜実践事例2＞ 第3学年「2次方程式」

(1) 提案の概要

既習の内容や方法を生かして新たな性質を見いだすことは、見いだした性質自体が実感のともなった理解へと深まる意味で大切である。さらに、新たな性質を見いだす過程において獲得した方法など、自らの力で解決できたという経験は、数学を学ぶ際に大切にしたい点である。そういった経験を継続的に積み重ねていくことは、課題に出会ったときに、自らの力で解決していこうという意欲につながるとともに、自ら学び、自ら考える能力が高まっていくであろうと考えている。

自ら考えようとする生徒を育てるためには、自分の力で解決できたという経験が必要であり、その実現のためには見通しをもたせることが重要だと考えた。今回の提案では、既習の内容や方法を想起させながら、2次方程式の解法の1つである平方根の考えを使った方法を自分たちの力で見いださせ、様々な2次方程式の解法を考える学習を工夫した。具体的には、平方根での学習をもとに生徒は、 $x^2 = a$ に目を向けると解決できそうだという見通しをもつことができるだろう。また、多項式を1つの文字に置き換えた経験を想起することで、先に解決した $x^2 = a$ という方程式に帰着させ解決することができる。解決したことが次の課題解決への見通しとなることで、既習を生かすことのよさを体験的に学ぶことができると考える。また、解決する過程において、解決したことが新たな既習の内容や方法となり、平方根の考えを使った2次方程式の解法の一般化や解の公式を導く際に、自らの力で考えるための手立てになると考える。

(2) 成果と課題

- ① 何人かの生徒は答えの吟味を丁寧にやっていた。答えが題意に対して妥当であったかどうか吟味することは論理的な推論では極めて大切なことである。本時は土地の問題なのだから図でもう一度確かめるようにするのもよい。問題解決学習の初期の頃に吟味を大切に扱うことを身に付け、習慣化しておくことで理解も深まる。今後も継続的に行っていくことで、自ら学ぶ態度が育まれると考えている。
- ② 生徒にとって無いものを有ると思わせることは難しい。このようなことは過去の経験の振り返りを絶えずやっていると習慣となっていく。 $(10-x)^2$ を展開してみると $100-20x+x^2$ になる。このように対比することで自分でできるようになっていく。つまり、既習を生かすために類似なものと比べてみるという態度が育つということであり、自ら学ぶということにつながる考えられる。

- ③ 2次方程式の扱いでは、簡単な数でよいが $\times 2$ にも係数のある一般的な形のものまで扱うことで、放物線とのつながりも出てくる。また、課題学習などとしての位置づけでもよいので、何かの形で黄金分割も扱うことで、自然界や身のまわりにある形など、私達人間にとってきれいに見える物の割合として黄金分割につながる。今後より一層、生徒たちに数学の有用性、よさの感得の一面として触れるようにしていく努力が大切であると考えている。

理科教育グループ

(部員) 世話人 松本謙一

附属小： 澤柿教淳 橋本大一郎 有島智美

附属中： 堀 篤史 大門知代 玉生貴大

大 学： 梶座圭太郎 片岡 弘 林 衛

安本史恵 成行泰裕 松本謙一

(計12名)

【研究主題】

「南極授業」の理科教育的意義

【研究の方法】

- ・ 年間3回の部会研修を実施。
- ・ 今年は、石野昌太郎君の学士論文研究と、協力態勢を組み、附属小学校6年1組の生徒を対象に、橋本大一郎先生が1単元全ての授業実践を授業者として行う。
- ・ 附属小・中教員 並びに 大学教員は、議論に参加するとともに、実践後、考えさせられたことを各自がまとめる(分担)。

【研究の経過】

第1回 平成24年 6月27日(水) 今年度の研究の見通し

第2回 平成24年 9月25日(火) 南極授業の概要

第3回 平成24年10月16日(火) 南極授業の具体的な提案と協議

(1)

第4回 平成24年10月31日(木) 南極授業の具体的な提案と協議

(2)

南極授業の実施

(1) 1回目 2014年1月27日(日) 富山大学黒田講堂

(2) 2回目 2014年1月31日(木) 富山大学附属小学校

「南極授業」の理科教育的意義に関する考察

富山大学人間発達科学部附属小学校 澤柿 教淳

氷が支配している大陸、南極。最大 4000m にも及ぶ厚い氷が、日本の 37 倍もの面積を覆い尽くしています。今、世界中の科学者が注目しています。人間の活動が、南極の氷に影響を与える可能性が出てきたのです。最近、南極の一部の地域では氷が急速に失われるところも出てきました。観測隊は何ヶ月も南極に滞在し、氷の大地に挑んでいます。南極は、地球の未来の鍵を握っているのです。地球上に残された最後の秘境、南極。その氷の大地で、南極観測隊に同行しながら計り知れない南極の魅力に迫ります。

第 54 次日本南極地域観測隊 夏隊同行
(2013 年 11 月 25 日～2014 年 12 月 20 日)

1 日時、場所、および対象等

- (1) 1 回目 2014 年 1 月 27 日（日）富山大学黒田講堂
子供～一般 約 350 名
- (2) 2 回目 2014 年 1 月 31 日（木）富山大学附属小学校
全校児童 約 470 名
- (3) 3 回目 2014 年 2 月 11 日（月）東京都多摩動物園
希望者

2 「南極授業」コンテンツに関する考察

- (1) 「教材」となり得た VTR コンテンツについて
観測隊同行中に作成したコンテンツ（含作成中）は以下。

○———使用 ▲———一部使用 ★ゲスト招聘

No.	タイトル	黒田講堂	附属小
1	JARE54-出発式		
2	JARE54-フリーマントルにて		
3	JARE54-「しらせ」艦内生活		
4	JARE54-「しらせ」停船観測	○	

5	JARE54-「しらせ」ラミング	○	
6	JARE54-白夜のペンギン		
7	JARE54-南極の太陽		
8	JARE54-ゾンデ放球		○
9	JARE54-PANSY 計画	○	
10	JARE54-昭和基地エコ生活		
11	JARE54-昭和基地の石は語る		○
12	JARE54-ブリザード並みの強風	○	▲
13	JARE54-基地内遠足		
14	JARE54-芦くら寺五人衆	○ ★	○
15	JARE54-元旦フライト		
16	JARE54-気球気体サンプリング		
17	JARE54-世界初！無人航空機気体サンプリング	○	
18	JARE54-ラングホブデ 雪鳥沢にて		
19	JARE54-スカルプスネス きざはし浜にて		▲
20	JARE54-スカーレン スカーレン大池にて		
21	JARE54-ラングホブデ 袋浦にて	○	○
22	JARE54-S17 写真集 スライドショー	○	
23	JARE54-立山と南極 スライドショー	○	
24	JARE54-		
25	JARE54-南極ミニ実験集		○
26	JARE54-		
27	JARE54-南極の音楽		○
28	JARE54-		
29	JARE54-		
30			
その他 1	仮オープニング	○	○
その他 2	オープニング	○	○
その他 3	エンディング	○	○

南極授業に向けての授業の素材には事欠かない。見るもの聞くものすべてが刺激的で感動的だ。しかし、「素材があること」と「教材になること」とは別も

のである。このことは授業者なら誰でも実感しているところだろう。今回の実践を通してそれをあらためて痛感した。

よりよい「教材」に高まっているものに触れたとき、子供は思わず心をうばわれている。知的好奇心だけではないプラス α の何かがそこにはある。きっと脳科学的にはドーパミンとかアドレナリンとかと言われるものが放出されるような何かだろうが専門外なのでよくわからない。上記のリストで言うならば、おそらく以下だと感じている。その根拠はない。子どもたちのくらいつき、反応の変化といった、授業者がダイレクトに受けたその日の直感である。

No.5「しらせ」ラミング

No. 9 JARE54-PANSY 計画

No.14 JARE54-芦くら寺五人衆

No.17 JARE54-世界初！無人航空機気体サンプリング

No.19 JARE54-スカルプスネス きざはし浜にて

No.23 JARE54-立山と南極 スライドショー

その他 2 オープニング

(2)「教材」となり得たものとそうでないものの違い

「教材」となり得たものとそうでないものの違い、これを考察することが本研究の本丸だろう。以下に自分なりの解釈を述べる。

① No.5 「しらせ」ラミング

この手のコンテンツは、一般的に説明的になりがち。めずらしい映像ではあるけれど子供の心に響くプラス α に欠けることが多い。これも砕氷航行「ラミング」を説明するだけなら、子供にとっての「教材」にはなり得なかったはずだ。



今回のコンテンツには、「しらせ」の生き様を描写してみた。すなわち、「困難にぶち当たって一度は後戻りする。しかし、あきらめたわけではない。体制を整えてまた挑戦する」という姿だ。

そんな「しらせ」が好きだ、という授業者としての思いも込めたところが

「素材」と「教材」の違いの一つだと思っている。

② No.9 JARE54-PANSY 計画

「教材化」をはかる上で留意するのは、いつのときも「本質の見極め」である。PANSY 計画を取り上げると決めたら、その本質は何かを見極めることが大切だろう。今回、PANSY 計画に潜む本質は「大きな目的を達成するために、1000本のアンテナを1本1本手作業で立てる」ということ。



もう一つ大切なことは、子供の問題解決を成立させる上で重要な「矛盾」が存在しているかどうかである。ここには、「1本1本手作業で立てる、1000本もあるのに」という矛盾がしっかりと潜んでいる。この矛盾が子供の（もしかすると大人の私たちの）予定調和を覆すのだと思う。

これも「素材」と「教材」の違いの一つだと思っている。

③No.14 JARE54-芦くら寺五人衆

「南極授業」の大きなテーマとしていたのは、富山と南極のつながりだった。一見、遠く離れた南極も、実は歴史的には実にふるさと富山と関係深いものだった。まず、その事実自体が、「矛盾」であり、「予定調和をくつがえす新たな概念形成」そのものであると言える。



さらに、これを授業で取り上げることができたのは、第1次隊員の佐伯さんや、立山氷河が認定にご尽力された飯田学芸員さんのご協力が得られてこそだった。目の前に“本物”がご登場され、新たな概念をより現実的なものとして刻み込む事ができるのは、おそらくこの方々以外にない。授業とは、これまでにない概念が子供の中に形成されること、だと常々思っている。

このような概念形成の過程が保証されていることも、「素材」と「教材」の違い

いの一つだと思っている。

④No.17 JARE54-世界初！無人航空機気体サンプリング

授業者の実感としては、おそらくこの時間帯の子供の反応が集中していたのではないと思っている。（遠隔授業だから、その感度はかなり鈍っているかもしれないが。）

では、なぜこのコンテンツが「教材」となり得たか。



一つ目は、シンプルに「ラジコン飛行機」（正確には無人航空機）が子供にとって身近な存在であり、同時にそれが「なぜ南極で？」という予定不調和を起こしていたこと。

二つ目は、それが「成功」ではなく「失敗」という場面であったこと。そのときの研究者たちの残念そうな声、くやしさにじみ出た言葉、それでも笑ってみせたあの表情、傷ついて回収された機体。。どの映像にも子供たちの心をとらえてはなさない魅力があった。

三つ目は、ついに世界初を成し遂げた研究者の、まるで少年のようなあの喜びと瞳の輝きである。

一般的に、各種報道では成功場面が伝えられることが多い。このような失敗場面を伝えられるのは授業ならではの特権ではないか。それが、「素材」と「教材」の違いの一つだと思う。

⑤ No.19 JARE54-スカルプスネス きざはし浜にて

採用した場面は「アザラシのミイラ」と遭遇したところ。授業をしながら、ここで子供の視線が集中したのを感じる。では、その要因はどこにあったか。

まず、「動物がミイラ化する」という非日常的な現象そのものがもつインパクトの大きさ。しかも、



その姿は私たちも驚くほど完全な形に近い状態だった。ひれの形もよく保存されており、顔には真っ白な歯形がそのまま残ってた。しかも、これは偶然だが、真上を向いて横たわっていたのだ。その様はまるでツタンカーメンの棺と重なるようだった。興味を超えて、そこには荘厳さすら伝わってきたのである。おそらく映像を通して、それを感じることができたのではないだろうか。そこに自分の言葉をテロップで重ねる。「いつ ここにやってきたのか いつからここで横たわっているのか それは 誰にもわからない 南極には 悠久の時間が流れている」

私は、自然解説員ナチュラリストではない。また、ミニ研究者やミニ博士でもない。一介の教員として、自分の目を見て、自分なりの窓口で感じたことを、自分の言葉で、次代を担う子供たちと授業の中で向き合わなければならないと、ここ南極ではずっとそう思ってきた。それは、常に自分と向き合うという作業の連続だった。それが「素材」と「教材」の違いの一つだと思う。

⑥ No.23 JARE54-立山と南極 スライドショー

「南極授業」の大きなテーマとしていたのは、富山と南極のつながりだった、と先に述べた。子供が自らこのような思考に向かっていくために教師がすべきこと。それは「比較の場の構成」である。



限られた時間と場の制約の中でどのように比較の場を構成するか悩ましいところだった。今回は、比較物を厳選して提示するという手法で構成してみた。振り返ってみると、比較映像を作っている自分でさえも、ふるさとの自然に多くの再発見があった。教材研究の楽しさを味わわせてもらったと思っている。

写真を撮りためていけばたしかに「素材」は増えていく。しかし、そこに教材性が浮き彫りになってくるには、自ら「比較」的思考を働かせなければならない。そういう過程を踏んで練り上げたものを子供たちに提示しているかどうか。これも「素材」と「教材」の違いの一つだと思う。

⑦ その他 2 オープニング

これは教材といえるかどうかは疑問だと自ら前置きした上で以下の雑感を述べる。

私たちは、普段の授業の中で「授業の幕開け」を意識することが多い。この授業の離陸を慎重にすることで、あとは、子供の心に火がついて議論が活発化したり、思考が深まっ



ていったりするからだ。反対に、この授業の幕開けにつまづくと、話はいっこうに焦点化されず、本質に触れることなく、子供にとっての新たな概念形成にも至らない、そういうことを数多く経験してきた。

このオープニング映像は、そんな「授業の幕開け」を担う重要なものだと個人的には位置づけている。

授業には、その教科の特質がある。その教科らしい空気感もある。そんな教科の味を出せる教師になりたいと誰もが思っていることだろう。

では、教科書もない南極の「南極授業」のもつ持ち味とは何か、その空気感とは何か。あの1分間の映像に、南極初心者である私の精一杯の南極観を含めたつもり。南極という計り知れない「素材」が、子供にとっての「教材」となることを願って。

付け加えるならば、エンディングにも、同様の意味がある。エンディングは本当にエンドになってしまっては、実はいけない。次への希望や見通しをもつことができはじめて授業は終末を迎えるのが理想。つまりオープンエンドなのだ。子供の問題解決は、問題が解決して終わりではなく、そこからさらに新たな問題が生まれて連続していくことが大切。そんな役割を果たせていただろうか。

【追記・補足】

今回のような回線をつないだ授業であっても、自作教材のもつ魅力は十分にフィードバックされたように感じた。この点は先輩教員の方々が



実践的に明らかにしてきたことだが、このような授業でも変わらない魅力を放つことは新たな発見だったと言える。

(3)「教材」となり得なかったものについての今後の改善点

① NO.8 JARE54-ゾンデ放球

この素材には、「継続は力なり」というメッセージ性を設定した。しかし、子供の心をつかむまでには至らなかったというのが直感的な感想。大きな原因の一つは「矛盾」が存在しないこと。「こつこつ研究データを積み重ねることの大切さ」をストレートに発信しただけ。この過程のどこかに、矛盾を潜めなければ、どれだけよい「素材」でも「教材」にはなり得ない。

② JARE54-昭和基地の石は語る

この素材には、「常識をくつがえす」というメッセージ性を設定した。しかし、これも子供の心をつかむまでには至らなかったというのが直感的な感想。大きな原因の一つは、「石がごつごつしている、波打ち際なのに」という矛盾を含む事実が子供にとってはまだまだ「予定調和の範囲内」だったこと。もっと子供を知らなければ、どれだけよい「素材」でも「教材」にはなり得ない。

【お礼】

今回、「南極授業」を実践するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。
紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

極地研究所

小濱様はじめ、南極授業プログラム関係者の皆様

JARE54 次隊

渡邊隊長、橋田越冬隊長はじめ、南極授業スタッフ隊員、全隊員の皆様

立山カルデラ博物館

飯田肇主任学芸員

芦峯寺五人集

第1次観測隊員 佐伯宗雄様、 故 佐伯富男ご子息 佐伯高男様

富山大学人間発達科学部共同プロ（理科グループ）

松本謙一先生はじめグループの先生方

富山大学人間発達系支援グループ

山上様

富山大学人間発達科学部附属小学校

校長 岡崎誠司先生 副校長 荒治和幸先生はじめ教職員の皆様

ふたば会の皆様 代表児童の皆様

関係各位

関係していただいたすべての皆様

2014年3月

富山大学人間発達科学部附属小学校 JARE54 澤柿 教淳

「本物の自然」に学ぶ理科の本質

学 部 松 本 謙 一

何といっても、雄大な本物の自然を扱った今回の「南極授業」、この「南極授業」の実践を通して「理科」の存在意義についていくつかのことを改めて考えさせられた。当たり前のことばかりかもしれないが・・・、ここで整理する。

1 「自然」を扱うことの意味（１）：「自然科学」と「社会科学」

社会科学は、人間の都合で変えられるが、自然科学は、変えることができない。

例えば法律は、人間社会が合理的なものにするために、自由に変えられる。「二十歳未満は飲酒禁止」だったものが、法律さえ変えれば「十八歳飲酒解禁」にすぐ変えることができる。今までだめだったことが、人間社会にとって・・・という物差しである時突然よいことにできる。ESDは、まさにこの物差しを変えようとしている試みであろう。

これに対して、自然、とくに南極という時間的にも空間的にも大きな自然、全く人間の都合通りにはならないことをまざまざと見せつけてくれているのである。

しかも、未知なことがこの地球にもまだまだあることを含めて・・・。

畏敬の念。

2 「自然」を扱うことの意味（２）：「理科」と「数学」

自然科学の中で、「数学」と「理科」を比べてみよう。どちらも「自然科学」ではあるが、全く考え方は異なる。

「数学」は、『定義』がすべて。『定義』事態を人間が固定し、それ以外の要素を省く。そういった理想的な世界の中での物事の『理』を解いていくことになる。従って、追究すればするほど、理解できる世界が開けてくる、すべてが分かってくるのだ。しかも、実際に体験できない世界も理想的な世界として創り出すことができ、無限に抽象的な世界を広げることができるのである。

これに対して「理科」はどうであろうか。テキストは、目の前の「自然」、複雑で得体の知れない「自然」そのものなのである。つまり、「数学」と異なり、「複雑で得体の知れないもの」が科学の対象なのである。調べても調べても新たな問いが生まれてくる世界である。

したがって、「固定化された真理」は存在しない。今の時代に正しいと客観的に認められている自然の法則も、もしかしたら次の時代には「真理ではない」ことが明らかになるかもしれないのだ。この「動的な科学観」をもつことこそ、「理科教育」の本質なのかもしれない。多くの知識を覚えさせても、何ら意味がないのかもしれない。

今年度の共同プロジェクトでは、わずかではあるが澤柿先生の南極授業に参加させていただいた。南極からどのような授業をされるのか、とても興味があった。その南極授業を間近で見ることができ、そこから学ぶことが多かった。私が学んだことをまとめていきたい。

1 ライブ中継授業の意味

澤柿先生は、南極に出られる前「普段の授業では目の前の子どもとのやり取りを大切にしている。中継では子どもの姿が見えないのでやりづらい」と言っておられた。日本での子どもの表情や様子が分からないので、日頃の授業とは形式が違ってくる。ただ一方的に伝達することを不安に思われたのだろう。

しかし、南極からの澤柿先生の授業は、大変心揺さぶられるものだった。授業を通して、私自身「南極のことは何も知らない」ということを自覚することから始まった。例えば、南極観測船「しらせ」の氷の割り方である。一度バックして勢いをつけて割る、そのように進むからこそ数週間もかかることを初めて知った。南極観測船についてですら、そのような大きな感動がある。ましてや南極には、現地に行かなければ感じることはできないものがある。それを伝えることができたのは、現地に行かれた澤柿先生の想いがあったからであろう。単に事実だけでなく、その素材の何を伝えるかということ、授業者の澤柿先生が練りに練って考えておられたことが伝わってくる授業だった。場所を離れたライブ授業でも、ねらいを明確にしていくことの授業の基本に変わりはないことを感じた。

2 見せ方の工夫・授業構成の工夫

澤柿先生は、単に現地から教師が話をして伝えるということだけでなく、映像を駆使しての授業だった。テレビのドキュメンタリーを見ているような感じだった。約6割は映像だったと思う。その映像から伝わってくるものは大きかった。

例えば、海岸に打ち上げられているアザラシのミイラ。このミイラから伝えたいものは何か。それは、気温の低さのため腐りにくいとのこと。この映像だけでも、地球の広さ、時間の流れの大きさをを感じる、そこにいっしょに寝そべる澤柿先生。映像ではあるが、その姿に南極の広さ、時間の奥深さを感じた。そこに授業者の想いが感じられる。もしかしたら、そのまま見逃してしまうかもしれない事象ではあるが、そこに眼を向け、授業の内容として価値を感じ、授業の材とすることの意味を感じた授業者。何を取り上げ、どのように見せるか、これは普段の授業でも同じことであろう。

また、理科の時間だけでなく、「生活科の時間」、「音楽の時間」、「道徳の時間」というように、南極を材としながらさまざまなねらいを設けて授業が構成されていた。小学生の子どもたちである。ただ実験を見せたり、説明をしたりしているだけでは、集中力が続かないだろう。特に、「道徳の時間」では、失敗を恐れずチャレンジする人の様子を見たり、第1回の観測隊として参加した芦峯五人衆の話を聞いたりするなど、心に訴える内容だった。南極授業を通して、心が育まれる授業構成がとても印象に残った。これは、普段の授業でも大切にしていかなければならないであろう。

凍り付いた南極大陸から送信されてくる澤柿先生の熱い授業をほぼ満席の黒田講堂の片隅で聴講したのは1月末の日曜日だった。会場の子供達がこの授業から何を感じ取るのだろうか思案していると、サングラスで紫外線から眼を保護する昭和基地スタッフの映像を見て Midgley の話を思い出した。Thomas Midgley Jr. は 1930 年に世界で初めてクロロフルオロカーボン類 (CFC、いわゆるフロン類) を開発した人物である[1,2]。

1920 年代、氷を使用して冷却する冷蔵庫 (icebox) からコンプレッサーを電氣的に作動させる冷蔵庫への移行が始まった。毎日のように氷を補充し、融けて溜まる水を捨てる作業は誰でも面倒だった。しかし当時の冷蔵庫では熱交換媒体に有毒な化学物質 (塩化メチル、アンモニア、二酸化硫黄、水銀など) が使われており、安全上の問題が危惧されていた。

そこに Midgley と GE 子会社の同僚 A. L. Henne が合成したフレオン-12 (CCl_2F_2) が登場した。無毒で非引火性という性質はエンジニアにとって理想的で、また安価であることから瞬く間に普及した。安全性と不燃性をアピールするため、聴衆の前で Midgley 自ら吸引したフレオンを吹きかけてロウソクの火を消してみせることもあった。フレオンを含む CFC による成層圏でのオゾン層破壊[3]が判明する何十年も前のことである。

Midgley はテトラエチル鉛 (TEL) の開発にも深く関与していた[4]。TEL はエンジンの優れたアンチノック剤であったが、鉛化合物を自動車等の排気ガスとともに大気中に拡散させることになり、地球規模での環境汚染を引き起こした (幸い、大気濃度を見る限り南極では汚染は進んでいない)。また TEL は当初、製造工場等の作業従事者に対して鉛中毒による甚大な健康被害をもたらし、Midgley 自身も一時期療養生活を送った。

生前は賞賛され数多くの賞を受けた Midgley だが、現在の評価は随分と手厳しい。CFC と TEL が環境破壊や健康被害を招き、それらの製造と使用が多くの国で禁止されている状況から、”A Two-time Environmental Loser” と評されもしている[2]。人の行為が他の人や環境に及ぼす影響を長期的に見通すことは困難であるからこそ一層重要である。今回の南極授業に込められた澤柿先生のメッセージが、ひとりでも多くの子供の将来により良い影響を与えることを願っている。

文献

- [1] Williams, K. R. *J. Chem. Educ.* **2000**, 77, 1540.
- [2] Kauffman, G. B. *J. Chem. Educ.* **2002**, 79, 559.
- [3] Elliott, S.; Rowland, F. S. *J. Chem. Educ.* **1987**, 64, 387.
- [4] Nickerson, S. P. *J. Chem. Educ.* **1954**, 31, 560.

澤柿教淳先生『南極授業』にみる授業改善へのヒント

林 衛

2012 年度に実施した澤柿教淳教諭による『南極授業』のうち、黒田講堂会場と富山大学附属小学校体育館会場の 2 回に参加する機会を得た。1 回目は橋本大一郎教諭とともに会場司会役として、2 回目は観察者としての参加であった。

しらせ乗船のために日本を出発する直前まで、数度の打合せを経て、澤柿教諭のねらいがおおよそつかめてきた。小学校 1 年生から 6 年生までの児童、さらにはともに授業に参加する保護者や各クラスの担任ほか小学校教師たちに、知的に刺激的な気付きをもたらすオリジナル撮影・編集映像とライブ中継を組合せ、南極あるいは南極調査という素材を集め、吟味して提示するというねらいのようだった。

イメージをもって『南極授業』に入れるための工夫

そこで、黒田講堂側の会場づくりとして、以下の二つを試みた。1) 来場者が南極に関するイメージを高められるよう、南極観測隊同行記者による一連の新聞記事を拡大コピーし、ラミネータを通した A3 サイズのポスターにして、来場者の通り道に展示した。2) 開演時間を数分早め、南極から澤柿教諭が登場する直前のわずかな時間を利用し、国立天文台制作の四次元デジタル宇宙ビューワ「Mitaka」(実際には派生版の Mitaka Plus マック版)を用い、日本を離陸して宇宙からみた地球の姿をプロジェクターでスクリーンに投影し、日本からオーストラリアを経て南極に至る経路や白夜となっている南極大陸のようすと垣間見る場面を演出した。また、国立極地研究所が制作している南極に関するリーレットは、ほかの『南極授業』ではネタバレにならないように終了後に配付する場合が多いそうだが、開場から開演までの時間にページをめくることで、イメージや疑問がふくらむ効果のほうが大きいと判断し、来場時に受付で配付してもらうこととした。

本番数日前のリハーサルの段階で、ほぼ完成していた映像群を確認し、知識があってもなくとも新鮮な気付きのある南極授業が展開されていくにちがいな

いとわかっていたからできた判断でもあった（会場側での工夫が、どれだけ功を奏したのか、きちんと確かめる術がないのが、残念ではある）。

小学校教師の経験が生きた

さて、出発前も帰国後も、澤柿教諭は「ナチュラリストに堕したくはなかった」と語っている。生きものの名前や自然現象についての一通りの解説法を身につけ、その道の専門家の理解する科学的内容を専門家に代わりに、「わかりやすく」解説できる人が、ここでいう「ナチュラリスト」の意味するところらしい。専門研究者による解説のミニチュアをやるくらいならば、専門研究者に直接語ってもらえばよく、わざわざ小学校教師が南極研究の宣伝に協力する必要はない、といった思いならば、たいへんよくわかる気がした。しかし、澤柿教諭は、ほんとうの意味での自然の体験者かつ紹介者である「ナチュラリスト」を体現されたのではないだろうか。

物理法則を理解するためには何が必要だろうか。「数式を扱える」(1) ようになれば、理解できたといえるだろうか。小学校でも、てこの法則は数式を用いた明確な理解が求められているが、距離と重さの関係を発見し、パズルを解くように計算ができるようになっても、てこの法則の理解にはまだ途上だ。「法則あるいは数式の意味をことばで表現できる」(2)、「体感的なイメージとして法則が概念化される」(3) を含む三つが揃うのが不可欠だ。力学や電気、電磁気学に関して、複雑な計算問題は解けるけれど、本質的な概念形成ができていない一流大学の学生の分析から、いまアメリカと日本とで、高校や大学レベルの物理教育の授業のやり方が根本的にみなおされている（例えば、エドワード・F.レディッシュ：科学をどう教えるか——アメリカにおける新しい物理教育の実践，日本物理教育学会，丸善（2012））。

南極大陸に近づくしらせが、部厚い氷床に行く手を阻まれる場面で、ラミングという航法をとる。前進して氷床に体当たりして滑り上がり船体の重みで氷を割り、後退してから再び前進し氷を割るというラミングを繰り返していくのだ。その原理の詳細をイラストを使い「わかりやすく」紹介する方法もありえるが、澤柿教諭はしらせが氷の上を船体を軋ませながら滑っていく大きな音と、それに続き氷が割れる音とを、船首部分に立ち映像とともに伝えてきた。あたかもしらせ船上にて、ラミングの本質を実感させられる機会となったのだ。

小学校教師として 20 年以上にわたり、授業づくりに取り組んできた澤柿教諭の取り組み一つ一つの意味を、このように分析し、授業改善へのヒントをみいだせるだろう。

学年別注目度・集中度のちがい

ところで、黒田講堂ではライトのあたる舞台上を行き来しながら司会役を務めたためやや暗い会場のようなすを観察する余裕は皆無であった。2 回目の附属小学校体育館では、同じ内容の授業に対して、各学年ごとに注目度・集中度にちがいがどうであるのか、観察したいと考えた。低学年はあきってしまうことはないだろうか。

結果は、画面に近い低学年ほど集中度が高く、後ろに行くほど、とくに前列の頭に重なって映像が隠れてしまいがちな高学年の画面がみえない児童ほど注目度が下がる結果であった。近くでみていた 4 年生以上の担任教師の多くがクラスの異変に気づいていたが、席を動くタイミングがなく、手の打ちようがないようすであった。最後部の 6 年 2 組は、6 年 1 組の後ろで、かつ背の高いほうの 1 組男子の後ろの背の低いほうの 2 組女子が座るなど、たいへんみにくいようすだった。「みえないのに最後までがんばったな」との担任教師の声かけが印象的であった。

ふだんの朝礼の際は、垣間見る登壇者の声に集中していればよい。しかし、たとえば、スクリーンのなかを独特な脚の運びで歩いて行くペンギンの動作に注目してはじめて、本質をみいだせる映像中心のこのような授業の場合、やや斜めからになったとしても大画面に近い位置から高学年の児童が映像を注視できるように座席配置を決めるべきであっただろう。低学年児童は、横で真剣に映像にみいる高学年児童のすがたにさらによい刺激を受ける効果もあったにちがいない。

教員南極派遣プログラム「南極授業」への提言

安本史恵

背景

本プロジェクトの基盤をなす教員南極派遣プログラムについて、情報・システム研究機構国立極地研究所の実施要項においては、『南極授業』により、国内の小・中・高校の生徒および国民の皆さまに向けて、南極に関する理解の向上のための情報発信や帰国後の活動のための知識の習得や自己研鑽をしていただくために、文部科学省（南極地域観測統合推進本部事務局）と連携して実施（参考文献1）としている。わたしはこの南極授業の計画および実施に携わり、授業当日（2013年1月27日）は国内側（富山大学黒田講堂）の参加者の反応を観察した。このレポートにおいては、今回南極授業に参加した小・中・高校の生徒、大学生、生徒の親を中心とした一般市民のような対象者にとって、仮に今後また授業を行った場合に、より「南極に関する理解」を向上させるためにどのような情報発信の改善点が考えられるかについて論じたい。

結果

南極地域観測隊の同行者として南極より授業（約105分間）を行った澤柿教淳教諭の授業計画は、以下の三部の構成となった。

（序盤）昭和基地からみた地球温暖化 ～砕氷艦「しらせ」が厚い氷に阻まれたわけ～

（中盤）南極観測の新たな挑戦 ～最新映像&隊員さんへの質問タイム～

（終盤）立山と南極 ～特別ゲストと対談～

具体的には、中盤の授業、約30分間だけを取っても、南極昭和基地大型大気レーダー計画「PANSY計画（Program of the Antarctic Syowa MST/IS Radar）」、帰還する無人航空機による上空エアロゾルの補足、アデリーペンギンの営巣地があるラングホブデ・袋浦の映像をはじめ、多岐にわたる内容が詰め込まれた構成になった。30分間における個々の内容は以下のようなものである。PANSY計画について、人為的活動の少ない南極大陸はノイズが少なく大気に関する現象を観測するのに適しているためレーダーを設置して観測することや、1045本のアンテナを手作業で構築することを説明（参考文献2）した。上空エアロゾルの補足について、自力で帰還する無人航空機を南極で運用するのは世界初の試みであることを説明し、成功に至るまでの試行錯誤の映像を視聴させ、エアロゾルそのものについて解説を行った。アデリーペンギンに関しては、営巣地での生態のみならず、行動範囲について、例えば、隔てられた海の間を最短距離で移動することが解析されたなど、説明が続いた。

考察

多様な内容が凝縮された授業構成であったため、必然的に授業のスピード（特にテロップ）が速く、内容が次々に切り替わって行くという状況になった。このことに起因して、会場の参加者が、今どの内容が話題になっているのかを見失いがちだったのではないかと懸念する。

だが、たとえ一つの内容を掘り下げることを要求したとしても、それは105分間という制限された授業可能時間を考えれば、相対的な問題に過ぎない。そのため内容の深度ではなく、別の角度から一つ今後の改善点を取り上げたい。

この高速な授業においては、授業時間中リアルタイムで中継が繋がっている昭和基地の一室と、例えばアデリーペンギンの営巣地のようなVTRとが交互に視聴されることになった。それを今回は「では袋浦に行ってみましょう」というような形で切り替えていたのだが、臨場感を持たせる演出を狙ったことが却って、何がリアルタイムで何が過去に取得した映像なのか混乱を生じ、南極と今繋がっている、という実感が浮遊してしまうと考えられた。

南極現地と直接会話できるという貴重な体験が、わざわざ教員を南極に派遣するもっとも大きな意義であろう。現代は、インターネットの普及にともなって、世界各地と廉価もしくは無料で話ができる時代であり、子供たちは親世代と比べて遠隔地と通信できることに対して感慨を持たない可能性がある。それでも南極は世界各国と比較して特殊な地域であり、その場所と直接交信できることは大きな意味があるはずである。ならば、南極でしかできないことを参加者の「リアルタイム」の中に組み込むことをもっと重視し、例えば今回後半に行われた、複数の南極観測隊員が現地で通信に参加するという希少性を子供たちにきちんと訴えたい。そのために、「リアルタイムのもの」と「過去に取得した映像」とをしっかりと切り分ける必要があると考えられる。

参考文献

1 平成24年（2012年）度 教員南極派遣プログラム 実施要項

2 “見る力”の発展 南極から風をよむ、Nikon、

<http://www.nikon.co.jp/channel/light/chap05/sec05/index.htm>（2013年2月27日取得）

本年度の理科プロジェクトは、附属小学校の澤柿教諭の第 54 次日本南極地域観測隊参加を受けて、当初の予定から実施内容を変更したと聞く。筆者は本年度初めて理科プロジェクトに参加するので推測になるが、例年とは異なる特別な実施年度だったのだろう。プロジェクトの軸は、2013 年 1 月 27 日に黒田講堂、1/31 に付属学校でそれぞれ行われた「南極授業」である。南極授業の肝は南極基地との中継で澤柿先生に授業をしていただく所であり、プロジェクトの主な作業はこの授業のセットアップであった。詳細は私よりも前線で働かれた先輩諸氏の報告に記載されていると思うので、そちらを参考にされたい。

私が当日関わったのは黒田講堂で実施された回なので、こちらに関する所感を以下に述べたいと思う。この回は基本的に一般向けに開放されたイベントであるが、当日の客層やアンケート結果から判断する限り、参加者の多数が附属学校の児童及びその保護者の方であった。その点では、今回のイベントはインフォーマル教育やアウトリーチ活動の類というよりも、課外授業に近い性格のものであったと言える。筆者が当日の様子やアンケートから受けた印象だが、聴衆の興味は南極の自然そのものよりも南極基地や技術試験などの方へ寄っていたようだ。今回の実施の特徴に、「南極にいる澤柿先生」の参加や「立山と南極の繋がりを知る先人」の招待など、「人」を強く意識した構成であったことが挙げられるが、このような興味の傾向は、聴衆集めと合わせた当日の構成が功を奏した結果とも取れる。構成の工夫によって「自然科学」よりも「技術」の方へ聴衆の意識が向いたとすれば、非常に興味深い。筆者の個人的な印象は別としても、児童が南極での生活やそれに関わる設備、実験業務を通じて自然科学や科学技術へ興味を持つ過程の考察は、今回の貴重な実施を消化する上で欠かせない視点であろう。蛇足であるが、最後にゲストの方も言及された南極基地との中継そのものの凄さがあまり聴衆に伝わっていないのは惜しい気がした。会場での無線技術のデモ等があっても良かったかもしれない。

今後は、理科プロジェクトでの実施云々を置いておくにしても、今回の貴重な実施を消化するための事後の取り組みが重要となろう。「南極にいる澤柿先生」と「南極にいた澤柿先生」が行うべき授業内容も異なるであろうし、「南極にいた澤柿先生」に対する児童の捉え方の経年変化も興味深い。それらの取り組みの結果から、学習内容に適した実施形態・構成が何らかの形で出てくれば、今回の実施の価値もより一層高まるというものであろう。ただし、そのようなスキーム作りには現場で児童生徒に接している付属学校の先生方以上に、学部の教員に労をとる責任がある。今回の実施に特段の寄与が無かった己を反省し、次年度の取り組みへつなげたい。

音楽教育グループ

学部	松本 清	森田 信一	千田 恭子	坂本麻実子
附属小学校	藤井 亜弓	村井 悠子		
附属中学校	関口 道子			

1 研究の目的と方法

音楽科は今まで、教育実習生の指導を通して、大学と密に連携が図られてきたが、現在では、音楽科学部生・実習生がいないため、大学との連携が図りにくくなった。そこで、本共同プロジェクトでは、附属小・附属中学校の研究会の事前・事後研修を通して、より質の高い研究授業の在り方や授業の技術の向上によって、附属の使命でもある、教科で発信することをより充実させていくこととした。また、音楽科は、現場では、教員が一人または二人の少ない教科であるため、専門性の多岐化が困難となる。そこで、より多分野からの視点で研究していくことで、現場での音楽教育をより充実させたいと考え、アドバイザーとして、上記の学部の教授方にご協力いただいた。さらに、研究校としての特色を生かすために、研究会の事前・事後研という形式での共同プロを土台とした本共同プロジェクトの取り組みによって、学部と中学校・小学校、また中学校と小学校での教育現場の実態についての情報交換をも行うことが可能となり、今後の教科指導を、より系統的に取り組みことができると考える。

2 小学校における活動報告

◆研究発表会（6月）公開授業の事後報告会

第2学年「ききあいながら、たのしくうたおう」 授業者 藤井 亜弓

歌唱イ・エ、鑑賞イ 【共通事項】 音色、強弱、反復、問いと答え

第3学年「ドリア旋法による音楽づくり」 授業者 村井 悠子

音楽づくりア・イ、鑑賞イ 【共通事項】 旋律、音の重なり、反復、変化

◆研究シリーズ（12月）公開授業の事前検討会

第2学年「2年1組のテーマソングをつくろう」 授業者 藤井 亜弓

歌唱イ、音楽づくりイ 【共通事項】 リズム、旋律、拍の流れ、フレーズ、反復

◆研究シリーズ（1月）公開授業の事後報告会

第3学年「ひびかせよう すてきなハーモニー」 授業者 村井 悠子

歌唱イ・エ 【共通事項】 音色、旋律、強弱、音の重なり、反復、変化

3 中学校における共同プロの研究成果

◆創作における創作ソフトの活用～Muse Score～

同じテーマに向かってそれぞれが旋律をイメージし、そのイメージを伝え合う活動を通してコラージュにしていくことで、個々の思いが生かされた1曲に仕上げるができる。その過程として、三部形式を上手く取り入れることで、旋律が音楽的に生かされた楽曲になる。そのように効率的・音楽的にそれぞれの旋律を完成させる喜びを味わわせるためには、イメージを音楽にできる媒体が必要である。生徒の即興的な表現を、効率的に具体化した楽譜（音楽）にするためにコンピュータを補助として活用し、イメージを旋律にする。そのような創作活動においては、コンピュータの活用が、効果的であると思われる。このようなソフトはいくつかあるが、その目的によって使用するとよいということが解明された。Muse Scoreは、楽譜の知識がない生徒でも、即興的に、音を鳴らしながら、楽譜にしていくことができるため、生徒の創作意欲を高めつつ、創作活動ができた。また、作品が出来た後、そのまま楽譜として印刷できる点などから、その後の活用の多様性が期待できる。

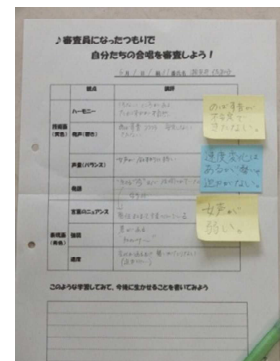
○創作の過程

・8人グループで話し合いをして、一つのテーマを考える。ペアで曲のイメージを伝え合い、それぞれコンピュータでモチーフを考え、楽節にし、それらを、組み合わせて1曲にする。＜三部形式にする。＞



◆合唱指導における審査の視点

合唱指導において、自分の思いを効果的に表現していく方法について研究した。中学校の研究テーマである言語活動も生かし、審査の視点からの音楽的評価、講評を言葉で書いていくという取り組みを行った。普段、パート練習でパートリーダーのみが指導やコメントを伝えるという形式の練習形態が多かったが、今回のような取り組みでは、普段あまり意見や思いを伝えられない生徒でも、積極的に伝えようとする事ができた。また、付箋を使うことで、一斉に思いを書き、それを一斉に共有することができるという点で、時間短縮しながら、より一人一人の思いを挙げていくことが可能になった。また、文字で残ることで、その後の合唱の仕上げの段階までも有効に活用したり、他クラスへの情報交換・共有にも活用することができることが解明された。



造形教育グループ

—幼小中のつながりを意識しながら、
造形教育で身につける力について研究する—

代 表 : 隅 敦
附属幼稚園 : 中田 良子 (H23・H24), 林 智子
附属小学校 : 大島 孝明
附属中学校 : 藪 陽介
附属特別支援学校 : 中江 麻由美 (H23)
人間発達科学部 : 鼓みどり, 上山 輝

本研究グループは、校種間の造形教育における連携を目的にし、可能な限り集まって意見交換を行うことを目的に会を行うことにした。

平成 23 年度

校種ごとに授業研究のテーマがあり、メンバーの負担にならないことを考え、幼・小・中の授業研究会を相互に見合うことから始め、その後話し合いをもって、幼小中の連携について考えるということでスタートした。しかし、メンバーが、それぞれの附属の公開授業に参加できたとしても、その協議に互いに参加すること自体、なかなか難しいことが分かった。また、それぞれの校種で、授業提供をしていただいたにも関わらず、結局共通のテーマを絞り切れなかった。

ただし、主席可能な授業研究に参加し、合わせて教育実習も参観することで、校種を超えた課題が見えて来た。そうした中、附属幼稚園における教育実習において、実習生が表現に用いる材料・道具を使いこなせない場面に遭遇したことは、見逃すことの出来ないできごとであった。実習生がダンボールを用いて作成した玉入れをするための箱は、実習生が背負って運ぶタイプのものであったが、園児が追いかけて紅白の玉を入れるうちにぼろぼろになってしまったのである。

ここに、大学に入学する以前に習得しているはずのはさみの使い方、道具の使い方と技法がきちんと身につけていないことを意識することとなった。また、材料としてのダンボール箱の強度を理解し、ガムテープを用いた用途に合わせた接合の方法等の技術が未習得であることについての問題点が浮き彫りになった。前回の学習指導要領の改訂で授業時数が大幅に削減されて以来、小学校の段階で十分な指導がなされないままに現在に至っている学生は多く、授業における用具の扱い方のレベルは年々低下しているという実態がある。したがって、教員養成の現場でも用具の扱い方を指導していく必要性も求められることが確認された。

用具の存在を確認するために幼・小・中で用いられる用具の購入を行い、発達段階に応じたそれらをどのように使いこなして行くのかについて、用具のサンプルセットを作成す

ることにした。

平成 24 年度

月 1 回第 2 土曜日の午後 3 時から 2 時間、概ね揃った用具のサンプルセットの確認をしながら、各校種で身につけるべき教科書の確認等中心に情報交換を行っていった。

小学校図画工作科教科書に掲載されている用具を学年ごとに初出の段階に整理して改めて並べてみると、学年が上がっていくに連れて、木工用具なども出てくるが、描画に用いる用具は中学年頃までにほとんど使用法を押さえることが求められていることが分かる。したがって、6 年生になると全ての用具を必要に応じて使いこなして表現を行うことができるように構成されている。

ここまでの協議で、幼稚園から中学校までの約 9 年間の造形活動の共通の研究テーマの設定は困難が伴うが、平成 24 年度の協議の内容から、幼・小・中で共通の材料・用具を使用した実践を行いながら、実践を分析することになった。ちょうど附属中学校の敷教諭がモダンテクニックを取り上げた実践研究が行われたこともあり、その授業分析の結果から、デカルコマニーを用いての実践を幼・小・中と行うことになった。

附属小学校の大島教諭がかつて 2 年生で実施した、デカルコマニーから発想して絵に表す題材を、幼稚園、小学校、中学校でそれぞれ実施することになった。その際の研究の観点として以下の 2 点が挙げられた。

(1) 何を比較するのか

- ・何に見立てたか。
- ・どのような物語をつくっているか。
- ・周りに何を描き足しているか。
- ・中学生でも、プリミティブなことをやると、もしかしたら幼稚園や小学校の子どもと同じようなことをするのではないか。
- ・見立てるときに、基になっているデカルコマニーの角度や配置の仕方に違いはあるのか。

(2) 検討事項

- ・デカルコマニーに使う絵具は、幼稚園はポスターカラーの共同絵の具。小学校と中学校も同じものに揃える必要があるのでは。
- ・表現した後、園児、児童、生徒がどのようなことを考えて表現したのかが分かるように、小学校と中学校はワークシートやアンケート、幼稚園はビデオでインタビューするなど、記録を残す。

以下、平成 25 年度の共同研究に継続する。

家庭科教育グループ

特別支援学校小学部の生活単元学習における

家庭科分野の授業実践研究

ーミシン、アイロンを使用してー

附属特別支援学校： 高附 真梨子
附属小学校： 森永 郁江
附属中学校： 山崎 陽江
学 部： 磯崎 尚子（代表）

はじめにー研究の背景と構想ー

平成21年3月に改訂された特別支援学校学習指導要領において、「各教科等を合わせた指導」として「生活単元学習」は「児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実践的・総合的に学習するものである」¹⁾とされている。

本授業研究では、特別支援学校小学部5、6年児童の「新しいことに挑戦したい」という思い（望む姿）から、将来、家庭や地域生活で「手順表、案内表示などの情報を読み取り、活用する」「分からないなど困ったときに周りに助けを求める」「どこが分からないのかを表す」「周りの人とやり取りする」ことができる児童の姿（望まれる姿）の実現を目指した。そこで生活単元学習を取り上げ、「生活科」の「役割」「手伝い・仕事」の観点から、ミシンやアイロンを使い、教師や友達と一緒に巾着袋やコースターを製作し、教師、友達や家族にプレゼントする「小3組きんちゃくやさん」及び「みんなで作ってプレゼントしよう～小3組クラフトショップ～」の単元の授業を構想し実践した。

1. 研究授業の概要

研究授業は、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校小学部3組で行った。授業対象児童は小学部5、6年児童5名である。始めに「小3組きんちゃくやさん」の単元開始時（平成24年8月）の実態について述べる。裁縫の経験については、手縫いの刺し子、パッチワークやハンカチなどの小物のアイロン掛けの経験がある児童がいた。ミシンを扱った経験のある児童はいないが、家庭で母親がミシンで小物を製作している様子や、テレビドラマで洋服をミシンで製作している様子を見て、興味をもっている児童もいた。

そこでこの単元では、ミシンやアイロンなどの道具²⁾を使って小物作りをし、教師や家族にプレゼントする活動を設定した。この活動を通し、児童の興味・関心と発達段階を考慮しつつ、ミシンやアイロンなどの道具を安全に正しく取り扱う学習経験を積ませたいと考えた。初めて使う道具を使って製作できる簡単な小物で、布の柄やひもの色が選べたり、いろいろな使い方ができたりしてプレゼント相手から多様な反応が返ってくることが考え

られることから、初めに取り組んだ単元「小3組きんちゃくやさん」では巾着袋を製作することにした。ミシンやアイロンは初めて扱うので、工程が短く、より簡単に製作できるポシェットやあずま袋をまず製作し、校外学習や他の授業場面で自分が作った物を使い、作る楽しさ、できた喜び、使う楽しさを経験した。そして、次に、工程が長く、難易度が上がる巾着袋の製作に取り組むこととした。

1校時の展開は、学習課題1「準備をしよう」、学習課題2「巾着袋を作ろう」、学習課題3「発表しよう」で構成した。

学習課題1では、「ポストタイム」でプレゼントした相手からの手紙や動画のメッセージ、製作中の巾着袋のプレゼント相手からの動画メッセージを発表し、児童の製作意欲が高まることを意図した。

学習課題2では、友達とペアになり、一人1個ずつ巾着袋を製作した。アイロンの工程は、安全面に配慮し、アイロンの扱いに慣れていて技術的にも高い児童が担当し、各ペアや教師からの依頼を受けて活動した。各工程の中には児童によっては技術的に難しい活動もあるが、『手順表』や『チェックシート』を見ながら繰り返し製作を行うことで技術面での向上を図りつつ、困ったときには友達や教師に必要な支援を求めて解決する力が付くことを意図した。

学習課題3では、製作を振り返り、チェックシートを提示して各工程のチェックポイントに従ってうまくできたところや難しかったところを発表するようにした。自分の得意・不得意を認識したり、自信や注意点への気づきを引き出したりすることを意図した。この場面をより友達同士で成果を共有し合える場にするため、授業改善を行った。授業改善後（After・11月初旬）には、実物投影機を使い、実物を拡大してテレビ画面に映してチェックポイントに注目して全員で評価することにした。

授業実践の結果、単元終了時には「自分で準備や片付けをして活動をスムーズに進められるようになった」「チェックポイントを意識して製作したり、振り返ったりするようになった」「友達同士で声を掛け合ったり、依頼を聞いたりして活動を進めるようになった」「喜ばれることを励みに決められた製作時間内、集中して取り組むようになった」など児童の意識や意欲などに変容が見られた。ある児童は、家庭でのお手伝いチャレンジ活動でハンカチのアイロン掛けや学校に提出する雑巾のミシン掛けに保護者と一緒に取り組むようになった。保護者からは、ミシンやアイロンなどは今までは危険な道具として児童の前で使用するのを避けてきたが、「針は怖い」「アイロンは熱い」ということが分かり、児童が安全に正しく取り扱うことを意識できるようになったことで、家庭で保護者と一緒に取り組む活動の広がりにつながった、との肯定的評価を得ることができた。

しかし、この「小3組きんちゃくやさん」の単元では、巾着袋完成までの工程が長く、工程の流れの理解が難しかったり、注文を聞いてから届けるまでにかなりの日数が開いてしまったりした。この反省を活かして、次の「みんなで作ってプレゼントしよう～小3組クラフトショップ～」の単元では、児童が見通しをもって取り組み、完成した達成感をより多くの回数で感じられるように、また、プレゼント相手とのやり取りの機会をより多くもてるように、1校時で仕上がるコースター製作に取り組むこととした。コースターは布コースター、ラミネートコースターとし、布コースターは巾着袋製作時に上達したミシンやアイロンの技術を使い製作することとした。1校時で仕上げるために集中して取り組む

ことや分からない、うまくいかないなどのときには周りに支援を求めて活動をスムーズに進めることも意図した。1校時の展開は前単位と同様とし、プレゼント相手とのやり取りは生活単元学習の授業時間外で行うこととした。

2. 授業の結果分析と考察

(1) 授業の様子

初めに取り組んだ単位「小3組きんちゃくやさん」では、児童にとって初めて扱う、ミシン、アイロン、裁ちばさみ、糸切りばさみ、ひも通しなどの道具を使ったので使い方も分からず、初めの頃は難しい、怖いという気持ちをもっていた児童もいた。しかし、手順表を見ながら教師の説明を聞いたり、示範を見たりして何度も道具を繰り返して使っていくうちに上手に使えるようになってきて、次の単位「みんなで作ってプレゼントしよう～小3組クラフトショップ～」では、教師に頼らなくても手順表を手掛かりにして児童同士で製作を進めることができた。糸の始末やミシン掛けの線などのチェックの眼が厳しくなるなどもっと上手に仕上げたいという質の向上を目指す気持ちも出てきて、自分で気付いたり、友達に教えられたりして修正する姿も見られるようになった。

＜「みんなで作ってプレゼントしよう～小3組クラフトショップ～」の
布コースター製作時に用いた手順表、チェックシート＞

<p>布コースター</p> <p>1.アイロン</p> <p>準備するもの オーダー表を見て柄入りの布、無地の布</p> <p>アイロンのチェックポイント ぴったり</p> <ol style="list-style-type: none"> 2まいの布を あわせる 高附先生に報告 「高附先生、チェックをおねがいします。きてださい。」 アイロン 3かい 1, 2, 3 プリント紙、マークを 無地の布に おく アイロン 両手で ぎゅっと 10 かけえる (プリント紙、マーク) <p>*さいごの人は スイッチをきる</p>	<p>ジグザグミシン</p> <ol style="list-style-type: none"> 布を 入れる 針を さす 押さえレバーを 下げる スタートスイッチ しるして ストップスイッチ 布のはしまで 手まわして めく 針を 改め直して、押さえレバーを 上げる 布の向きをかえて、残りの端をめく(⑧～⑨) 糸切りにかけて 糸を切る。 <p>*さいごの人は、スイッチを切る 2人で高附先生に見せにいく</p>	<p>布コースター</p> <p>4.糸切り</p> <p>準備するもの 糸切りばさみ、ごみ入れ</p> <p>糸切りのチェックポイント 糸がでていない</p> <ol style="list-style-type: none"> でている糸を 切る 友達チェック 「○○さん、チェックをおねがいします」 →高附先生に報告 「高附先生、チェックをおねがいします」 アイロンプリントの紙を そっと はがす
<p>布コースター (名前)</p> <p>チェックシート</p> <p>月 日</p> <p>へ プレゼント () 高附先生</p> <ol style="list-style-type: none"> アイロン ジグザグミシン →うらのチェックシート 糸切り 	<p>2. ジグザグミシン</p> <p>チェックシート</p> <p>ジグザグぬいのチェックポイント 布のはしを まっすぐ</p>	

＜友達同士声を掛け合いながら製作を進めたり、評価し合ったりする様子＞



（２）授業を終えて

児童たちは、巾着袋やコースターをプレゼントしたい相手を選び、布やひも、アイロンプリントしてほしいものなどのリクエストを聞いて、友達と協力して製作し、出来上がった物をプレゼントして喜んでもらうという経験を繰り返し積んでいった。児童たちは、この過程を通して、プレゼントしたいという意欲が高まり、より良い製品を作ろうとする向上心を持って製作に取り組む姿が見られるようになった。

この「小3組きんちゃくやさん」「みんなで作ってプレゼントしよう～小3組クラフトショップ～」の単位を通して、児童は、友達と助け合ってプレゼントを製作し完成させる中で達成感ややりがいを、そして、自分たちが製作したものをプレゼントすることで相手に感謝され、より良い物を作ってもっと喜んでもらいたいという働く喜びや向上心を、育てることができたと思われる。

3. おわりに

知的障害のある児童生徒に対する特別支援学校の指導では、中学部・高等部における「職業・家庭科」や「各教科等を合わせた指導」の「作業学習」で、縫製分野としてミシンやアイロンなどの道具を使用して学習を進めることがあるが、小学部段階で取り扱うのは珍しいことと思われる。今回の授業で対象とした小学部高学年の児童の実態や興味・関心を考え、道具の安全な扱い方、児童の実態に合わせた適切な指導を行えば、ミシンやアイロンなどの道具を使用して学習を進めることができるのではないかと思い、研究授業を構想した。

授業構想にあたり、どのような能力や意欲などを児童に育成するのか、そのためには何を製作するのがよいか、そしてどのような手順で製作すれば安全に作業が行えるか、児童がそれを実感する場面の工夫などについて、小学校や中学校での家庭科での取組を聞き、本家庭科部会で検討したことで「小3組きんちゃくやさん」「みんなで作ってプレゼントしよう～小3組クラフトショップ～」の授業を進めることができた。

この授業を通して、児童は新しいことに挑戦し、人と関わりながら活動を進めたり、手掛かりを活用したりすることで成功した経験を積むことができたと思う。その経験を生かし、次の新しいことへの挑戦につなげ、児童の生活を豊かにしていきたいと思う。

引用文献及び註

- 1) 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(幼稚部・小学部・中学部)』、247頁、平成21年6月
- 2) 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(幼稚部・小学部・中学部)』第3編第2部第3章第4節中学部の各教科第8「職業・家庭」には、『職業・家庭科は、小学部の「生活科」の観点である「役割」や「手伝い・仕事」の内容との関連で示されている。』とあり、内容の9つの観点に「道具・機械等の取扱いや安全・衛生」がある。そのため、本研究ではミシンやアイロンなどを「道具」として表記する。

なお、本研究は、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校『平成24年度研究紀要 第34集』、51-62頁、平成25年2月に発表したものを加筆修正したものである。

健康教育グループ

児童・生徒の発達段階と生活習慣の実態

代 表	神川 康子
附属小学校	松森 由香里
附属中学校	大場 真紀子
附属特別支援学校	池田 優香
附属幼稚園	島田 みどり
学部	藤本 孝子 、澤 聡美

（１）生活習慣研究会 一大規模アンケート調査についてー

近年の少子高齢化、高度情報化、国際化などによる社会環境の著しい変化に伴い、子ども達を取りまく環境も多様化・複雑化している。このような中、子ども達の生活習慣の乱れが懸念されている。生活習慣の乱れは、子ども達の心身の健康だけではなく、学力や社会的な不適応にも繋がると考えられることから、家庭・学校・地域が連携して子ども達の適切な生活習慣の確立を支援していくことが重要な課題となっている。そこで、健康教育グループ（以下、生活習慣研究会）では、子どもたちの成長・発達を支える生活習慣を食生活や運動・睡眠習慣から検討し、将来を担う子どもたちが元気で健やかに育つための家庭や学校における教育プログラムを提案することを目的に富山県内および近県で 5000 人以上を目指した大規模アンケート調査を起案し、現在進行中である。

平成 24 年度は 4 月 13 日から 2 月 12 日まで計 9 回の生活習慣研究会を開催し、基本項目、睡眠、食生活、体の調子、運動習慣、放課後の過ごし方、こころの状態、生活の様子の観点を盛り込んだ調査票を作成し、実施を始めた。幼稚園 2 校、小学校 2 校、中学校 2 校、大学 1 校、社会人より、延べ 1950 枚の調査票を回収した。次年度以降もアンケート調査の実施を続ける予定である。

分析についても途中段階であるが、今回は食生活の観点から分析を行った結果の一部を報告する。対象は富山県内の A 小学校に通う 5,6 年生（合計 158 名）。食生活に関する質問項目（29 項目）と心身の健康状態（体の調子とこころの状態）に関する質問項目（33 項目）について、Mann-Whitney の U 検定を用い有意差検定を行った。その結果、「嫌いなものを残す」「甘い物の嗜好」「肉の嗜好」「野菜の嗜好」「しっかり噛んで食べる」「家族と食事の買い物に行く」「家族と食事の話をする」「家族と食事は楽しい」「食事の準備や片づけを手伝う」という 9 項目が、心身の健康状態との間に多くの有意差が見られた（表 1）。また、食生活は身体健康状態よりも、心の健康状態に多くの有意差が認められた。上述の食生活に関する 9 項目は子どものポジティブな感情、意欲、集中力、自己肯定感などに

関連することが示唆された。今後さらに詳細に検討する予定である。

近年、だるい、疲れやすいなどの身体症状や、イライラしやすい、意欲がない等の心の症状を持つ子どもたちの増加が指摘されている。子どもの心身の健康状態に生活習慣が密接にかかわっていることは以前からいわれている。しかしながら、睡眠習慣・食習慣・運動習慣と心身の健康状態を関連させた大規模調査は皆無である。来年度もアンケートの実施と睡眠習慣、食習慣、運動習慣の観点からデータの分析を推進し、健康教育実践のための有効な手立てを探りたい。

表 1. 食生活に関する項目と心身の健康状態に関する項目との有意差検定結果

A \ B	嫌いな物を残すか	甘い物の嗜好	肉の嗜好	野菜の嗜好	食事はしっかりと噛んでいる	家族と食事の買い物に行く	家族と食事について話す	家族との食事は楽しい	食事の準備や片づけを手伝う
めまいや立ちくらみ	—	—	—	—	—	—	*	—	—
すぐに疲れる	—	—	—	—	—	—	*	—	—
腹痛	—	—	—	—	—	—	*	—	—
朝からあくびが出る	*	—	—	—	—	—	—	*	—
肩こり	—	—	—	—	—	—	—	—	—
腰痛	—	—	—	—	—	—	—	*	—
虫歯	—	—	—	—	*	—	—	*	—
大便の頻度	* *	*	—	*	—	—	—	—	*
自分が好き	—	*	—	—	—	—	*	—	—
友達と仲良く遊ぶ	—	*	—	—	—	—	—	—	—
学校のことで悩む	—	—	—	—	—	*	*	—	—
イライラすると食べる	* *	—	—	—	—	—	—	—	*
食べすぎて自分が嫌になる	*	—	—	—	—	—	*	*	*
お腹がすぐとイライラする	—	—	—	—	—	—	—	—	—
やる気	—	—	*	* *	—	*	—	*	—
イライラする	—	—	—	—	—	—	—	—	—
学校行事が楽しみ	—	—	—	—	* *	*	—	—	—
楽しく学習できる	*	* *	*	*	* *	—	—	*	—
毎日が楽しい	—	* *	*	—	*	—	—	—	—
仲のいい友達がいる	—	*	*	—	—	* *	—	—	—
家族が好き	—	—	*	—	—	*	—	—	*
学校が楽しみ	—	—	*	—	*	* *	—	—	—
思い通りいなくても我慢できる	—	—	—	—	—	—	—	—	*
皆の前で大きい声で返事できる	* *	—	*	*	—	—	—	—	—
授業中は集中できる	* *	—	—	*	*	* *	—	*	*
すぐに決断できる	—	—	—	—	—	—	—	—	*
周りの人は良いところを認めてくれる	—	—	* *	—	—	*	—	—	—
やってみたいことがいろいろある	—	—	—	*	* *	—	—	—	—
学校の出来事を家で話す	—	—	*	—	—	—	—	—	—
家族に相談する	—	—	—	—	—	—	—	—	—
自分の良いところを知っている	—	—	—	—	—	—	—	—	*
心配事がある	—	—	—	—	—	*	—	—	—
失敗が気になる	—	—	—	—	—	—	—	—	—

A：心身の健康状態に関する項目（33 項目） *p<0.05、* *p<0.01
B：食生活に関する項目（9 項目）

(2) 附属小学校での取り組み ～とやまゲンキッズ作戦の取り組みから～

- ① 今年度は「とやまゲンキッズ作戦ー健康づくりノートー」を7月、12月、3月の年3回実施し、結果は毎回“ほけんだより”でお知らせした。一年間の結果は下記のとおりであった。

○ベスト3

- 1位 朝ごはんを食べている（約97％）
- 2位 仲の良い友だちがいる（約96％）
- 3位 家族と一緒に食事を食べている（約95％）

○ワースト3

- 1位 早く寝る（約25％）
- 2位 TV・ゲームが1時間未満（約46％）
- 3位 朝からあくびがでない（約50％）

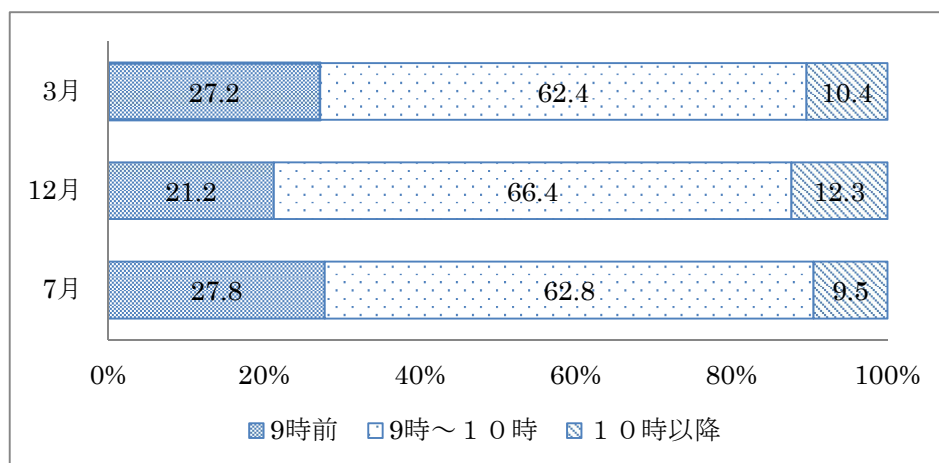
12月は7月や3月に比べて、ワースト3の項目、順位は変わらなかったが、値がわずかだが低くなっていた。

“とやまゲンキッズ作戦”に書かれてある1～4年生の保護者の方からのコメントから、早寝・早起き、姿勢、テレビやゲームの時間、運動、お手伝いのことなど、日々、お子さんに言葉をかけておられる様子が伝わってきた。生活習慣は学校と家庭が連携して子どもをサポートすることが、子どもたちの毎日の生活と関係し、行動変容につながったと思われる。

② 就寝時刻について

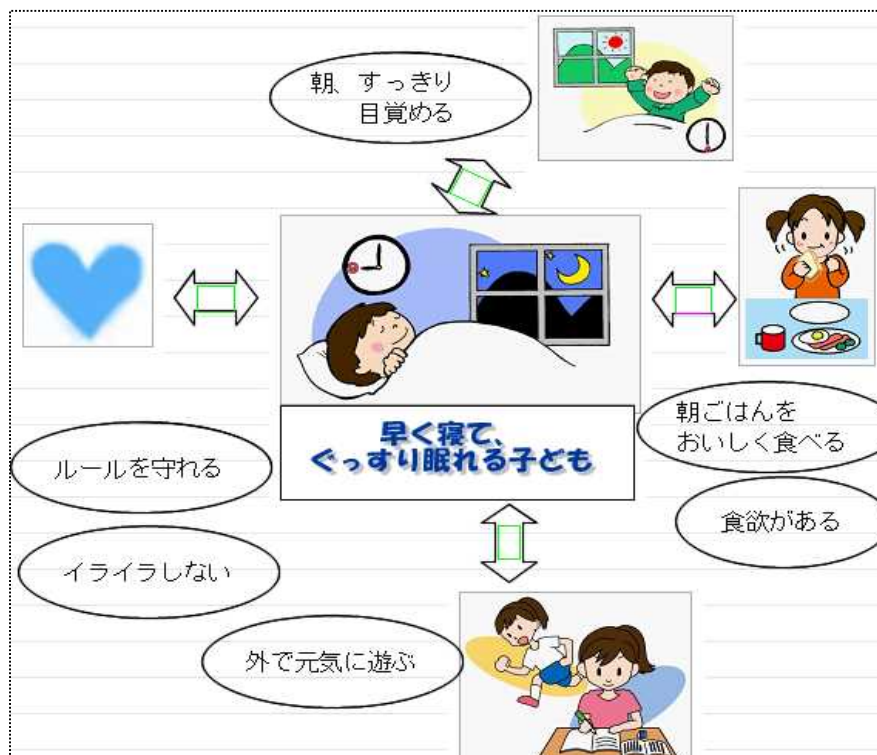
年間を通して、値が低かったのは「就寝時刻」についての質問の回答だった。保健室に頭痛や気持ち悪いといった訴えで来室する子どもに話を聞くと、就寝時刻の遅いことが原因に挙げられ、特に、高学年に多く見られた。

〈質問「何時に寝ましたか？」の結果より〉



保健室の掲示を利用して、子どもたちに就寝時刻が遅くなって睡眠時間が減っていることや睡眠の大切さについて意識を高めるようにした。また、“ほけんだより”を通して、睡眠の重要性について保護者に伝えた。子どもだけでなく、保護者にも基本的生活習慣の大切さを再認識すると同時に、理想の生活を送ることで、心や体にどんなよいことがあるかを考える場を設定した。

〈ほけんだより 7月号より〉



早く寝て、たっぷり睡眠時間をとることは体だけでなく、心の健康につながる。また、体が健康であることで、精神面も落ち着き友達とのかかわりが安定する。さらに集中して学習もできるので、学力の向上にもつながる。体と心によい生活を送ることで自他を認め、自己肯定感が高まると考える。

子どもたちの就寝時刻の遅いことや運動不足などの基本的生活習慣の乱れは子どもたちの生涯の健康にとって大きな問題である。子どもたちが自分の問題としてとらえるために、継続的な指導が必要である。また、生活習慣は家庭との連携、サポートがないと子どもたちの行動変容に結びつかない。今後は、実態把握を取るとともに、子どもたちが課題意識をもって取り組めるように指導を続けていきたい。

(3) 附属中学校での取り組み

① 生徒の実態

本校の生徒は地域の学校に通う公立の生徒に比べ、通学に費やす時間が長い。また、放課後の塾通い、家庭学習、部活動、携帯電話での友達とのコミュニケーションなど、中学生になると生活時間は大きく変化する。そのため、時間を上手に使わないと睡眠時間の確保が難しく、特に、入学したての1年生は、生活リズムの乱れから体調不良を訴え保健室に来室する生徒が多い。そこで、本校では、基本的な生活習慣の育成を以下のように行っている。

② 基本的な生活習慣の育成

	時期	指導内容	指導者	対象
保健学習	4月 ～2月	保健体育科 「健康な生活と病気の予防」	教科担任	3年生
保健指導	6月	・生活習慣の振り返り (ゲンキッズ調査)	学級担任	全学年
	9月～ 11月	・生活習慣病講演会資料づくり ・講演会事前プレゼンテーション	養護教諭	1年生保健委員
	11月	・生活習慣病予防講演会 (外部講師招聘)	1学年教諭	1年生と保護者
		・すこやか検診(生活習慣病予防検診) (H24年度受診率98.1%)	養護教諭	1年生と2・3年生の継続観察生徒
	12月	・すこやか教室 (総合病院医師・栄養士による健康相談 ・保健指導)	富山市教育 委員会	採血検査で異常のあった 生徒

○生活習慣病予防講演会

講 師 富山大学名誉教授・富山産業保健センター所長 鏡森 定信先生

対 象 1年生160名とその保護者(参加希望者)

(講演の概要)

- ・睡眠の効果
 - 成長ホルモンの分泌
 - 記憶にかかわる脳の海馬の成長
 - 記憶の固定
 - NK(ナチュラルキラー)細胞の活性化
 - 心の健康(うつ予防)
- ・朝食の重要性

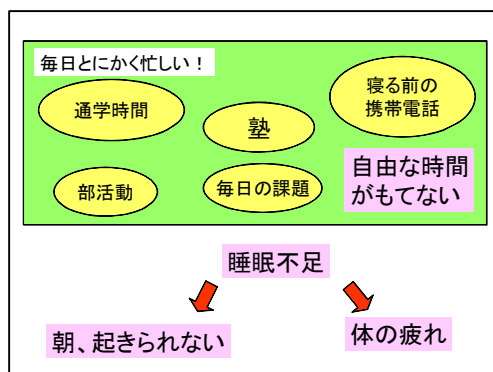
<講演後の質疑応答の様子>



- ・科学的なデータや資料に基づくお話は、生徒の興味・関心を引きつけ、講演後に講師の先生へ意欲的に質問する生徒の姿が見られた。

○生活習慣病講演会事前プレゼンテーション

<プレゼンテーションより>



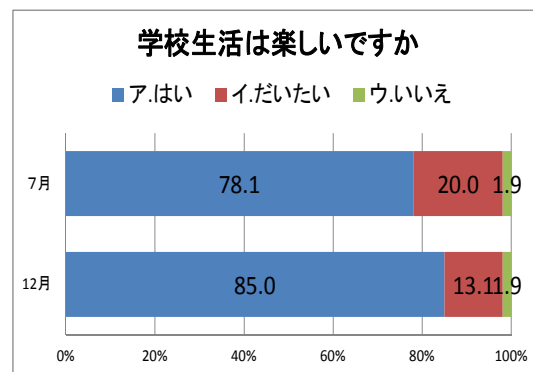
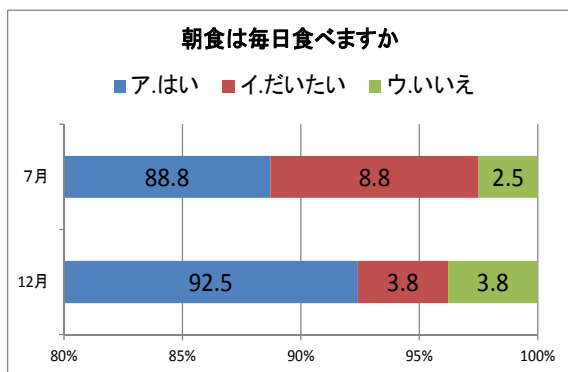
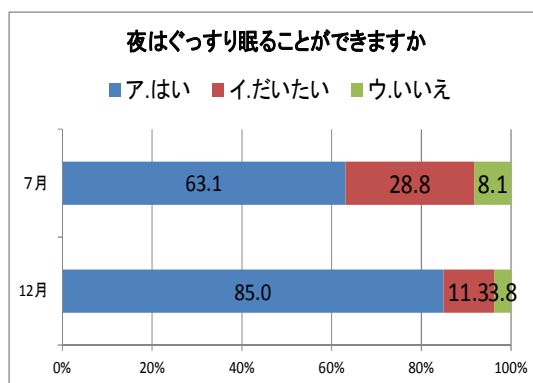
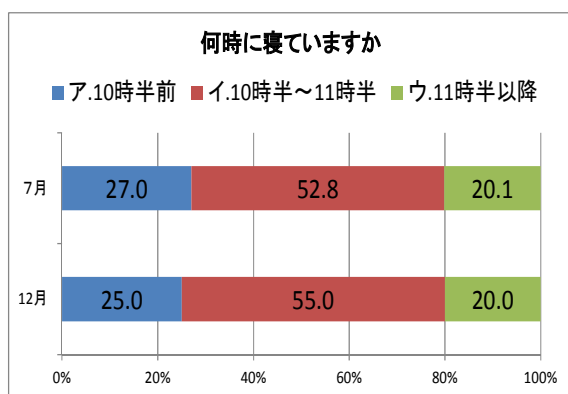
<講演の運営を行う保健委員>



- ・実態調査から見える1年生の抱える生活習慣の問題点を保健委員が分析し、自分たちの問題として睡眠の大切さを学年に呼びかけた。

③成果

ゲンキッズ調査（1年生160名）のH24. 7月とH24. 12月の比較



生徒の就寝時刻に大きな変化は見られなかったが、「夜、ぐっすり眠れる」と答える生徒や「朝食を毎日食べる」と答える生徒は増えていた。また、「学校生活が楽しい」と答える生徒も78.1%から85.0%に増えていた。生徒が学校生活に慣れてきたことも背景にあると思われるが、生活習慣の改善が心や体の安定を生み、学校生活の楽しさに繋がったのではないかとと思われる。今後も指導を続けていきたい。

(4) 附属特別支援学校での取り組み

①はじめに

本校は、5月に行った歯科検診の結果、う歯率は11.9%と低かったが、軽度歯肉炎率は25.4%、歯垢の付着率は52.5%と高かった。そこで、今年度、歯に関する取り組みを以下の通り実施した。

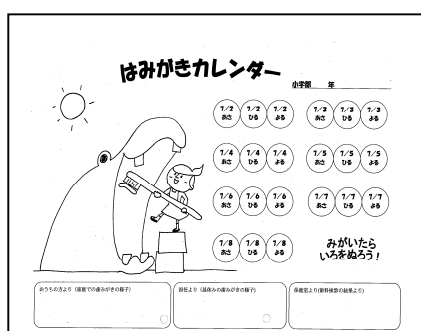
②実践

むし歯予防週間

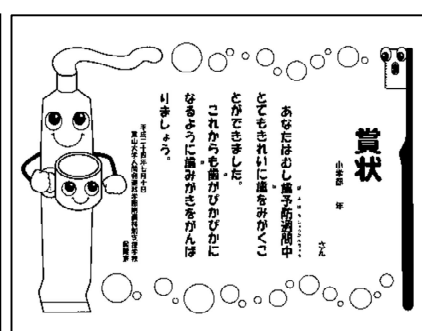
7月2日(月)～6日(金)をむし歯予防週間とし、ポスター・標語の作成、歯みがきカレンダーによる歯みがきチェック(小学部)、賞状の配付、お昼の校内放送などを行い、歯の健康について考える期間を設けた。



〈ポスター・標語〉



〈歯みがきカレンダー〉



〈賞状〉

集団指導(中学部)

保健の授業で、デンタルフロスの使い方を体験したり、位相差顕微鏡を用いて自分の口の中の細菌の様子を観察したりして、口腔内の衛生について指導した。

生徒たちは、動いた細菌を見て驚くとともに、「これからしっかりと歯をみがきたい。」と感想を述べていた。



『歯科に関する連絡票』の活用

近年、予防歯科が浸透し、定期的に歯科受診をし、クリーニングやフッ素塗布などを行っている児童生徒も多い。定期受診を行っている児童生徒の割合を知るため、また、現在口の中で気になることはないか把握するため、『歯科に関する連絡票』(資料1)を作成し、活用した。このことにより、保護者の歯の健康に対する意識を高めると共に、年2回の貴重な歯科検診の機会を有効に実施することができた。

治療状況の確認

1 回目の歯科検診（5 月）後、少しずつ治療カードは戻ってきていたが、10 月の懇談会時、未提出の保護者には、確認用紙（資料 2）を配付し、治療状況を把握すると共に、保護者へ治療の呼びかけを行う機会とした。

歯みがき教室の実施

11 月 30 日（金）に歯科保健医療総合センターより歯科衛生士 5 名に來校していただき、小・中学部において、だ液検査（RD テスト）や、染め出し検査、ブラッシング指導、紙芝居、クイズなどを行った。

小学部 1，2 年では、希望する保護者に参加してもらい、歯みがきの仕方について学ぶ機会とした。



歯科受診の練習

歯を削る音が苦手なケースが多いため、機械音を IC レコーダーで流しながら電動歯ブラシを用いて口を大きく開ける練習や、口の中に綿を入れる練習などを受診前に行うことにより、不安を軽減し、スムーズに治療を受けられるようにした。

③まとめ

卒業後、社会に出てからも歯を大切にする意識をもって生活してもらいたい。そのために、年 2 回の歯科検診のみならず、年間を通して定期的に染め出し検査を行ったり、集団指導を行ったりして、丁寧な歯みがきの習慣化を図り、児童生徒や保護者へ口の健康について働き掛けを続けていきたい。

歯に関する連絡票

【保護者のみなさまへ】
1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

【資料 1：歯に関する連絡票】

さん 保護者様

10 月より保護者様にて届いたいただきありがとうございます。

5 月に行った歯科検診では以下の症状がみられ、受診のお勧めプリントをお渡ししました。

むし歯 ・ 歯垢の付着 ・ 軽度歯肉炎 ・ 要注意歯

現在の状況についてお話ししたいと思いますので、当てはまるものに○を付け、来日や再発予防の歯に入れていただきますよう、よろしくお願いいたします。（※歯は保護者様にあります）

・治療した歯がプリントを消していいい ・プリントをなくした

・受診中 ・今後、受診予定 ・受診していない ・受診が困難

・その他（ ）

ありがとうございました。保健室

【資料 2：治療状況確認用紙】

英語科教育グループ

ラーニングジャーナルを用いた授業改善の研究

代 表 : 岡崎 浩幸
附属小学校 : 横山 恵
附属中学校 : 浦田 栄信、吉崎 理香、岩城 廣和
学 部 : 荻原 洋、岡崎 浩幸

1 目的

本年度はラーニングジャーナルを活用し、小学校・中学校で英語授業改善を試みた。生徒からのフィードバックをもとに、教師がいかに授業を改善していったのかその一端を報告する。

2 研究の背景

授業改善の中心は教師であるが、生徒も授業改善に積極的に参加することを可能にする方法を探究した。生徒からのフィードバックをもとに、授業改善を進めていくツールを開発できないかメンバーで話し合った。様々な研究によれば、教師変容にもっとも影響力のある要因の一つは生徒からのフィードバック(student feedback)があると言われている。生徒からの肯定的なフィードバックは教師の改善への意欲を維持しながら、授業改善を継続できる原動力になりうる。言うまでもなく授業改善は生徒の学びをより豊かにするためのものであり、一番恩恵を受けるのは生徒である。ならば生徒のニーズや要望に耳を傾け、取り入れていくのは当然のことであろう。また Allwright(2003, 2006)が指摘しているように、授業を作り上げているのは教師だけでなく生徒(児童)にも責任があるという考えに基づいている。教師も生徒もよりよい学びのために協力しながら成長していくのである。

3 方法

生徒に learning journal(学習日誌)を配布し、各 lesson の終わりに授業を振り返るための、いくつかの質問に回答させることで自己の学習を振り返ってもらおう。今回の lesson で何を学び、何ができるようになったのか、まだ十分にできなかったことは何か、などを記述してもらおう。実際に授業で起こったこと(目に見えること)や生徒の内面を記述できるよう工夫する(5 参照)。教師はその記述回答を自分の授業の振り返り、そして改善のための貴重な資料として活用する。learning journal(学習日誌)を回収し読み終えた後で、大学教員から担当教員に、生徒の記述を分析考察するための質問をする。教師がどのような面に気づき、どのような点で授業改善に役立ったのかを明らかにする。

4 小学校教員の事例

小学校教員の外国語活動実践例を以下に示す。研究の成果として、生徒からのフィードバックを得るための振り返りカード(学習日誌の役割を果たす)をもとに、教師が継続していきいたいこと、改善したいことを考察してもらった。

コミュニケーションの楽しさを味わうルール工夫

富山大学人間発達科学部附属小学校・教諭・横山 恵

1. 研究実践 ―Hi, friends 1 Lesson 7「What's this? クイズ大会をしよう」より―
各グループ（8人）でブラックボックスゲームを実施した。このゲームで、ヒントを積極的に出し合ってコミュニケーションを楽しむ子どもの姿を期待し、次の点を工夫した。

工夫① クイズの素材は身近で既習の物

果物、野菜など、既習の素材を用意することで、ヒントを出しやすくした。

工夫② ヒントが出しやすい場面設定

出題者側がヒントを出しやすいよう、5種類（色、大きさ、長さ、グループ、好み）のヒントカードを用意し、ヒントを工夫して会話を楽しめるようにした。

工夫③ ゲームのルールの工夫

解答者側は、5つのヒントを聞いて予想した後に箱の物を“手のひらで触って”答えを当てることとし、出題者側が何とかしてヒントを出そうとする場面を設定した。



1回目のブラックボックスゲームでは、最初から“手のひら全体”で触ることで答えがすぐに分かってしまい、出題者側と解答者側の両者の意欲が半減する場面が見られた。そこで、2回目のゲームでは、解答者側に“最初は指一本で触る”という新たなルールを加え、「ヒントがほしい」という会話への必要感や「きっと〇〇が答えだな」という見通しが生まれるよう活動場面を仕組んだ。

下の事例は、クイズの答えの意外性が子どもたちの活動意欲を高めるきっかけとなった場面である。

（解：指一本で触った感じでは“バナナ”っぽいな）

出・・・出題者側 解・・・解答者側

出：“What's this?”（これは何？）

解：“Hint, please.”（ヒントをください。）“What color?”（色は何？）

出：“It's yellow.”（黄色です。）

解：“Yellow?”（黄色？）（やっぱり“バナナ”だ）“What group?”（グループは？）

出：“It's fruits.”（果物です。）（解：“バナナ”にまちがいないな）

解：“Big? Small?”（大きい？小さい？）

出：“It's big.”（大きいです。）

解：“Long? Short?”（長い？短い？）

出：“It's short.”（短いです。）（解：あれ、短い？“バナナ”ではないのかな）

解：“Do you like?”（好きですか？）

出：“Yes.”（好きです）

解：“It's banana.”（バナナだと思う。）

出：“Final answer?”（最後の答え？）

解：（箱の中に手を入れて、手全体で形を確認した瞬間）

“OK, I know. It's lemon!”（分かった！レモンだ）

出：（笑顔で）“That's right.”

下の振り返りカードからは、初めはヒントの出し方が難しいと感じていた児童が次第にヒントを出す楽しさを感じている様子が見られた。

《子どもの振り返りカード》

ゲームでむずかしかったけど、答えがわかるとうれしかった。クイズでいろいろな英語をつかえた。物のヒントをだして、英語で表わすことができた。楽しかった。

2. 研究の成果

① ルール作りについて

ブラックボックスクイズのように見えない物を当てるクイズを展開する場合は、“最初は指一本で触る”というような新たなルールを加えることでクイズへの“わくわく感”が高まる。また、少しだけ触ることで答えに見通しをもつことで、ヒントを聞く楽しさだけでなく聞く必要感も高まる。

② ふり回りカードについて

積極的なコミュニケーションへの鍵がどこにあるかを、子どもたちの実態を活動の様子やふり回りカードから見取り、次の活動に生かすことが大切である。

【継続していきたいこと】

- ・ ふりかえりの観点を「今日のマイベスト」の三点「す」「て」「き」としたことで、観点ごとの具体的な姿をふり返ることができた。また、児童は活動への思いを自由に記入することができた。
- ・ 単元ごとに1枚のふり回りカードを活用したため、単元を通しての児童の成長が把握しやすかった。

【改善していきたいこと】

- ・ ふり回りカードには単元全体のねらいだけを示すのではなく、単元のねらいに迫るための1時間ごとの目当ても記入しておく方がよいのではないかな。単元の最終場面の子どもの姿を見通した単元構想や支援の在り方を考える“バックワードデザイン”をもとにふり回りカードを作成し、今後活用したい。
- ・ 言語や文化への気付きについては、あまり記述していなかった。言語や文化への気付きについては児童に無理に気付かせる必要はないが、ふり回りを促す教師の言葉かけが必要だと感じた。

単元のねらいはあるが各時間の活動の目当てがない。

言語への気付きを書いている。

観点があるのでふりかえりをしやすい。

BEST my heart

外国語活動ふり回りカード

Lesson 7 クイズ大会をしよう

この Lesson での目当て
ある物について、それが何かをたずねたり、答えたりしよう。

よくできた◎ まあまあできた○ もうひとりで△

| 日付 | 時 | 分 | 密 | 今日のマイベスト | 今日のふり回り |
|----|----|----|---|----------|---|
| 1 | 8 | 00 | △ | す | 進んでチャレンジしたことは、...です。うまくできたことは、...です。気付いたことは、...です。 |
| 10 | 00 | 00 | ○ | す | 発音が早くていいけど、スペルがわからなくて面白かった。他の単語も調べたい。 |
| 2 | 10 | 00 | ○ | す | ヒントをだすのは、さすがしかたがまたやりたい。ヒントをもらいたい。 |
| 10 | 25 | 00 | ○ | す | ゲームでむずかしかったけど、答えがわかるようになってきた。クイズでいろいろな英語を学べる。物のヒントをだして、英語で表現することができた。楽しかった。 |
| | | | | す | スリーヒントクイズがむずかしかった。クイズ大会がとっても楽しかった。 |
| | | | | す | |

① すすんで

BEST

Eng 大きな声でジェスチャーで話そうとしながら。
Eye 目をつないで伝えようとしながら。
Smile 笑顔で話そうとしたが。
Try 進んで表現をしようとしたが。


② できたよ

英語で話したり、英語の友達にたずねたりできた。

③ 気づいたよ

日本語と英語、日本と外国の文化の違いや共通点に気づいた。

○○に気づきました！



5. 中学校教員の事例

レッスン（単元）終了後に、中学教員は生徒からのフィードバックを得るために簡単なアンケート（learning journal）を2回実施した。以下はラーニングジャーナルの結果について大学教員から、担当教師になされた質問と教師の回答である。

Learning Journal 実施後の教師への質問

Learning Journal 内容

A 生徒にどのようなことを聞かれましたか。（質問内容）（実施日も教えてください）

- （1）今日の授業の目標 「一般動詞の過去形を知る」（2月28日、3月19日）
- （2）目標の達成度 5（十分できた） 4（できた） 2（あまり…） 1（全く…）
- （3）授業の内容でわかりにくかったこと
- （4）面白かった活動、充実していた活動
- （5）授業への取り組みで反省すべきこと
- （6）先生へのお願い（困っていること）

以上6点について、生徒に授業後記入させました。

生徒の回答について

B 生徒の回答で多かったものはどのような内容でしょうか。

- （3）不規則動詞の変化
- （4）「ダンゴ虫ゲーム」（バトルシップゲームの変形版。パターンプラクティスのひとつ）
「塗りつぶし音読」教科書の本文をプリント化しておき、いくつかの単語を黒で塗りつぶして見えないようにしておく。そのプリントを使って音読練習を繰り返す。少しずつ、塗りつぶす単語を増やしていく。
- （5）ノートをとらないことがあった。
ノートをとることに時間をとられ、他の活動にきちんと取り組めなかった。
↑（上記と逆）
- （6）規則動詞の過去形の発音がよく分からない。（-ed が〔t〕なのか〔d〕なのか。）
 - ・不規則動詞の過去形の発音、つづりを覚えられない。
 - ・ノートを素早くとることができない。

C （Bに関連しています）自分が励まされた、今後教える意欲につながるような回答があればお書きください。

- ・ペアで日本語→英語にする活動が、英文を覚えるのに役立った。
- ・楽しい活動が多かった。
- （・先生のオヤジギャグをもっと聞きたい。）

D 早めの改善が必要だと思われた回答などをお書きください。（全体に関することや個人の生徒に関することでもかまいません）

- ・授業中眠くなることがあった。

先生自身のことについて(生徒からの feedback を受けて)

E 今後も継続していきたい活用や方針、学習方法などをお書きください。

- ・ペアによる様々なスピーキング活動（主にウォームアップ段階で）
- ・いろいろな工夫を加えた音読用プリント（教科書の本文）を継続して利用し、「暗記しよう」と思わなくても、練習を重ねている内にいつの間にか教科書の英文を覚えていた、という状態をつくっていききたい。
- ・単純なパターンプラクティスを避け、今後もゲーム化して取り組ませたい。

F 今後改善したい指導法や活動、方針などをお書きください。

- ・教師側の説明が冗長になりすぎることがしばしばあるので、どんどん英語を使わせて、飽きのこない授業をつくっていききたい。それが、授業中のついうとと・・・を避けることにつながると考える。

G すでに改善した（しつづける）指導法や活動、方針などをお書きください。

- ・板書の内容をすっきりとさせることを心がけている。必要最低限の事項のみ板書し、さらに視覚的に残りやすいものにしたい。

H 今後受けてみたい研修はどのような研修でしょうか。

- ・ペアやグループによるアクティビティの例
- ・効果的なライティング指導
- ・授業が成り立たない状態の学年を（突然）受け持ったときの対処法 等

I ラーニングジャーナルをどのように改善していく必要があると思いますか。

- ・複数の教員で実施し、常によりよい問いかけ（生徒に対する）を模索すること
- ・教科書には、通常の単元（UNITとかPROGRAMとか）の他に、ライティング、スピーキング、リスニング等一つのスキルに特化したページもあるので、そのようなスキルの上に焦点をあてた授業にも対応できるようなジャーナル（質問項目）を準備すること。

（浦田）

6. まとめと今後の方向性

生徒のフィードバックをもとにした授業改善において、生徒からの否定的なフィードバックだけでは教師のモチベーションは低くなり授業改善への意欲がそれほど高まらない場合もある。質問Cは「自分が励まされた、今後教える意欲につながるような回答」を尋ねることで予想していたフィードバックを受けて教師の自信につながると考えられる。さらに、自分でも気づいていない授業の良さを生徒が認めていてくれてさらなる意欲や教える喜びにつながることもある。質問Dは生徒の視点から「改善を要する」と考えられる点を意識してもらう質問である。この後の質問F、Gは、教師に改善案を考えるきっかけを与えることを狙っている。さらに、すでに改善に取り組んでいる試みを説明してもらうことで自分の改善策を客観的に捉える力量を高めるのにも役立つ。

今回は小学校1名、中学校1名のみがこの方法を用いて授業改善に取り組んでもらった。今後はほかの教員にも取り組んでもらい、どのような質問項目が授業改善に役立つのかを明らかにしていきたい。

参考文献

- Allwright, D. (2003). Exploratory practice: Rethinking practitioner research in language teaching. *Language Teaching Research*, 7(2), 113-141.
- Allwright, D. (2006). Six promising directions in applied linguistics. In S. Gieve & I. K. Miller (Eds.), *Understanding the language classroom* (pp.11-17). Basingstoke: Palgrave Macmillan.

（岡崎）

生活・総合グループ

| | | | |
|--------|-----------|---|-------|
| (部員) | 世話人 | : | 松本謙一 |
| | 附属幼稚園 | : | 加藤ちえみ |
| | 附属幼稚園 | : | 舟林 美乃 |
| | 附属小学校 | : | 有島智美 |
| | 大 学 | : | 松本謙一 |
| (研究協力) | 人間発達科学部4年 | | 荒田幸平 |
| | | | 松本ゆめか |

(計6名)

【研究主題】

幼小の接続を考える

附属幼稚園「親子栽培活動」・1年生活科の取り組みから

【研究の方法】

- ・ 年間4-5回の部会研修を実施。
- ・ 今年は、附属幼稚園「親子栽培活動」の取り組みと附属小学校1年生活科の栽培活動に焦点を当て、松本ゼミと協力の下、実践研究に当たる
せられたことを各自がまとめる（分担）。

【研究対象として取り上げた2つの活動】

富山大学人間発達科学部附属幼稚園「親子栽培活動」

富山大学人間発達科学部附属小学校1年生活科「つくろうわたしのちいさなおにわ」

【研究の経過】

| | | |
|----------|--------|------------|
| 実践の参与観察 | 4月～9月 | |
| アンケート調査 | 9月 | |
| 第1回 研究部会 | 6月27日 | 今年度の研究の見通し |
| 第2回 研究部会 | 6月28日 | 実践の考察 |
| 第3回 研究部会 | 11月27日 | アンケート集計の考察 |

「生活・総合」グループに参加して

附属幼稚園 加藤ちえみ

1 はじめに

本年度、生活・総合グループでは「協働の視点から見た 附幼『親子栽培活動』と、
「生活科のねらいに直結した栽培活動の在り方～1年『つくろう わたしの ちいさなおにわ』の提案～」の2つの研究をもとに協議を行ってきた。その中で学んだことをまとめてみたい。

2 協議からの学び

(1)「協働の視点から見た 附幼『親子栽培活動』」の研究から

幼稚園で、園長先生から「家庭でどんどん話そうとする子どもを育てよう」との趣旨で始まった「親子栽培活動」であったが、活動の実際からは、家庭だけではなく活動の場そのものがコミュニケーション力育成の場になっていたことに気付かされた。活動の場を整えたこと、活動の場に親・保育者・友達・友達の親がいたこと等が子どもの育ちを育むとともに、親と保育者の協働につながっていることにも改めて気付かされた。

(2)「生活科のねらいに直結した栽培活動の在り方～1年『つくろう わたしの ちいさなおにわ』の提案～」の研究から

1年生の生活科でアサガオの栽培をすることが多いが、より生活科に適した栽培活動を求めて『つくろう わたしの ちいさなおにわ』の単元を提案している。自分で好きな花を好きなだけ選んで庭を作るという自由度の高さが、子どもの意欲を高め、主体的な活動へと導いていた。子どもが問題解決をしていく際に、友達の活動の様子を気にする姿が見られるが、全員が同じアサガオを育てる場合と、全員が大きな枠の中で異なるものを育てる場合とでは友達を気にする時の質が異なることに気付かされた。ねらいに合わせてどのような活動にしていくか細やかな吟味が大切であることを改めて考えさせられた。

3 おわりに

この「生活・総合」グループでの協議を通して、附属幼稚園の『親子栽培活動』についての研究の成果を詳しく聞かせていただくことができ、大変貴重な時間であった。実際の『親子栽培活動』の様子から自分なりに考え学んだことも多かったが、この時間を通して改めて活動を振り返ることができ、新たな視点を得ることができた。今回の学びを今後の保育に生かしていきたい。

協働の視点からみた 附幼「親子栽培活動」

附属幼稚園 舟林 美乃

1. 研究の目的

「協働」とは、同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働くことである。教育において、学校・家庭・地域・社会との協力は不可欠であるが、とりわけ望ましい学校と家庭の関係は、協働であると考えた。そこで、附属幼稚園が平成23年度より行っている親子栽培活動について、聞き取り調査・アンケート調査を行い、協働の視点からその効果と問題点を明らかにする。

2. 研究の方法

- ① 活動での子どもの会話や行動を継続的に観察・記録する。
- ② 子どもの会話や行動の記録をカンファレンスで読み取り、活動による子どもの育ちや保育者や保護者のかかわりについて検討する。
- ③ 保護者、保育者にアンケート調査し、協働の視点から活動の効果と問題点について考察する。

3. 活動の概要

- ・ 園長から保護者へ活動の説明を行う。親子での会話を大切にし、親子栽培活動を通して「子どもを育てる」ことが目的であることを伝える。
- ・ 年少児：プランターで花を育てる。
年中児：プランターで野菜を育てる。
年長児：畑で花でも野菜でも好きなものを育てる。

4. 研究結果と考察

- ・ 観察対象児A児は、母親に自分の気持ちや発見を受け止めてもらうことが活動の原動力になっていた。また、A児は双子であり、保護者がずっと一人の子どもにつきっきりで見ることができないため、友達の親との会話もよく聞かれた。友達の母から自分の育てている野菜について他者評価を受けたことや、保育者からの一人一人を認める言葉がけが、A児の活動に対する自信を膨らませることにつながった。そして、他の子どもたちからも、野菜が育つ喜びだけでなく、周りの多様な人にたくさん見てもらえること、褒めてもらえることが、子どもの大きな喜びにつながっている。
- ・ 保護者アンケートから、子どもが活動に本気になって取り組めることを大切にしながら活動に取り組んだという意見が多数あった。栽培活動の目的を幼稚園と共通理解してあったからこそ、保護者と保育者で子どもに対して全く変わりのない援助ができたと考えられる。

5. 今後の課題

数名ではあったが、栽培活動になかなか興味をもてない子どもがいた。このような子どもに対して保育者や保護者はどのような援助をすべきであったか。

自分のよさや可能性に気付きながら豊かに活動する生活科の在り方

富山大学人間発達科学部附属小学校・教諭・有島 智美

1. 課題設定の理由

本単元は、栽培活動である。自然とかがわる活動であり、生命に関する学習活動であり、自然の面白さ不思議さを実感できる学習活動である。そこで、子どもが思いや願いをもって主体的に栽培活動ができるように、植物を選び、複数種類の植物を育てることができる単元を考えた。

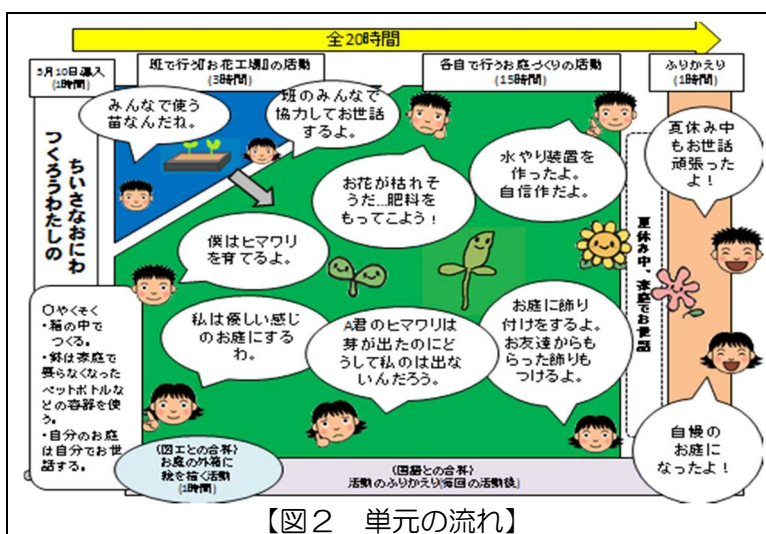
本単元では、自分で育てたい植物を選び、自分だけの小さな庭（図1）を作り上げていく活動が軸となる。「こんなお庭をつくりたいな。」という願いをもって、今までの知識や生活経験、人間関係などを総動員してお庭に向き合う活動こそが、自分の持ち味やよさ、自分の成長を自覚することにつながる。そのことが、より本質的な価値だと考え、生活科の究極の目標「児童が自分の思いや願いを生かし、主体的に活動する」を目指し、本課題を設定した。



【図1 自分だけの小さな庭】

2. 研究実践

単元構想は、図2に示す通りである。「お花工場」とは、全員が使える苗を各グループ（学級の生活班）に1種類ずつ種から育てる活動である。苗が育つにつれ、各自で行うお庭づくりへの活動へと進んでいった。毎時間の授業の流れは、①「今日のお庭づくりですることを紹介し合う」②「各自のお庭づくり」③「振り返り・自己評価を行う」というパターンで行った。各自のお庭づくりでは多様な工夫が見られた。



【図2 単元の流れ】



3. 研究の成果

これらの多様な活動から、子どもたちのお庭づくりにみられる工夫を、肥料をあげる、虫退治をするなどの「維持的な工夫」と、飾りつけをする、鉢の並べ方を工夫するなどの「創造的な工夫」の2つの視点で分類した。維持的な活動に取り組んだのは、35人中9人で、創造的な工夫を行ったのは35人全員であった。従来のアサガオの栽培では、維持的な工夫が中心であったが、本単元で創造的な工夫がより多くみられたという点から、お庭をつくるという単元の設定が生活科のねらう主体的な学習に効果的だったといえる。

また、育てるものをどこから持ってきたかについては、「お花工場でする苗を使った」が最も多く35人中24人であった。この24人のうち、自分の班の苗を使った子どもは、24人中10人であり、自分のお花工場に特別な愛着をもった子どもは少なかった。この理由として、お花工場でするものは教師が決定したため、子どもが自ら願いをもって活動に打ち込むことができず、主体的な取り組みができていなかった可能性が考えられる。このことから、自分で決めた活動であることが子どもの主体的な取り組みに重要であることが指摘できる。

4. 今後の課題

多様な植物を扱ったため、種類によって成長の差が見られた。また、鉢に利用したものや土の量、気候などの理由から、成長の度合いに個人差が見られた。このことから、全員が植物の成長を実感できたわけではなかった。どのような植物がこのような実践にふさわしいか検討する必要がある。

生活科のねらいに適した栽培活動

～1年「つくろうわたしのちいさなおにわ」の実践から～

4年 荒田 幸平

1 研究の目的

生活科の創設から現在まで、小学校第1学年の栽培単位ではアサガオを一人一鉢で育てる活動が一貫して行われている。さらに旧低学年理科においても同様の活動が行われていた。

低学年理科から生活科へとねらいが変わったにもかかわらず、アサガオ中心の活動は変わっていないことについて再考の必要があると考えた。

そこで、理科的な栽培活動から脱却した、生活科のねらいに適した栽培活動単元を提案・実践し、妥当性を検証することを研究の目的とした。

2 研究の方法

- (1) アサガオが栽培活動の中心として扱われてきた理由を考察し、問題点を指摘する。
- (2) 生活科のねらいに適した栽培活動単元を荒田が構想する。
- (3) 本学附属小学校1年1組にて教諭有島が実践を行い、荒田が参与観察する。(平成24年5月10日～9月4日 全20時間)
- (4) 授業記録、単元中のワークシート、授業後アンケート等データの分析結果から提案単元の妥当性を検討する。

3 アサガオが継続して扱われてきた理由とその問題点

現行の生活科教科書の分析から、アサガオが長期にわたって扱われてきた理由を考察した。するとアサガオ栽培は生活科の内容(6)、(7)を同時に満たすという利点があることがわかった【表1】。

【表1 アサガオが扱われる理由】

| 内容 | 内容(7) 植物に親しみをもち、大切にすること | | | | 内容(6) 身近な自然を利用し遊ぶ |
|------|-------------------------|-------|-----------|----------|-------------------|
| 条件 | 時期が適切 | 栽培が容易 | 成長が分かりやすい | 確かな実りがある | 植物を使った遊びができる |
| アサガオ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○
ex: 色水遊びなど |

しかし、現在のアサガオ栽培は旧低学年理科から変わらない、アサガオを枯らさないための維持的な活動が中心であり、子どもの創造性が発揮されにくいなどの問題点があることが分かった。

4 実践の概要

(1) 単元の特徴【写真1】

①育てる植物の種類や数を子ども自身が決定する

本実践では子どもが自分の興味や願いに応じて、植物の数や種類を決める。また、同時に複数の種類の植物を扱うことで、植物ごとの違いに気づく。

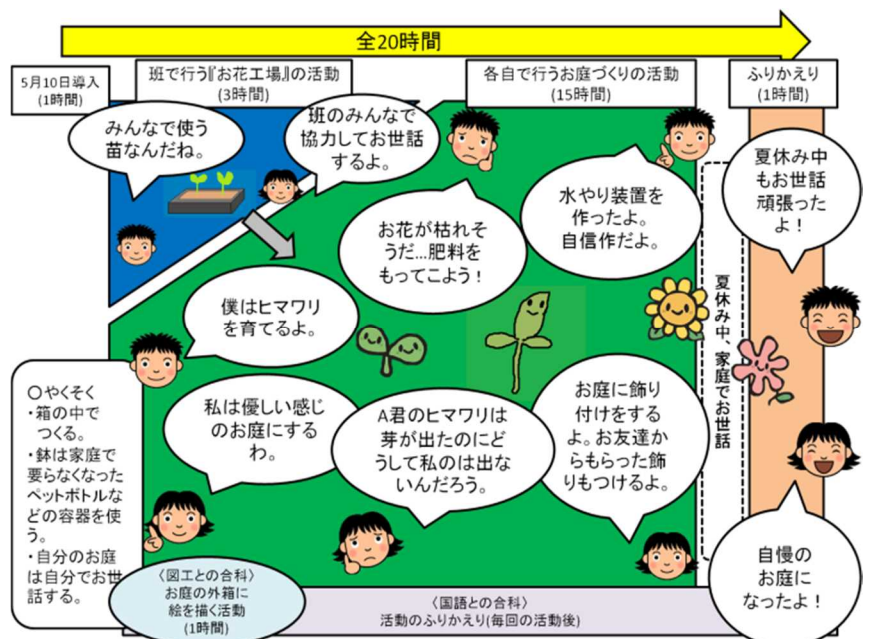


【写真1 本単元でつくるお庭】

②「お庭をつくる」という活動を行うこと

鉢はペットボトルなどの廃材を子ども自身をもってきて使用した。廃材の形を活かして鉢を工夫したり、箱の中で自由に鉢を並べ替えたりし、子ども自身がお庭という世界を作ること、自分の思いを表現していく。

(2) 単元の流れ【図1を参照】



【図1 単元全体の流れ】

4 単元展開の実際と考察

(1) 単元中の子どもの姿から

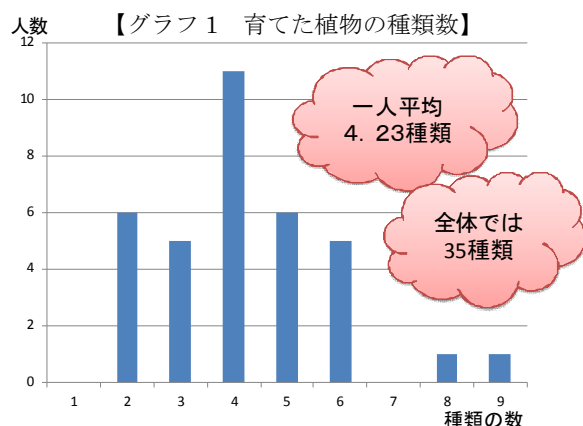


【写真2 お庭を飾り付けるH児】

子どもたちの作ったお庭には多様な工夫が見られた。【写真2】は願いを表現するための工夫をするH児である。見た人が笑顔になるようににぎやかなお庭にしたいという願いを、カラフルなビーズでお庭を飾り付けることで表現している。H児の満面の笑みからは自分の願うお庭を実現できたことへの満足感が窺える。多様な子どもの工夫を、植物を枯らさないための『維持的な工夫』と、願いを表現するための『創造的な工夫』の2つの視点から分類した。その結果、ほとんど全ての子どもが創造的な工夫をしており、本単元の設定が子どもの創造性や柔軟な発想を引き出したと言える。

(2) お庭についての聞き取り調査から

授業終了後、子どもたちのお庭について聞き取り調査を行った。ここでは項目「育てた植物は何種類か」について見ていく。子どもたちが育てた植物の種類は一人当たり2種類から最も多い子どもで9種類であった。平均すると一人あたり4.23種類、全体で35種類の植物を選択している【グラフ1】。

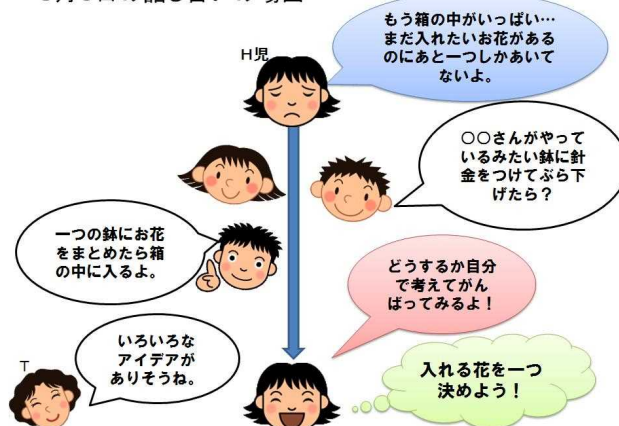


子どもが主体的に植物を選択していたことが分かる。また、自分で植物を選べるという設定が子どもの興味を引き出したと考えられる。

(3) 話し合いの場面から

本実践の中で子どもたちの育ちについて、6月6日の話し合い場面を取り上げ考察した【図2】

6月6日の話し合いの場面



【図2 話し合いの概要】

学級の子どもは他者の悩みに共感的に耳を傾けることができるようになってきていると考えられる。H児の側からみると、自分の悩みを友達に受け止めてもらえたことに喜びを感じ、自分の価値観を大切に活動を決めている。

H児が自立へとむかう上で、また学級全体として他者への共感や思いやりを育む上で、本実践の設定が効果を上げたと考ええる。

5 討論

小学校学習指導要領解説生活科編では生活科の目標を5つの要素に分けて説明している【図3】。

- (1) 具体的な活動や体験を通すこと
- (2) 自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもつこと
- (3) 自分自身や自分の生活について考えること
- (4) 生活上必要な習慣や技能を身につけること
- (5) 自立への基礎を養うこと

(文部科学省 2010)

【図3 教科目標の5要素】

本研究では5つの視点から、子どもの学びについて考察した。その結果、本実践が従来のアサガオ栽培と比べ、(1)～(5)にあげられている学びにおいて優れており、より生活科のねらいにせまることができるものになったと考える。詳細は当日発表する。

6 まとめ

(1) 結論

子ども自身が選んだ植物を使い、廃材を組み合わせて庭をつくるという単元の設定が、子どもの創造的な活動を誘発し、従来のアサガオ栽培より生活科のねらいに適した栽培活動になる。

(2) 残された課題

植物の生長を実感できるよう、材としてどのような植物を扱うことがふさわしいか検討し改善する必要がある。

附属幼稚園「親子栽培活動」の具体とその効果

4 年 松本 ゆめか

1 研究の目的

21 世紀の教育の充実を図るには、学校・家庭・地域社会が一体となることの重要性が指摘されている（中教審答申）。また、実際の教育現場においても実際に、3者の関係の希薄さが問題視されている。これらに対して、附属幼稚園では保護者と協力して昨年度から「親子栽培活動」を新たに実施した。そこで、その効果と問題点を明らかにすることを本研究の目的とする。

2 研究の内容と方法

(1)内容

- ① 活動から、子どもにどのような育ちがみられるかを調べる。
- ② 幼稚園と家庭が、協働で子どもを育てることの効果と問題点を見いだす。

(2)研究方法

- ① 活動での会話や行動(特に観対児2名)を継続的に観察・記録する。
- ② 観察・記録を14名でカンファレンスし、活動での子どもの育ち、教師・保護者の援助について検討する。

3 実践の概要 [写真 1]

| | | |
|-----|---------------|--|
| 共通点 | 活動方法 | 土入れから収穫まで親子で行う
教諭が補助する |
| | 植える種類
本数 | 親子で相談して決める(自由) |
| | 活動時間 | 登園前、降園後(各5~10分間) |
| | 幼稚園の
役割 | 概要:園長が説明 詳細:教諭 |
| 相違点 | 植えるもの
(場所) | 年少…花(草花用プランター)
年中…野菜(野菜用プランター)
年長…野菜(畑一区画 1m×1m) |

【図1 活動の概要】



4 結果と考察

(1) 観察対象児A児、B児を通しての考察(B児については省略)

① A児の活動の深まり

カンファレンスを繰り返しながら、A児のエピソード記録をすべて分析・整理して、A児の活動の深まりを示すと表1のようになる。

【表1 A児の活動の考察】

□ : 事実(青:子どもにとって悲しい事実) (赤:子どもにとって嬉しい事実)
雲 : エピソード 矢印:エピソードから考えられる観察対象児の内面の動き

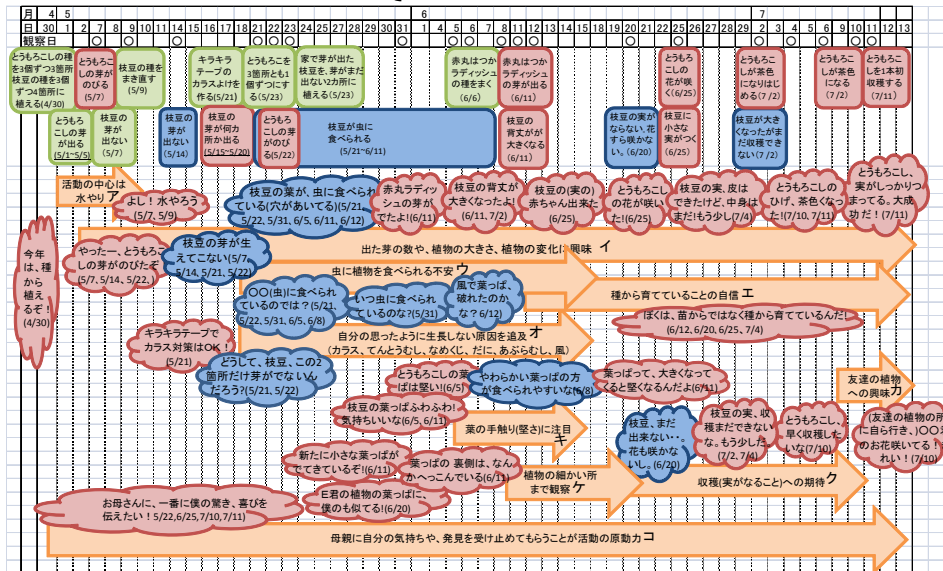


表1から、A児の特徴的な動きを3つ読み取ることができる(エ、オ、コの矢印)。

- ・特徴1:種から育てている自信:矢印エ
- ・特徴2:植物がうまく育たない原因の追及:矢印オ
- ・特徴3:母親の受け止めが原動力:矢印コ

これら3つの特徴から、一貫して、お母さんに1番に自分の気持ちを受け止めてもらうことに喜びを感じながら活動し、植物すべてを種から育てていることで、不安になりながらも生長の違いは取り組み方(植える段階からの違いなど)の違いであることに気づき、自分の活動に大きな誇りと自信をもって取り組んだA児であるととらえることができる。

② A児の活動の広がり

エピソード記録やアンケート結果を手がかりに、A児の活動の広がりを整理した。

A児の活動には、7種類の『家庭への広がり』につながった活動、1種類の『虫への興味の広がり』につながった活動、5種類の『友達とのかかわりの広がり』につながった活動、2種類の『友達の植物への興味の広がり』につながった活動がみられた。

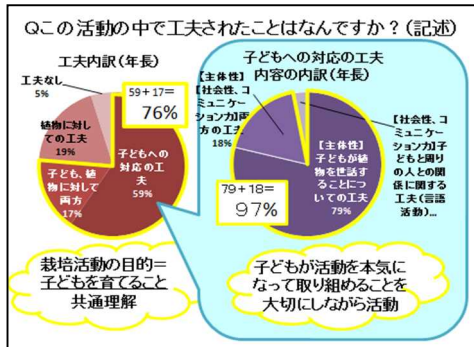
家庭、虫、友達、友達の植物と、多方面にA児の活動は広がりをもっていることがわかる。

③A児を支える親の援助

次に観察対象児であるA児、B児の保護者と教諭は、活動を通してどのような援助を行っていたかをエピソード記録、アンケートを手がかりにまとめた。

子どもの頑張る気持ちを支える援助、友達とのかかわりをうむ援助、子どもの自主性を促す援助などのように3種類の親と教諭、同じ援助をしているととらえる。

(2) 保護者アンケートからの考察(アンケート抜粋)



① 保護者に対して、活動の中で工夫したことたすね、その内容を整理すると、76%の保護者が、子どもへの対応の工夫を書いていた。つまり、ほとんどの保護者は目的が子どもを育てることだとして理解していたことがわかる。また、さらに子どもへの対応の工夫の内容を分類してみると子どもの主体性に関することと、社会性に関することにわけられ、97%の親が主体性に関することを書いていた。このことから、親は子どもが活動を本気になって取り組めるようにすることを大切にしながら活動していたことがわかる。

② 次に、子どもはどのようなことに喜びを感じていたかとたすねた。

自分の畑や収穫したものを人が褒めてくれることに対して、全ての子どもが喜びを感じていた。

先生、家族はもちろん、観察者、友達の親、様々な人に自分の植物を見てもらえること、褒めてもらえることが子どもの大きな喜びになっていたといえる。

③ 最後に、昨年度の親子栽培活動と比べると、95%、つまりほとんどすべての子どもの積極性は増したといえる。そして、積極性が増した理由を11項目考え、記号で質問した。10項目めに注目すると、親自身も栽培活動を楽しめたからという理由を88%もの保護者が当てはまると答えた。11項目を比べてみてもこのことが理由の1つだと考える親が2番目に多かった。このことから、親自身が活動を楽しんだことが、子どもの成長を促したと考えられる。

5 討論

(1) 観察対象児2名の活動と全体の育ちから、どのような効果があったといえるか

A児、B児、全体の育ちを総合的にみると、子どもの活動には表2の共通点がみられた。

【表2 子どもの活動の深まりの共通点】

- ・ 活動の始まりから終わりまで、一貫して自分の育てている植物、その変化に興味をもっている。
- ・ 植物がうまく育つようにと考えながら活動している。
- ・ 自分の感じたことや考えたことを、豊かに表現しながら、活動している。
- ・ 活動を通して、自分自身に自信をもったり、喜びを得たりと、自尊感情が高まっている。
- ・ 家庭、友達の植物、友達、虫などに活動が広がっている。

また、活動のスタイルは一人ひとり異なるにもかかわらず、すべての子どもに育ちがみられた要因は、表3にまとめられる。

【表3 子どもの育ちを生んだ親子栽培の活動の特徴】

- | | |
|--|----------|
| i 植物を継続して育てる活動であったこと | …オ、ツより |
| ii 親子ごとの活動であり、親子で活動方法、植えるものなどが自由であること | …エ、ツより |
| iii 子どもの活動の周りには、子どもの気持ちを共感的に受け止める様々な人がいたこと | …ユ、ツ、ホより |

(2) 親子栽培活動の附属幼稚園としての目的と実際の効果のすれ

活動の目的は、保護者と子どもが一緒に活動し、植物の生長を一緒に楽しみ、そのことを話題に家庭での会話を豊かにすることであった。しかし実際には、家庭での会話にもつながったが、その何倍も、実際活動を行っているそのときに大きな効果を生んだといえる。

(3) 多様な「協力」の中での親子栽培活動の意味と可能性

① 附属幼稚園の実践の多様な協力関係の中での位置

今回、附属幼稚園で実践された親子栽培活動は、活動前にしっかりと行われた幼稚園からの説明を契機に、保護者、教諭が子ども達を育てるという共通の目的(思い)のもと、子どもに対して変わりのない援助をしていた、つまり、保護者と教諭が対等の立場で子どもにかかわっていたことから保護者教諭の協力関係は“協働”であったといえる。

② これからの活用への可能性

幼稚園では、保護者が送り迎えしているので小中学校に比べ容易にできた。また、この活動を、学校教育の最初である幼稚園で行うことで、これから先、保護者と学校は同じ立場で協力しあえると考えられる。

6 まとめ

(1) 結論

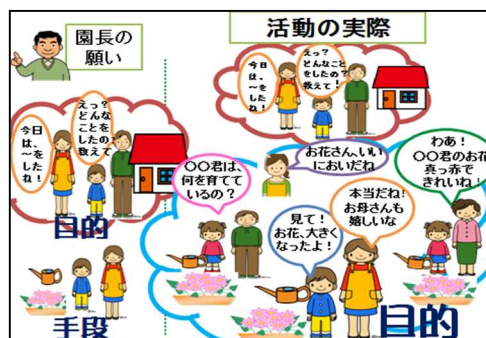
活動は、家庭での会話の増加の手段として行われたが、実際は栽培活動そのものが子どもの大きな育ちを生み、活動そのものが価値深いものとなった(図3)。また、本気になって取り組める活動があり、それに取り組む子どもの気持ちを受け止める多様な人がいる、さらに、保護者と教諭は同じ価値観で協働しながら活動を支える、そのような環境を幼稚園が整えたことこそ、子どもの大きな育ちを生んだといえる(図4)

(2) 残された問題

親子栽培活動を3年間連続して行ったことによる効果をみいだす必要がある。

小学校中学校での継続観察の必要性がある。この活動が、小、中学校でどのように生きるかということを見ていく。

附属幼稚園以外の幼稚園、保育園でも実践が可能であるかを検討する。



【図3 園長の願望と実際の活動】



【図4 子どもの育ちを生んだプロセス】

支援ツール開発グループ

キャリア発達を育む支援ツール～『参加』を高める四つの力』と関連して～

代 表 : 阿部 美穂子 (人間発達科学部)

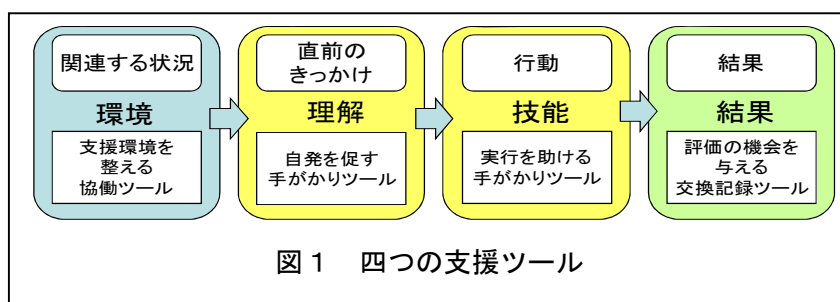
附属特別支援学校 : 長濱 由香、書川 隆行、大村 和彦、檜木 哲也、飯島 貴英

1. 研究の主題

キャリア発達を育む支援ツール～『参加』を高める四つの力』と関連して～

2. 研究内容

附属特別支援学校では、平成 8 年度から平成 15 年度まで、研究課題「一人一人の教育的ニーズに



応じた支援はどうあるべきか」とし、児童生徒が主体的に活動する姿の実現を目指した。「主体的」とは、「すべてのことを自分一人です」というのではなく、他人の力を借りたり、補助具を用いたりしながらも、できる限り自分の力で行うこと」と捉えた。この主体的に活動するために必要な道具や手段として「支援ツール」を考案した。その後研究主題を「児童生徒が地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか」とし、現在では、「支援ツール」は、附属特別支援学校のすべての教育活動で活用され、児童生徒が主体的に活動するためにはなくてはならないものとなっている。また従来の教材と違い、「いつでも、どこでも、誰とでも」使えるように作成されているため、家庭や地域生活にも活用が広がっている。

さて、平成23年度から附属特別支援学校では、研究テーマとし

て「児童生徒が地域社会で主体的に活動するための支援はどうあるべきか～キャリア発達を育む授業づ



くり」を掲げている。研究を進めるにあたり本校では「キャリア教育における『参加』を高める」を「人とのつながりの中で、児童生徒一人一人が自己の立場に応じた役割を果たしつつ、ねらいに沿って、自己及び他者の価値観を認め、喜びを感じながら、主体的に活動する姿を実現すること」と定義した。また、この「参加」を高めるために、必要な力として、本校の過去の研究を基に四つの力（図2）を考えた。そして、これら四つの力を支えるものとして、これまでの研究で取り組んできた、支援ツール・支援環境の工夫、支援者間の連携、学習プロセスの工夫があり、これらを手段として授業づくりを行い、四つの力を養うことで、児童生徒のキャリア発達がスパイラル的に育まれ「望む姿・望まれる姿」が実現できると考える。

そこで本年度はグループの主題を「キャリア発達を育む支援ツール～『参加』を高める四つの力」と関連して～」とし、児童生徒の将来の主体的な生活につながる支援ツールについて考えることとした。

3. 研究の経過

| | | |
|-----|--------|---------------------------|
| 第1回 | 10月 | 今後のスケジュールについて・事例研究のテーマの検討 |
| 第2回 | 11月～2月 | 支援ツールの作成、実践 |
| 第3回 | 2月 | 支援ツールの発表、質疑応答、協議、まとめ |

4. 成果と今後の課題

附属特別支援学校では校内のいたるところに児童生徒の自発を促すための支援ツールが配置されており、児童生徒が自立した生活を送る上でかせない手掛かりとなっている。この支援ツール部会は、学校内の支援ツールについて話し合い、新たなアイデアや可能性について考える場としている。

今年度はグループ各人で作成し指導を行った支援ツールの事例について、「キャリア発達」「『参加』を高める四つの力」という観点から話し合った。実際の実践事例を持ち寄りながら製作者と他教員が意見を交わし合い、また人間発達科学部教員から助言を受けたことで、いろいろな視点から支援ツールを見直すことができた。今後は更に、他学園、学部の教員方からもアイデアをいただき、授業や学校生活に使える支援ツールを共同で開発することができればと考える。

<実践事例（別紙資料）>

- （1）**課題解決力**（知識・技能の活用）につながる手がかりツール
「だいふき、じょうずにできるかな？」
- （2）**協同力**（役割分担、自己理解・他者理解）につながる手がかりツール
「集会を盛り上げよう！～プレゼンテーションを活用して～」
- （3）**実践力**（目標設定、主体性）・**課題解決力**（知識・技能の活用）につながる手がかりツール
「目標をもって、意欲的に取り組もう！～『リサイクル封筒作り』のツールセット～」
- （4）**協同力**（役割分担、自己理解・他者理解）につながる手がかりツール
「みんなで決めて、みんなで実行」
- （5）**課題解決力**（向上心、知識・技能の活用）につながる手がかりツール
「伸び縮み手順・メモ帳（コレで安心！）」

参考文献

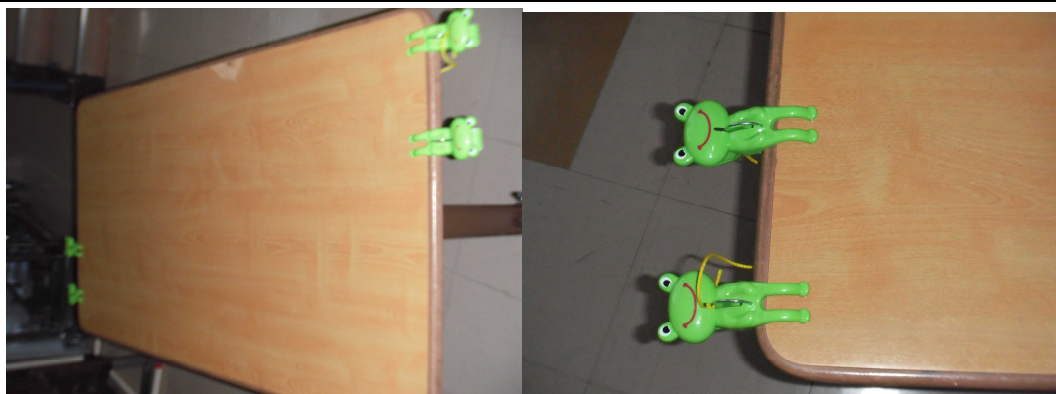
- 1) 富山大学人間発達科学部附属特別支援学校 研究紀要 第20集～第34集

課題解決力（知識・技能の活用）につながる手がかりツール

だいふき、じょうずにできるかな？

附属特別支援学校 小学部教諭 大村 和彦

小学部 生活単元学習「お手伝い名人」の中で取り組んだ支援について紹介します。



カエルの洗濯ばさみを取り付ける



カエルを目指して



お手伝い名人

児童への願い

＜対象児童＞小学部 1 年生男子

- 家庭で行うお手伝いチャレンジにつながればという願いから、作成した。
夕食の時の座卓ふきをしてほしいという希望を受けて、授業で取り組んでみた。

使い方

- ①カエルの洗濯ばさみの付いていない方からスタートする。
- ②カエルを目ざして台拭きを行う。
- ③端まで拭くとカエルを落とす。
- ④繰り返す。全部カエルを落としたら終了。

作成ポイント

- ・児童の興味のもてるカエルのキャラクターにした。
- ・端から端までを意識できるようにした。
- ・体が小さく、テーブルの縦方向を端から端までまだ拭くことができないため、横移動で拭くようにした。

感想

- ・児童机、家での座卓の拭き方など、担任、保護者と連携を取りながら、進めていければよいと考える。

＜実践のポイント＞ 人間発達科学部 阿部 美穂子

カエルを1匹ずつ落とすこと、「おもしろい」が、意欲になる支援ツールである。拭き始めは何もなく、拭き終わりにカエルがいることで、「はじまり」と「おわり」が児童に対して分かりやすい。物事の段取りを考えることができる。家庭の座卓でカエルを使用することが可能かどうか、他の物で代用できるかどうかなど、家庭のニーズを調べて、家庭でも使用できるようになるとよい。

協同力（役割分担、自己理解・他者理解）につながる手がかりツール

集会を盛り上げよう！～プレゼンテーションを活用して～

附属特別支援学校 小学部教諭 長濱 由香

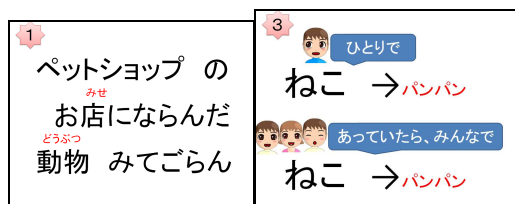
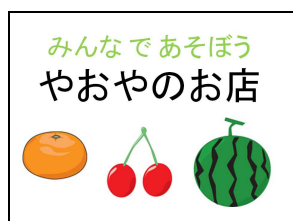
本校の小学部では、4・5・6年生の集会活動（特別活動）で、パワーポイントなどのプレゼンテーションソフトで作成した進行表などを視覚支援のツールとして活用しています。そのうちのいくつかを紹介します。



「集会で児童が司会進行」



「一緒に歌う、手話ソング」



「ゲームの説明カード」



「実物投影機を使った、夏休みの思い出発表」

児童への願い

本校の小学部の児童は、毎日行われるような活動では積極的に活動できるが、特別活動のように単発的な活動内容では見通しがもてず不安になったり、集中力を欠いたりすることがある。しかし、視覚優位の児童が多数おり、プレゼンテーションや分かりやすい進行表を活用すると集団活動でも司会者や活動内容の説明を注視することができる。そこで、集会活動などで視覚的に分かりやすい支援ツールを活用することで、活動に積極的に参加してほしいと考えた。

使い方

<一緒に歌う、手話ソング>

- ・集会で、音楽に合わせて静止画のスライドショーで手話の動作を提示する。画面を見ながら一緒に手話を行う。

<ゲームの説明カード>

- ・集会のゲームのルールやポイントを紙芝居式に説明したり、掲示して確認のために使用したりする。

<実物投影機を使った、夏休みの思い出発表>

- ・夏休み中に行った場所などの思い出を写真や文字で表したカードを各自が持ち寄り、実物投影機で映しながら発表する。

作成ポイント

- ・複数の児童が同時に情報をつかむことができるように、絵・写真・文字などを複数同時に使用する。
- ・分かち書きをしたり、漢字にはふり仮名をつけたりするなど、読みやすさに配慮する。
- ・集会時は児童生徒が司会進行を行えるように、進行表の場合は顔写真やせりふなどを入れたものをを用いる。このような進行表のスタイルは、小学部でほぼ統一されている。

感想

今回、小学部の集会活動で使用した視覚支援に関する支援ツールを幾つか紹介した。本校の中ではこのようなイラストや写真入りの支援ツールが必要に応じて学習の一部として活用されており、集会の中も例外ではない。学部集会や全校集会はもちろんのこと、卒業式や入学式でも「校歌の本」などが生徒の手によって提示されており、一人一人の児童生徒が少しでも活動に参加できるような配慮が多くみられる。学校でこのような個への配慮が全体の場でも行われるようになったのは、ここ10年ほどのことではないかと思う。「校歌の本」などは10年ほど前の教員と教育実習生の協力でできた物と聞いているが、最近では視覚支援のツールは液晶テレビ、パソコン、iPadなどに変化してきた。デジタル化しても、教員の愛情と手作り感あふれる支援ツールでありたいものである。



全校集会で使用している「校歌の本」

<実践のポイント> 人間発達科学部 阿部 美穂子

校歌の本などは、学校としての歴史を感じる。今後は、時代に合わせて児童生徒が自らパワーポイントで映像を作るなどあってもよいのではないか。高等部の情報の時間に自分たちが出演して作るのもよい。学校紹介ビデオなどでもよい。児童生徒が作るということは時間がかかり、教員が作る方が早い、と思われるかもしれないが、時間をかけてでも、自分たちが期待をもって見たいと思う物を作成してもらいたい。目標設定においては、同世代の子どもたちが体験している活動を念頭に、どんどんチャレンジしてほしいと思う。

実践力（目標設定、主体性）・課題解決力（知識・技能の活用）

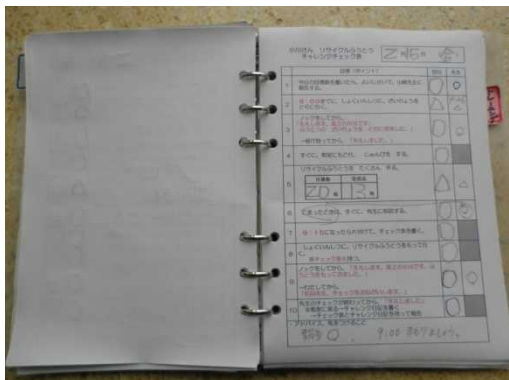
につながる手がかりツール

目標をもって、意欲的に取り組もう！

～「リサイクル封筒作り」のツールセット～

附属特別支援学校 高等部教諭 飯島 貴英

高等部では、就業体験やチャレンジタイムで、富山大学や附属小学校から依頼のあった「リサイクル封筒作り」の仕事に取り組みました。「リサイクル封筒作り」は、名称の変更などにより使うことができなくなった封筒に、新しい表紙をのり付けして、再び使えるようにする仕事です。生徒たちが、依頼された仕事にやりがいを感じながら、目標をもって、意欲的に取り組めるように、以下のようなツールセットを作成しました。



＜実践力：目標設定するためのツール＞
「チェックシート」

目標をもって仕事に取り組めるように、手順やポイントや目標などをまとめたシート。



＜実践力：主体的に取り組むためのツール＞
「準備シート」

準備や片づけを生徒自ら行ったり、仕事に必要な道具や材料を効率よく配置したりするためのシート。



＜課題解決力：知識・技能を活用するためのツール＞「のり付けシート」

表紙の紙ののり付けをより良く仕上げるができるように、封筒を置く位置（青い線）やのり付けをする箇所（赤い線）を示したシート。封筒を置くシートとのり付けをするシートの二つの枠を組み合わせて作ってある。

生徒への願い

- ・依頼された仕事に、やりがいを感じて、自信をもって取り組んでほしい。
- ・手順やポイントを、その日の目標などを意識して取り組んでほしい。
- ・準備から片付けまで、主体的に行ってほしい。
- ・のり付けの部分をより良く仕上げてほしい。
- ・活動後に振り返って自己評価することにより、反省点や意欲を次につなげてほしい。

使い方

- ①「チェックシート」は、目標をもって活動に取り組めるように、活動前に目標を設定したり、教師と目標を確認したりして活用する。また、反省点や意欲が次回につながるように、活動後に自己評価したり、教師の評価を得たりして活用する。
- ②「準備シート」は、必要な道具や材料をそろえたり、道具や材料を効率よく仕事ができるように配置したりできるように、道具や材料などを準備する際に敷いて活用する。
- ③「のり付けシート」は、表紙の紙をより良くのり付けできるように、赤い線のシートをめくる、青い線に沿って封筒を置く、赤い線のシートをかぶせてのりを付ける、表紙を貼る、の手順に沿って活用する。

作成のポイント

- ①「チェックシート」は、「次は〇〇を気を付けよう」「次はもっと頑張ろう」という気持ちをもってほしいと考え、アドバイス欄を入れた。
- ②「準備シート」は、効率よく仕事ができるように考えて置き場を配置した。
- ③「のり付けシート」は、ポイントとなる部分を赤と青の線で示した。

感想

これらの取組の結果、集中して仕事に取り組む姿、きれいに作るためのポイントを意識する姿、目標を守れたか振り返って自己評価する姿が多く見られるようになった。不良品を出してしまったときも、自分で気付いて、次から改善する様子が見られた。このことから、自分の仕事に責任をもって意欲的に仕事に取り組み、より良いものに仕上げようとする姿を実現するためには、活動を支える支援ツールを導入するとともに、目標を振り返って評価するという「評価の機会」を多く設定することが有効であると思われる。



<実践のポイント> 人間発達科学部 阿部 美穂子

県内の学校やセンターなどでもたくさんやっている仕事である。現在は一部だけをしているが、紙のカットなども自分たちで行い、一続きの独立した仕事になるともっとよい。完成するための手順に配慮してうまく作りこんであるが、うまくいかなかったときのための修正の手段や、途中で何かアレンジができる余裕があるとよい。生徒が「こうしたらやりやすい」「自分はこうしてみました」と言ってくれるような工夫のチャンス、である。そういうことを自分から言える人を育てたい。

協同力（役割分担、自己理解・他者理解）につながる手がかりツール

みんなで決めて、みんなで実行

附属特別支援学校 中学部教諭 書川 隆行

附属特別支援学校 中学部教諭 荒木 直美

日常生活の指導「チャレンジタイム・クラスタイム」における、「ワークチャレンジ」（掃除や教師の手伝いなど）「お楽しみチャレンジ」（余暇活動、運動など）について、クラスの友達 6 人と調整し合い、1 週間のスケジュールを決める際に利用するボードを作成しました。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---------------------------|-----------------|---------------------------|-----------------------|---------------------------|
| A | トレーニング
階段掃除 | トレーニング
図書室掃除 | トレーニング
トラボでバス | トレーニング
トラボでバス | トレーニング
ミッション |
| B | トレーニング
掃除機がけ | トレーニング
イラスト | トレーニング
ダスターがけ
流し台掃除 | トレーニング
掃除機がけ | トレーニング
イラスト |
| C | トレーニング
ミッション | トレーニング
イラスト | トレーニング
イラスト | トレーニング
図書室掃除 | トレーニング
階段掃除 |
| D | トレーニング
ダスターがけ
流し台掃除 | トレーニング
イラスト | トレーニング
イラスト | トレーニング
ミッション | トレーニング
黒板掃除 |
| F | トレーニング
パズルで
ダンス | トレーニング
黒板掃除 | トレーニング
図書室掃除 | トレーニング
パズルで
ダンス | トレーニング
ダスターがけ
流し台掃除 |
| E | トレーニング
パズル | トレーニング
パズル | トレーニング
黒板掃除 | トレーニング
階段掃除 | トレーニング
掃除機がけ |

「チャレンジスケジュールボード」

誰か替わっても
られますか？

私、交替しても
いいですよ。



調整している様子

生徒への願い

- 1 週間のチャレンジ活動のスケジュールを選んで決めることができるようになってほしい。
- 「ワークチャレンジ」（掃除や教師の手伝いなど）「お楽しみチャレンジ」（余暇活動、運動など）について、クラスの友達 6 人と調整し合い、1 週間のスケジュールを決めることができるようになってほしい。

使い方

- ① 自分のしたい「お楽しみチャレンジ」を二つ決める。
 - ② 自分のしたい「ワークチャレンジ」を三つ決める。
 - ③ 「ワークチャレンジ」について友達と重なったら話し合いで誰がするか決める。
 - ④ 同じ日に同じ「ワークチャレンジ」が重ならないように話し合いで調整する。
- ※トレーニングは毎日行うため「ワークチャレンジ」とセットにしてある。

作成ポイント

- 「ワークチャレンジ」と「お楽しみチャレンジ」は色で区別した。
- 自分、友達の1週間の動きが分かるように、6人分を一つのボードにした。

感想

- 最初は予想通り、自分がしたい「ワークチャレンジ」に固執する生徒が見られたが、徐々に譲り合う姿が見られ、生徒達の成長に驚かされた。

＜実践のポイント＞ 人間発達科学部 阿部 美穂子

まず、書き換えて変更できるところがいい。このツールのように、物を介して話し合いをすることでみんなが注目できる。見ないと自分に有益な情報が得られないから、見る必然性が生まれる。また、自分の仕事を他の人も担当することがあるので、自分の仕事は他の人とどう関わっているのかも分かる。話し合う機会、ゆずり合う経験など大切なことを学び合えるツールであると思う。

課題解決力（向上心、知識・技能の活用）につながる手がかりツール

伸び縮み手順・メモ帳（コレで安心！）

附属特別支援学校 高等部教諭 檜木 哲也

高等部 作業学習の中で取り組んだ支援について紹介します。



「腰下げ式手順・メモ帳」



<使用場面>

生徒への願い

- ・手掛かりをかってよく使ってほしい。
- ・さっと取り出して、活用してほしい。
- ・アドバイスをすぐメモしてほしい。
- ・自分の力で問題を解決してほしい。

使い方

- ①知りたい手順や書きたいことなどがあったら、引っ張る。
- ②見る・書く
- ③手を離す。（シュッともとに戻る）

作成ポイント

- ・作業中でも邪魔にならないように、小ぶりに。
- ・さっと伸ばして見られるように、リール式のフックを付ける。
- ・メモを取るための付箋メモやマジックも一緒に綴っておく。

感想

- いざ困ったときに、さっと取り出す姿がかっこいい。

＜実践のポイント＞ 人間発達科学部 阿部 美穂子

ツールにおいて、「かっこいい」はとても大事なポイントである。私たちも、かわいいものなど、自分の好みの使いたい物を選んで使う。一方で、「使い勝手がいい」というのも大事なポイントになる。人によって、首から下げたり、ポケットに入れたりする方が使いやすいという人もいると思う。情報量が少ない方がいい場合もあると思う。「かっこいい」と「使い勝手がいい」、この二つの視点から、使う人が自分にぴったりの物を選ぶようにできたらよい。そして、将来的には、自分で自分の仕事のやりやすいツールを作ったり、アレンジできたりする社会人になってほしい。

ムーブメント教育グループ

| | |
|----------|---------------------|
| 学 部 | 阿部美穂子(代表) |
| 附属特別支援学校 | 栗林睦美・野崎美保・池田弘紀・竹脇里織 |

1 目的

- ・ムーブメント教育について理解を深め、教育活動に生かしていけるようにする。

2 方法



- ・ムーブメント教室や、ムーブメント研修会に参加することで、ムーブメント教育の理解を深める。
- ・ムーブメントを取り入れた授業実践や事例検討を行うことで、ムーブメントの教育活動への生かし方について考える。


3 研修の経過

| 実施日 | 研修会 |
|-------------------------------|--|
| 平成24年
8月26日(土) | 研修会『親子ムーブメント教室』
場所：しらとり支援学校 体育館 |
| 10月31日(水) | 授業研究『高等部 音楽科』
場所：附属特別支援学校 音楽室 |
| 11月 8日(木)
13日(火)
20日(火) | 授業研究『高等部 自立活動』
場所：附属特別支援学校 体育館 |
| 11月12日(月) | 研修会『運動感覚統合プログラム国際シンポジウム・ワークショップの事後報告会と実技演習』
場所：富山大学人間発達科学部 プレイルーム |
| 12月22日(土) | 研修会『親子ムーブメント教室』
場所：高志支援学校 体育館 |
| 平成25年
3月15日(金) | 授業研究『小学部低学年グループ 遊びの指導』
場所：附属特別支援学校 遊戯室 |
| 3月19日(火) | 研修会『事例・事後検討会』
場所：附属特別支援学校 生活訓練室 |

（１）プログラムについて

「みんなで海底大冒険！」

| プログラムの概要 | 活動の様子より |
|---|---|
| <p>1) ダンスムーブメント
【海の仲間たちの登場】
○赤：カニ、緑：ワカメ、ピンク：サンゴの登場
○海のイメージでサークルダンス
【海に潜ろう！】
○波遊びのイメージで走行ムーブメント
・青ロープやスカーフをまたいだりくぐったりする。</p> | <p>・それぞれにテーマカラーが決められていたり、キャラクターに合わせた動きを設定したりと、児童にとって分かりやすく、参加しやすい工夫がなされていた。</p>  |
| <p>2) 設定ムーブメント
【海底で遊ぼう】
○海のイメージで設定されたエリア遊び
* <u>エリアA</u>：「ワカメさんとゆ〜らゆら」
・ユランコを使った揺れやトランポリンを楽しむ。
* <u>エリアB</u>：「カニさんと一緒にバランスよく進もう！」
・平均台、足型、形板の飛び石、ロープの道でバランスを保って歩く。
* <u>エリアC</u>：「サンゴちゃんのおうちでかくれんぼ」
・フープのトンネルやカラーバンドをくぐったりまたいだりして通り抜ける。</p> | <p>・3か所のエリアを自由に行き来しながら、それぞれの場所で積極的に活動する姿が見られた。
・ユランコやカラーバンドなどの道具を使う際には、近くの人に依頼したり話し掛けたりする姿が見られた。</p>  |
| <p>3) 設定ムーブメント
【サンゴちゃんを救え！みんなでサメを追い払おう！】
○「スイミー」の物語のイメージでストーリー表現
・皆で塊になり、「右、左、前、後」などの掛け声に合わせて動く。</p> | <p>・参加者全員がスカーフに包まれて一つの塊になって動くことで、隣の人にぶつからないように気を付けたり、掛け声と動きを合わせようとしたりする姿が見られた。</p> |

| | |
|---|--|
| <p>4) 設定ムーブメント
【パラシュートで海の宝石のパワーを集めよう!】</p> <p>○パラシュートムーブメント</p> <ul style="list-style-type: none"> • 助けてくれたお礼の宝石（カラーボール）をパラシュートに乗せて、皆で弾ませたり、転がしたりする。 | <ul style="list-style-type: none"> • カラーボールが弾む様子に着目してパラシュートを動かす児童や、パラシュートの揺れる様子を見るために下に潜り込む児童がおり、それぞれ自由にパラシュート遊びに参加する姿が見られた。 |
| <p>5) 振り返り</p> <p>○活動の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> • 波のロープとスカーフを再びくぐって（海を出て）活動を終了する。 • 「今日は何をやったかな?」「楽しかった?」などの問いかけをしながら活動を振り返る。 | <ul style="list-style-type: none"> • 「こんな風に遊んだよ」「〇〇が楽しかったよ」など、具体的に話したり、実際にやってみたりする児童がいた。  |

(2) 講演

「創造的な遊びの場を共に創ること

～クリエイティブムーブメントの活用を中心に～

講師 和光大学 准教授 大橋 さつき 先生

(3) 参加を終えて

今回も、参加者が児童、大人を合わせて50名を超える大集団であったが、大きな輪になってダンスをしたり、集団で塊になって動いたりするなど、大集団の良さを生かしたダイナミックな活動の展開となっていた。また、「海」というテーマに沿って、ポイントの絞られた分かりやすいダンスや様々な身体表現によって、参加者全員が自由にイメージしたり工夫したりして主体的に参加する姿が見られた。

講演の中で大橋先生よりお聞きした、創造的ムーブメントによる環境作りのポイントとして、「選択肢を作る」「自由にイメージできるようにする」「別のやり方を準備しておく」「物や音など環境との対話ができるようにアレンジする」が印象に残った。

今回の活動プログラムや大橋先生のお話など、今後の授業づくりに生かしていきたいと感じた。

(竹脇 里織)

＜音楽＞「トライ ミュージック」

～号令を聞いて、自由にならそう（ドン・ユ）～

附属特別支援学校 高等部教諭 野崎 美保

1 対象生徒







高等部 1年4名、2年4名、3年4名 （※当日1名欠席）

2 目標

- ・号令に合わせて楽器演奏と手拍子とを切り替えたり、楽器を使って自由に演奏したりすることができる。
- ・号令から音をイメージして楽器の鳴らし方を工夫したり、友達の演奏する様子を参考にして鳴らし方を変化させたりすることができる。

3 活動内容

| 学習活動 | | 目標 |
|---|---|--|
| 1 導 入 | | |
|  | ①即興演奏や、今日の活動内容について知る。 | ♪ ドン・ユ
号令を聞いて、
自由にならそう
<small>そっ きょう えん そう</small>
即 興 演 奏 |
|   | ②楽器選び・楽器紹介
・各自が楽器を一つ選んで準備し、楽器の名前と鳴らし方を友達に発表する。 | |
|   | ③「ドン・ユ」について説明・練習
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; display: inline-block;">この日は、スローとメカについては行いませんでした。</div> | <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: flex-end;"> <div style="background-color: #f0f0f0; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">ドン 楽器をならす</div> <div style="background-color: #d0f0d0; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">スロー スローモーションで</div> <div style="background-color: #fff0d0; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">メカ 機械みたいに 動いて</div> <div style="background-color: #fff0d0; padding: 2px;">ユ 手拍子</div> </div> |
| 2 ドン・ユ
※半分のメンバーが行い、残りのメンバーは、友達の様子を見る。 | | |
|   | ①「ドン！」
・教師の「ドン！」という号令を聞き、楽器を選んで自由に鳴らす。 | ・自分で演奏方法を工夫して鳴らすことができる。 |

| | | | |
|--|--|--|---|
|  |  | <p>②「ユ！」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ユ！」の号令が聞こえたら、楽器の演奏をやめ、手拍子をしながら行進する。 <p>③ ①と②を数回、繰り返す。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・友達とペースを合わせ、移動や手拍子をする事ができる。 ・友達の様子を見て演奏方法を変化させることができる。 |
| 3 感想発表 | | | |
|  |  | ①友達の演奏についての感想や気付いたことを発表する。 | |
|  |  | ②友達がやっていた演奏方法の工夫を見合う。 | |
| 4 メンバー交代して、2と3を行う。 | | | |

4 成果

- ・いろいろな演奏の仕方を工夫することをねらって「ドン！」を繰り返してみたが、演奏法の工夫や変化は見られず、周りの音に気を向ける様子も見られなかった。「やさしくドン!」、「風のようにドン!」などイメージも一緒に伝えたところ、号令を聞いて楽器を鳴らす強さや鳴らし方に変化をつける様子が見られた。さらに、その生徒を見て自分もそっと鳴らすなどグループでの取り組みに変化がみられ、音もまとまりのあるものになった。
- ・別のグループの演奏する様子を見て友達が行っていた演奏方法の工夫を参考にしたり、次はどんな号令がかかるのかを楽しみにする様子が見られたりするなど、普段あまり積極的に楽器演奏に取り組むことのない生徒も、友達と一緒に伸び伸びと楽器に向かい、表現することを楽しむことができた。

<実践のポイント> 人間発達科学部 阿部美穂子

手拍子をする場面では歩くなどして動きを出し、演奏する場面との変化をつけるとよい。いろいろな楽器に触れさせたいのであれば、外側に円状に机を並べ、間隔を開けて楽器を置くなど、環境の設定が大切である。合図があったらすぐに目の前の楽器を使って演奏することができる。

演奏の際には楽器をどのようなイメージで鳴らすのかを、「〇〇な風に」など、教師から間髪いれずに次々に示していくことが大切である。その際には効果的に音楽を用いる方がよい。

活動の最後には、まとめとして一つの演奏として形にして終われるとよい。

＜自立活動の指導＞「プレイバックロンドンオリンピックパート2」 ～イメージして体を動かそう～

附属特別支援学校 高等部 教諭 栗林 睦美

1. 対象生徒

- (1) 高等部 1年生5名、2年生4名、3年生3名
- (2) 実態
 - 1) 体の使い方にぎこちなさがある。
 - 2) 友達と一緒に動きを合わせて活動する経験が乏しく、難しい。

2. 題材

学習発表会のステージ発表「プレイバックロンドンオリンピック」では、友達と協力し合って組み体操、マット運動などいろいろな動きに取り組んだ。この経験を生かし、本題材では、更に、ロンドンオリンピックをテーマに挙げ、新しいイメージ、動きの中で、自分の体を知り、友達との関わりの中で、他者の身体を知ることを目的に設定した。

3. 目標

- (1) 個別の指導計画（自立活動の目標）



友達と動きを合わせたり、自分の体の使い方を考えたりしながら、いろいろな道具を使った軽運動に取り組むことができる。
- (2) 題材の目標
 - 1) ロンドンオリンピックをイメージした活動を通して、自分の体を工夫して動かしたり、教師や友達の動きを模倣したりすることができる。
 - 2) 道具を使って友達と関わる中で、自分や友達の身体、動きを意識することができる。
 - 3) 集団の中で自分の役割を果たしたり、適切に行動したりして活動をすることができる。

3. 活動内容

- (1) 入場（行進）…旗を持った入場をイメージしてカッコよく歩こう
- (2) 開会式（聖火）…聖火が燃える様子をみんなで表現しよう
- (3) 競技（シンクロナイズドスイミング）…音楽に合わせて、ダンスをしよう
- (4) 閉会式（フィナーレ）…オリンピックの終わりを手拍子と動きで表現しよう

| | 学習活動 | ねらい |
|--|---|---|
| 入場（行進）
 | <p>＜ペアで＞</p> <p>○スカーフをペアで持って広げて張る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人が動かず、もう一人が距離を少しずつあけていく（近づいていく） <p>○音楽に合わせて、スカーフを張りながら歩く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カニ歩きで歩く。 <p>○音楽が止まり、教師の指示を聞き、スカーフを体の部位にくっつける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5数える間その部位にくっつける。 | <ul style="list-style-type: none"> ・スカーフを張る、たるませることを体感しながら、友達との距離感を学ぶ。 ・スカーフを張り、友達との適切な距離間を保ちながら歩く。 ・頭、腹、膝など体の部位を意識し、その位置に正しくスカーフをくっつける。 |
| 開会式（聖火）

 | <p>＜ペアを基準に集団で＞</p> <p>○スカーフを持って中心の教師の所に集まる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リーダーは自分が持っているスカーフの端を中心にいる教師に手渡し、ペアの友達を持っている端を二人でそれぞれ持つ。 <p>※中心の教師は動かず、手渡されたスカーフの片方を束ねて持つ。</p> <p>○スカーフをペアで持って、中心の教師を軸に回転しながら歩く、止まるを繰り返す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽が止まった時に教師の指示を聞きその姿勢や動きを繰り返す。ポーズが取れたら10回上下に振る。 <p>※言葉掛け「片足を前に出す、立てる、お尻を上げる」</p> <p>○スカーフの片付けをペアで行う。</p> <p>※言葉掛け「このかごに入るように畳んでください」</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・音楽が変わると、中心に移動し、聖火をイメージした隊形を作る。 ・聖火が燃えるイメージを、スカーフを持って円を描くように歩く、振る、ポーズをとるという動きで表現する。 ・音楽や教師の指示を聞き、スカーフの振り方、ポーズの姿勢を変える。 |

| | | |
|--|--|--|
| <p>競技(シンクロナイズドスイミング)</p>  | <p>＜集団で＞</p> <p>○輪になって体育座りで座り、どんな泳ぎをするか考えて発表する。発表した友達の泳ぎをみんなでやってみる。</p> <p>○音楽に合わせて、友達の考えた泳ぎや基本の動き（体育座り、手を後ろにつく）から足上げなどシンクロをイメージしたいろいろな動き、姿勢を取る。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・プールの中で、自分が泳ぎたい泳ぎを自由に考え、発表する。 ・友達の発表を見て、同じ動きをする。 ・音楽に合わせて、友達と一緒に動きを合わせることを楽しむ。 |
| <p>閉会式（フィナーレ）</p>  | <p>＜集団から個人へ＞</p> <p>○音楽に合わせて、教師の動きを模倣しながら、歩き、整列する。
（ドンドンで手を2回叩き、パッと教師の動きを見て万歳、胸、膝など模倣する。）</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・瞬時に動きを見て反応し、模倣する。 |

4. 成果

- ・入場（行進）では、最初は、ペアでスカーフを広げ張った状態で歩くという活動が難しかった。課題を、スカーフをペアで広げて持つ、張る、張って歩くと三つに分け、練習することでペアの友達と適切な距離を取りながら歩くことができるようになってきた。
- ・開会式（聖火）では、聖火と自分たちの動きの表現のイメージが一致できるよう写真を提示しながら活動したが、創造的かつ、目的的な動きには中々ならなかった。しかし、スカーフを媒介に、友達と一緒に動きを共有することで、できなかった膝立ちなどの動きがスムーズにできるようになったり、スカーフの振り方を工夫したりする様子が見られた。
- ・競技（シンクロナイズドスイミング）では、基本のポーズから次の動きに変化するという活動の中で、動きにめりはりが出てきた。音楽に合わせて、友達とダンスを行うことを楽しみにして活動に参加する生徒が増えてきた。
- ・閉会式（フィナーレ）では、ドンドン、パツのリズムに合わせて教師の動きに注目し、瞬時に模倣することが、難しかったが、繰り返しの中で、教師を見て、素早く模倣する姿が増えてきた。

＜実践のポイント＞ 人間発達科学部 阿部美穂子

動きの経験の乏しさがあるので、いろいろな活動の中で自分の体を意識して使うこと、友達と一緒にいる活動を通して、他者との関係を学べる経験を増やしていくことが大切である。動きの練習的なことは、毎回さらりで行うとよい。今後はパラシュートを取り入れたいろいろな学習活動を毎回行うことで動きや活動のバリエーションを広げていけると思われる。

＜遊びの指導＞ごっこ遊び

「おおかみだ！かくれろ～おおかみと七ひきのこやぎ～」

附属特別支援学校 小学部教諭 池田 弘紀

1 対象児童

小学部 1、2、3年 各3名

2 目標

○活動に見通しをもって「おおかみと七ひきのこやぎ」のごっこ遊びに取り組み、友達や教師と一緒に楽しむことができる。

【こやぎ役】

- ・こやぎの家に遊びに来た動物たちの姿勢や動き、特徴などを考え、表現することができる。
- ・おおかみ役の友達や教師に見つからないように工夫して隠れたり、自分で新たな隠れ場所を考えたりすることができる。

【おおかみ役】

- ・おおかみ役の教師と一緒に、ストーリーに沿って、おおかみ役を演じることができる。

3 活動内容

| 学習活動 | |
|--|--|
| ①先生の話进行こう（導入） <ul style="list-style-type: none"> ・「おおかみと七ひきのこやぎ」のストーリーに沿って、今日の活動や自分や友達の役割を理解する。 ・前回の様子を写した動画やスライドを見て、自分や友達の良かった点や新しく工夫した点などを振り返る。 |  <p>＜話を聞く児童の様子＞</p> |
| | <div> <div> 【配慮点】
 音や動きのある話『おおかみと七ひきのこやぎ』を作成し、その内容に沿って、授業を進める。 </div> <div>  <p>音や動きのある話
『おおかみと七ひきのこやぎ』</p> </div> <div>  <p>前回の様子を写したスライド</p> </div> </div> |

②森の動物と遊ぼう

- ・こやぎの家に遊びに来た動物に興味をもち、全員で声を合わせて尋ねる。
- ・こやぎの家に遊びに来た動物の姿勢や動き、特徴などのイメージを膨らませて、歩いたり走ったりする。

※表現する動物は、毎時間2種類ずつ行う。

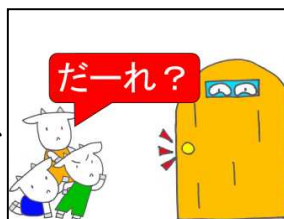
例：ごりら、うさぎ、さる、へび、ぞう、ペンギン など



〈動物の姿勢や動きなどを表現している様子〉

【配慮点】

こやぎの家に遊びに来た動物のイメージが膨らむように、絵や写真を提示したり、曲（ぞうの場合『ぞうさん』、さるの場合『アイアイ』など）を流したりする。



③おおかみだ隠れろ

（こやぎ役の児童）

- ・時計やテレビに見立てた段ボールの中やテーブルの下などに隠れる。
- ・見つかった場合、おおかみの家に入る。
- ・おおかみ役の児童と教師が寝る演技をしたら、捕まっていないこやぎ役の児童に助けを求める。
- ・捕まらなかった児童は、おおかみの家の鍵を開け、友達を逃がす。

（おおかみ役の児童）

- ・隠れているこやぎ役の児童を見つけ、おおかみの家に連れて行く。
- ・捕まっていないこやぎ役の児童が残り一人になったら、寝る演技をする。
- ・こやぎ役の児童が全員隠れたら、おおかみ役の児童と教師は目をさまし、こやぎ役の児童を捕まえに行く。

※3回繰り返す。

※3回目は、こやぎ役の児童は全員捕まる。



〈こやぎ役の児童の様子〉



〈おおかみ役の児童の様子〉




〈友達を助けるこやぎ役の児童の様子〉

【配慮点】


「おおかみと七ひきのこやぎ」をイメージして楽しむことができるように、隠れ場所として、時計やテレビなどに見立てた段ボールを用意する。また、新しい隠れ場所を自分で考えるよう、遊戯室の周りに長机や衝立など、隠れやすそうな物を置く。



| ④おおかみをやっつけろ | |
|--|--|
| <p>（こやぎ役の児童）</p> <ul style="list-style-type: none">・お母さんやぎに、助けを求める。・マジックテープが付いた、石に見立てたカラーボールを、おおかみ役の児童や教師のお腹に付けて退治する。 | <p>（おおかみ役の児童）</p> <ul style="list-style-type: none">・寝た振りをして、石に見立てたカラーボールをお腹に付けられる。・目をさまし、退治された演技をしながら、遊戯室から去る。 |
| <p>⑤今日の活動を振り返ろう（振り返り）</p> <ul style="list-style-type: none">・動画で今日の活動を振り返り、質問に答えたり、動きや隠れた場所を発表したりする。 | |



〈おおかみ退治の様子〉



〈退治された演技をする
おおかみ役の児童の様子〉

4. 成果

- ・簡単なストーリーのある「ごっこ遊び」を通して授業を展開したことで、児童のファンタジー世界への入り込みやすさを活かして、友達や教師と一緒に主体的に活動を楽しむ姿につながった。
- ・活動③では、ただ隠れるのではなく、おおかみ役の児童や教師の動きを物陰や隙間から目で追ったり、見つからないように小さく縮こまったりするなどの友だちを意識して活動することができた。
- ・友だちがおおかみ役を演じることにより、「私も（おおかみ役を）したい」という声を、何人もの児童から聞くことができた。友だちが楽しく演じる姿から遊びの幅を広げることができた。
- ・活動①⑤の導入と振り返りにおいて、動画やスライドを用いたことにより、自分や友達の良かった点に気づき、友達のまねをしたり、新しく考えたりするなどの姿につながった。また、テレビに映ることが意欲となり、積極的に動物の姿勢や動き、特徴などを表現することができた。



〈こやぎ役を演じる
児童の様子〉



〈隠れる児童の様子①〉



〈隠れる児童の様子②〉

〈実践のポイント〉 人間発達科学部 阿部美穂子

毎回新しい課題を盛り込んでみると、より面白い。例えば活動②③では、どのタイミングでどの動物が出てくるかまでも児童が選べるようにしてみるのもよい。同じ動物でも、ペアで表現してみたり、〇〇の動物になって～をしてみたりなど、バリエーションを増やすのもよい。

障害理解教育グループ

視覚障害理解教育の実践とその効果2

－視覚障害者の日常生活を伝えることによる子どもの認識の変化－

代 表 : 西館有沙
附属幼稚園 : 岩田郁代
附属小学校 : 秋盛勇
研究協力 : 阿部美穂子、岡崎誠司

1. はじめに

子どもが視覚障害者の能力を過小評価し、それによって「目が見えない人は常に援助を必要としている」「困難に立ち向かう努力家である」などの認識を形成する傾向にある（河内，2001；水野，1999）ことをふまえて、昨年度はそうしたステレオタイプの形成を防ぐことを目的とした教育実践を小学1年生と3年生を対象に行った。実践に先立って行った質問紙調査では学年に関係なく、「着替え」「靴履き」「食事」「外歩き」「入浴」のいずれも、視覚障害者一人で行けると答えた子どもは4割に満たなかった。靴を履くという単純な動作でさえ、1年生の68%、3年生の61%は視覚障害者一人では困難であると考えていることが確認された。

昨年度に小学3年生に対して行った教育実践では、総合的な学習の時間2コマを用いた。1コマ目には、子どもたちに視覚情報を得られなくても触覚や聴覚を使ってわかることがあるという実感をもってもらうことをねらい、目隠しをして硬貨等の識別体験を行った。2コマ目には、触ってわかる工夫として点字がついている製品や設備の紹介を行った後、点字ブロックの役割について伝えた。

2. 今年度の研究の目的

今年度は、昨年度に授業実践を行った子ども（昨年度に小学3年生であった子ども）に対して、昨年度のフォローを含めた教育実践を行い、子どもの視覚障害理解の促進を図ることを目的とした。昨年度の実践では、子どもが得たさまざまな気づきのなかに、視覚障害者がお金を区別することはむずかしい、視覚障害者が一人で外を歩くのは大変である、物を触っていろいろなことがわかる視覚障害者はすごいなど、そのままにしておくと視覚障害者の能力観をゆがめてしまう可能性のある内容が含まれていた。それらは、子どもたちが視覚障害者の実際の姿を知らないことにより生じている誤解であると考えられた。そこで、本実践では、視覚障害者が日常生活をどのように送っているかについての知識化を促す教育を行うことにした。加えて、多くの子どもが昨年度の授業において興味を示した点字に触れる体験や、視覚障害者への援助方法について考える活動を行った。

3. 小学3年次を対象にした総合的な学習の時間における教育実践

（1）実践の手続き

対象児は、富山市内の小学校の第4学年2クラスの子ども79名であった。1クラスにつき総合的な学習の時間2コマ（1コマ45分）を使って、視覚障害理解教育を行った。第1回目の授業の実施時期は2013年1月中旬、第2回目は1月下旬であった。授業は各クラスの教室内において担任が行った。

（2）各コマの授業テーマと指導案

本実践において用いた指導案を表1、2に示した。1コマ目のテーマは「目の見えない人の実際の生活を知ろう」に設定し、視覚障害児の一日を描いた紙芝居（図1）の読み聞かせを行った。紙芝居の物語に出てくる音声時計や視覚障害者用オセロゲームは実物を子どもに見せ、音声信号機は録音した音を子どもに聞かせた。2コマ目のテーマは「目の見えない人を手伝う方法を考えよう」に設定し、視覚障害者と食事を一緒にとることになった場合に、食器の位置や皿の中身（図2）等をどのように視覚障害者に教えたらよいかをグループごとに考える活動を行った。なお2コマ目には、昨年度の授業実践や1コマ目のフォローとして、点字に触れる体験も行った。

表1. 1コマ目の指導案（1コマ45分）

| 学習活動 | 主な指導・支援（○）と留意点（・） | 準備物 |
|-------------------|---|--|
| 1. 導入（2分） | <ul style="list-style-type: none"> ・ 昨年の実践を振り返った後、本実践の内容を説明する。
「今日は目の見えない友だちが、どんな風に一日を過ごしているかを一緒に見ていくことにしましょう。」 | |
| 2. 紙芝居の読み聞かせ（25分） | <p>○視覚障害児の日常生活を、紙芝居を用いて伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 読み聞かせの途中で、実物を見せる、実際の音を聴かせるなどの工夫をする。 <p>〔紙芝居の内容〕</p> <ol style="list-style-type: none"> ①主人公は小学4年生の女の子 ②主人公の見えの状態 ③起床と着替えは自分でする ④朝ごはんも自分で食べられる ⑤学校には白杖を使って一人で登校 ⑥毎日通う学校だから、どこに何があるかがわかる ⑦学校の勉強のこと ⑧点字という文字を使う ⑨上手に歩く練習をする ⑩家での過ごし方（テレビや音楽など） ⑪風呂には一人で入る | <p>紙芝居</p> <p>音声時計</p> <p>音声信号機の音</p> <p>オセロ</p> |
| 3. グループで話し合い（15分） | <p>○新しく得た知識を整理し、視覚障害者に聞いてみたいことを考え、ワークシートにまとめる。</p> | ワークシート |
| 4. まとめ（3分） | <ul style="list-style-type: none"> ・ 次の時間の内容を伝える。
「実際に点字を見て、さわってみましょう。」 | |

表 2. 2 コマ目の指導案（1 コマ 45 分）

| 学習活動 | 主な指導・支援（○）と留意点（・） | 準備物 |
|-----------------------------------|---|--|
| 1. 導入（1 分） | <ul style="list-style-type: none"> 授業の内容を説明する
「目の見えない人が使う文字を実際に触ってみよう」 | |
| 2. 目の見えない人が
使う文字「点字」
（20 分） | <p>○目をつぶって、「同じ点字あてクイズ」をする。</p> <p>①二人一組になり、点字を触る順番を決める。</p> <p>②点字を触る人は目隠しをする。隣の子どもが点字触察クイズ（6 問）の点字カード 1 枚を目隠しした子どもの前に置き、目隠しをした子どもの手を点字のところへ誘導して、「同じか、違うか」とクイズを出す。</p> <p>③目隠しをした子どもは点字を触ってみて、同じか違うかを答える。隣の子どもは、「正解」「不正解」を目隠しの子どもに伝え、記録カードに○×をつけていく。</p> <p>④役割を交代して、同様に点字を触る体験をする。</p> <p>⑤クイズの答え合わせをする。</p> <p>⇒点字には触ってすぐにわかるものと他の文字との区別がつきににくいもの、わかりにくいものがあることを教員は子どもと確認するようにする。</p> | <p>点字クイズ
用の点字
カード</p> <p>記録シート</p> |
| 3. 目の見えない人の
お手伝い（1 分） | 「目の見えない人を手伝う方法について考えよう」 | |
| ①文字を読む
（2 分） | <p>○朗読ボランティアの紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 図書館などに点字の本があること、点字を使う人にとって点字の本があるのは助かることを伝える。 また、図書館には本を読んでくれるボランティアがおり、このような手伝いがあることを伝える。 | |
| ②一緒にご飯を
食べる
（20 分） | <p>○目の見えない友だちとご飯を一緒に食べることになったら、どのようなことにお手伝いが必要かを考える。</p> <p>①失敗例を出す（イラストで示す）。</p> <p>②よい手伝いの仕方についてグループで試してみる（ワークシートにまとめる）。</p> <p>③おすすめの手伝いの仕方を発表する。</p> <p>④視覚障害者が助かる手伝いの方法について解説する。</p> | <p>イラスト
ワークシート</p> |
| 4. まとめ（1 分） | 「私たちが、目の見えない人にわかる方法で、正しく手伝うと、目の見えない人も安心だね」 | |

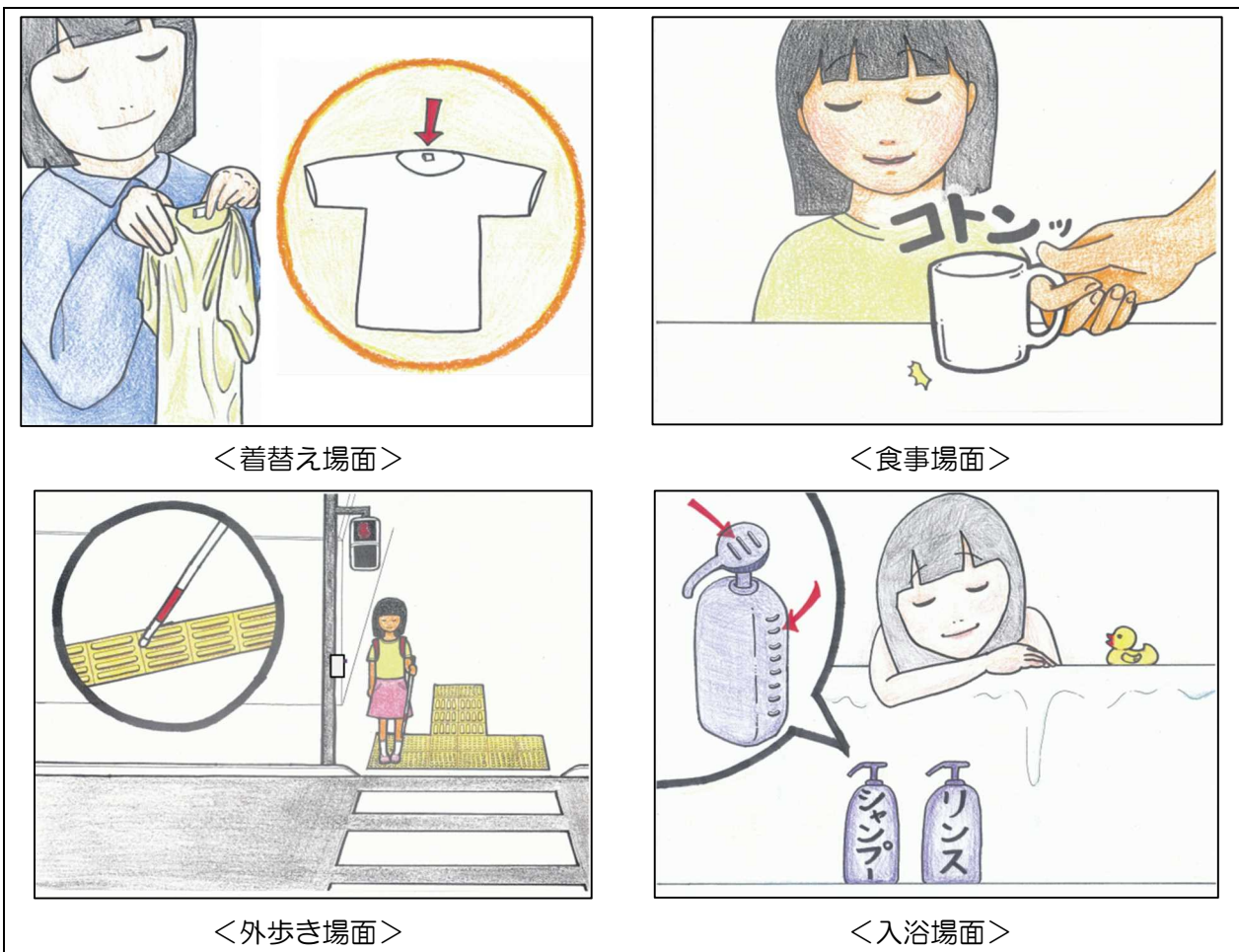


図 1. 指導案 1 で読み聞かせた紙芝居の 4 場面の絵

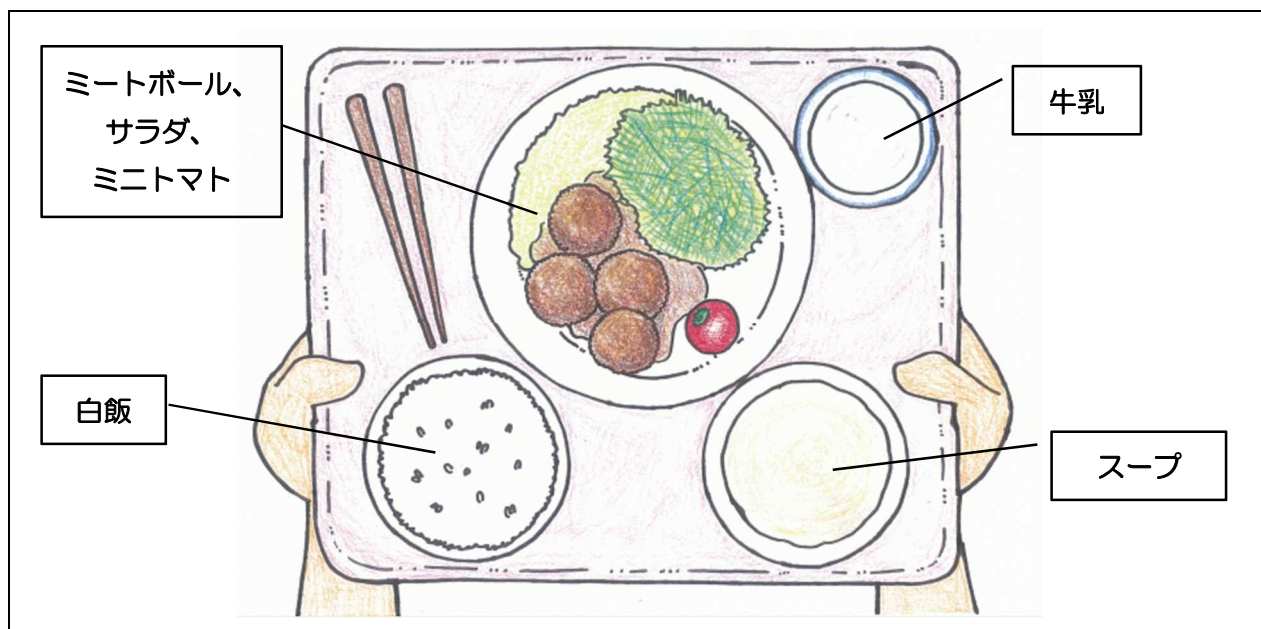


図 2. 食事場面における援助方法を考える際に設定した皿の中身

4. 授業前後における視覚障害者の能力に関する子どもの認識の変化

(1) 方法

2コマの授業とも受けた富山市内の小学校の第4学年2クラスの子ども73名を対象に、授業の1週間前から授業日前日までの期間内（2013年1月9、10日）と、授業後1週間以内（2013年1月22、25日）に、同じ内容の質問紙調査（自記式）を2回行った。質問紙は各クラスの担任によって直接配布・回収された。授業前後で個の回答結果を対応させる必要があったが、実名を記入させることにより回答にバイアスがかかることに配慮が必要であった。そこで、好きな動物と好きな食べ物を組み合わせたニックネームを質問紙に記入させた。2回目の調査時に1回目と同じニックネームを記入できるよう、1回目の調査時に使ったニックネームはカードに記入してペンケース内に保管させた。

(2) 結果と考察

授業前と授業後の調査結果を表3に示した。授業前に視覚障害者が一人でできると回答した子どもの割合は、靴履き62%、外歩き51%、食事34%、着替え32%、入浴22%であった。授業後は、靴履き71%、外歩き66%、食事15%、着替え58%、入浴37%であった。この結果より、食事を除けば、授業前と比べて授業後には一人でできると考える子どもが増えたことがわかる。食事については、2コマ目で食器の位置や皿の中身等を視覚障害者に伝える方法について考える活動をもったため、視覚障害者一人でできると回答した子どもが減少したと考えられる。

個人の回答が授業の前後でどのように変化したかを、「変化なし」「できる方向への変化」「できない方向への変化」に分けて計数した結果が表4である。加えて、授業前後で回答に変化がなかったケースについて、変化しなかった回答を「一人でできる」「少し手伝うとできる」「たくさん手伝うとできる」「できない」に分けて計数した結果を表5に示した。

表4、5より、靴履きについては授業前に一人でできると回答した子どもが62%いた。また、彼らの多くは、授業後に回答を変化させることがなかった。これは、昨年度の実践において教員が目隠しをして靴を履く場面を見せたことによる効果が持続していることを示唆する結果と言える。さらに、授業前に手伝いが必要と答えていた子ども19名ができる方向へと回答を変化させた。

表3. 授業前後における子どもの認識

N=73

| | | 一人でできる | 少し手伝うとできる | たくさん手伝うとできる | できない |
|-----|-----|-----------|-----------|-------------|---------|
| 靴履き | 授業前 | 62% (45名) | 36% (26名) | 1% (1名) | 1% (1名) |
| | 授業後 | 71% (52名) | 26% (19名) | 3% (2名) | 0 |
| 外歩き | 授業前 | 51% (37名) | 33% (24名) | 15% (11名) | 1% (1名) |
| | 授業後 | 66% (48名) | 25% (18名) | 8% (6名) | 0 |
| 食事 | 授業前 | 34% (25名) | 53% (39名) | 8% (6名) | 4% (3名) |
| | 授業後 | 15% (11名) | 79% (58名) | 3% (2名) | 3% (2名) |
| 着替え | 授業前 | 32% (23名) | 56% (41名) | 11% (8名) | 1% (1名) |
| | 授業後 | 58% (42名) | 34% (25名) | 8% (6名) | 0 |
| 入浴 | 授業前 | 22% (16名) | 47% (34名) | 23% (17名) | 8% (6名) |
| | 授業後 | 37% (27名) | 45% (33名) | 16% (12名) | 1% (1名) |

表 4. 視覚障害者が練習すれば一人でできることに関する授業前における回答の変化 N=73

| | 変化なし | できる方向へ変化 | できない方向へ変化 |
|-----|------------|------------|------------|
| 靴履き | 59% (43 名) | 26% (19 名) | 15% (11 名) |
| 外歩き | 48% (35 名) | 36% (26 名) | 15% (11 名) |
| 食事 | 56% (41 名) | 16% (12 名) | 27% (20 名) |
| 着替え | 55% (40 名) | 37% (27 名) | 8% (6 名) |
| 入浴 | 37% (27 名) | 45% (33 名) | 18% (13 名) |

表 5. 授業前後で回答に変化がなかった子どもの回答

| | 一人でできる | 少し手伝うと
できる | たくさん手伝う
とできる | できない |
|------------|------------|---------------|-----------------|------|
| 靴履き (n=43) | 79% (34 名) | 21% (9 名) | 0 | 0 |
| 外歩き (n=35) | 74% (26 名) | 14% (5 名) | 11% (4 名) | 0 |
| 食事 (n=41) | 20% (8 名) | 80% (33 名) | 0 | 0 |
| 着替え (n=40) | 48% (19 名) | 45% (18 名) | 8% (3 名) | 0 |
| 入浴 (n=27) | 26% (7 名) | 52% (14 名) | 22% (6 名) | 0 |

外歩きについては、授業前の時点で約半数が視覚障害者一人でできると回答していた。子どもの回答は一人でできるというところから変化しないか、できる方向に変化するケースが多かった。授業では、紙芝居を用いて「視覚障害児は、家から学校までの登下校を一人でできるように練習する」「白杖や点字ブロック、音声信号機が一人での外歩きを助けてくれる」ことを伝えていた。

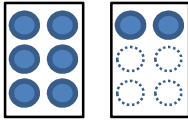
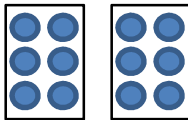
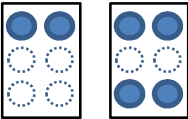
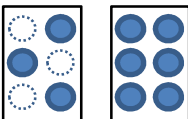
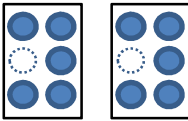
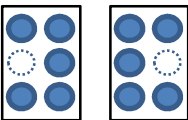
食事についてみると、55%の子どもには授業前後で回答の変化がみられなかった（表 4）。変化のみられなかった子どもの回答をみると、「少し手伝うとできる」が 8 割を占めている（表 5）。また、授業後にできない方向へ回答を変えた 27%の子どもの多くは、「一人でできる」から「少し手伝うとできる」に移行していた。

着替えや入浴については、できる方向へ変化した子どもは着替えで 37%、入浴で 45%であり、授業のねらいに沿って認識を変容させた子どもが 4 割近くいた（表 4）。一方で、授業前後で回答が変化しなかった子どもの半数近くが「少し手伝うとできる」と回答していた（表 5）。また、入浴に関しては回答に変化がなかった子どものうちの 22%が「たくさん手伝うとできる」と回答していた（表 5）。授業では、着替えや入浴を視覚障害者が一人でやっている様子を、紙芝居を用いて伝えていた。しかし、特に入浴については、子どもたちの多くが「一人でできる」という考えをもつには至らなかった。

5. 授業教材の適切性の評価

指導案 2（表 2）において、「2 つの点字は同じか、違うかクイズ」を行った。このクイズは、子どもが点字を識別できるという体験と、識別しにくい点字があるという体験の両方をもつことをねらった。そこで、そのねらいが達成されたか否かを確認し、授業教材として適切であったかどうかを評価することにした。クイズの出題内容および問題ごとの正答者数と正答率を表 6 に示した。表 6 の①～④につい

表 6. 指導案 2 において行った「2 つの点字は同じか、違うかクイズ」の正答率（4 年 2 組）

| 出題内容 | 正答者数 | 正答率（N=40） |
|--|------|-----------|
| ①「め」と「う」
 | 39 名 | 98% |
| ②「め」と「め」
 | 36 名 | 90% |
| ③「う」と「ふ」
 | 40 名 | 100% |
| ④「こ」と「め」
 | 37 名 | 93% |
| ⑤「む」と「む」
 | 26 名 | 65% |
| ⑥「む」と「へ」
 | 27 名 | 68% |

ては正答率が 9 割を超えており、これらの問題では多くの子どもが点字を識別できる体験を行ったことが確認された。一方、表 6 の⑤と⑥は識別しにくい体験をすることをねらったが、いずれも 6 割台の正答率であった。これらの結果より、識別のしにくい点字の組み合わせについては今後も検討が必要である。ただし、本実践でも 3 割を超える子どもが⑤や⑥の識別に失敗する体験をもっているものであり、このことをクラス内で共有することで、識別しにくい点字があることへの気づきを促すことはできると考える。

6. まとめ

視覚障害者が一人で着替えや靴履きができないとすると、生活全般に介助が必要になる。加えて入浴や食事が一人でできない、外歩きが一人でできないとすれば、独立した生活は不可能である。これらの行為を視覚障害者一人では行えないという考えは、視覚障害者は常に援助が必要な存在であるというステレオタイプの形成につながると考えられる。本実践は、こうしたステレオタイプな見方を防ぐとともに、子どもたちの認識を視覚障害者の実像に近づけるために行われた。

食事を除いた 4 項目（着替え、靴履き、外歩き、入浴）については、視覚障害者一人でできると考える子どもが増えた。また、「一人でできる」と回答するには至らなかったが、できる方向に回答が変化した子どもがいた。さらに、食事と入浴を除けば、授業後に「できない」と答えた子どもは 0 であった。食事については、授業で援助方法を考える活動をもったことから、「少し手伝うとできる」と回答した子どもが授業後に 8 割にのぼった。そのため、「一人でできる」という回答は 15%に減ったものの、「たくさん手伝うとできる」「できない」という回答が増加することもなかった。

本実践の対象児は、授業後に、視覚障害者の学校生活をより詳しく知りたい、道路をどのように歩いているかを具体的に知りたいなどの感想が挙げたことから、子どもの興味・関心に合わせつつ、今後は視覚障害者が一般市民に配慮してほしい事柄について教育を行い、その教育効果を確認したい。

引用文献

- 河内清彦（2001）視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造：性及び専攻学科との関連，教育心理学研究，49(1)，81-90.
- 水野智美（1999）大学生の視覚障害者（児）に対する態度－20年前の結果との比較および接触の質との関係から－，障害理解研究，3，33-40.

特別支援教育キャリア教育グループ

キャリア発達を促すための大学附属特別支援学校と大学との連携

—大学という地域資源を活用した就労支援・作業学習—

代 表 : 水内豊和
附属特別支援学校 : 和田充紀、大村和彦、栗林睦美、檜木哲也
柳川公三子、池崎理恵子、野崎美保、黒地忍
研究協力 : 芝木智美（富山大学大学院医学薬学研究部・特命助教）

【問題の所在と目的】

生徒の多くは、個別の教育支援計画で、高等部卒業後、一般企業や作業所で主体的に働くことを目標としている。そのため、卒業後の働く生活を思い描き、働くやりがいを感じたり、働く意義や価値を感じたりすることは重要である。また、地域の方と接しながら働くためには、社会人としてのふさわしい態度を身に付けてほしいと考える。その点、大学は職務内容も多様であり、障害者就労という視点で大きな可能性を秘めている（水内ほか、2013）。

そこで、附属学校という特性を生かし、大学と連携し、教職員などから依頼された仕事を行う取組を継続して実施した。身近な地域資源である富山大学を社会の場として取り上げ、そこで仕事をすることで感謝される喜びを感じ、仕事へのやりがい、ひいては地域の中で働く意欲を高めることを目的に支援を行った。ここにその実践について報告する。

【方法】

1 対象生徒

対象者は高等部1～3学年在籍生徒の合計20名である。

全員が知的障害であり、てんかん、筋ジストロフィー、ダウン症等の障害のある生徒も含まれる。また、対象者のうち10人が、自閉症または自閉的傾向の生徒である。

対象生徒は、文字による手順表を読んで活動できる生徒や実物の提示や写真による見本が必要な生徒、ドライバーなどの道具を操作できる生徒や指先を使った作業を苦手とする生徒などがある。学習面、作業面について個々の能力差が大きく、進路先として一般企業での就労を希望する生徒、福祉作業所を希望する生徒、生活介護事業所を希望する生徒など進路希望も様々であった。一般企業や地域の作業所での就業体験を何度か経験した生徒、ほぼ未経験な生徒がおり、社会の場での働く経験にも個人差が大きかった。

2 手続き

作業学習の授業や6月と11月に実施する就業体験において大学と連携を図った。大学内の施設の提供を受け、大学校内で活動をさせられたり、大学や大学と関連する機関から仕事の提供を受けて活動を行ったりした。活動にあたっては、生徒の目標から、大学

教員と連携内容を協議し、大学教員を中心に大学内での受け入れ体制を整えてもらった。また、大学の教職員や学生の協力を得て、仕事の依頼や報告を生徒が直接行う機会や仕事についての社会的評価（感謝や指摘）を伝えてもらう機会を積極的に設定した。

対象とする生徒の学年や実態に応じて、活動内容や活動時期は様々である。各単元、活動ごとの対象生徒、大学との連携内容を次に示す。

| 番号 | 実施時期
日数・回数 | 対象学年
・生徒数 | 連携内容 |
|----|---------------|-------------------------|--|
| 1 | 6月
3回 | 1学年
男子：3名
女子：5名 | 市販の菓子を組み合わせて袋詰めし、学生協で販売させてもらう。袋詰めの中身は学生の意見を参考にし、生徒が学生協で購入した。学生協への納品も生徒が行った。 |
| 2 | 6月
5日間 | 2学年
男子：7名
女子：1名 | 大学内の1室を作業室として提供してもらい就業体験を行った。学校から朝大学に行き、終日作業を行った。仕事として、大学職員や附属図書館から提供されたりサイクル封筒の作成や封入作業を行った。 |
| 3 | 11月
5日間 | 1～3学年
男子：6名
女子：6名 | 大学内の2室を作業室として提供してもらい6月と同様に就業体験を行った。大学職員の紹介を受け、保育所から依頼された菓子袋を作ったり、一般企業から委託作業を提供してもらったりした。 |
| 4 | 11月
1回 | 1～3学年
男子：1名
女子：2名 | 学生協からサービス用割り箸を箸袋に入れる仕事の提供を受けた。仕事を行った生徒が納品も行った。 |
| 5 | 1～3月
14回 | 1～3学年
男子：4名
女子：2名 | 作業学習で清掃班が、大学内で清掃を行った。清掃業者に委託していない部屋のワックス掛けを行う床面清掃や教職員が使用する印刷室内の清掃や整理を行った。 |

【結果】

1、3では、大学の教職員から依頼された仕事をする中で、注意点やポイントを守って仕事をするにつなげた。納品の際に職員から感謝の言葉をかけられ、喜ぶ姿が見られた。大学内の施設を終日利用することで、廊下で職員や学生に会釈したり、迷惑にならないようにトイレや廊下を利用したりするなど社会的な振る舞い方に気を付ける姿が見られた。

2、4では、納品した菓子袋により報酬を得たり、割り箸を手にする客の姿を見たりして、自分の仕事が社会で役立つ様子を知ることができた。

5では、大学職員から直接仕事を依頼してもらい終了を報告することで、責任感をもち、ポイントを守りきれいに確実に清掃を行うことができた。清掃道具の置き方に気を付けるなど社会の場で仕事をする上で必要な配慮をすることができた。清掃した部屋を使用する学生や職員から感謝を伝えられることで働く喜びにつなげた。

【考察】

大学という社会的な場を活用し、自分たちの行った仕事が社会の場で役立つ姿を見たり、仕事によって外部から評価を受けたり、感謝を伝えてもらったりすることで、仕事に対してのやりがいや喜びを得ることができた。継続的に活動を積み重ねることで、自分たちが行った仕事がどのように役立つかを知り、責任感をもって働く姿につながった。また、社会の場で仕事を行うことで、社会との関わりを知り、社会での適切な振る舞い方への意識が芽生えた。仕事へのやりがいや働く喜びを感じる機会を設定することで、友達と協力し、自分の役割を果たし、前向きに働く姿が実現できたのではないかと考える。

卒業後の進路は生徒によって異なるが、社会の一員として、地域の人たちの中で働く力を発揮してくれることを願う。

なお、この取組は、附属学校を持つ大学にとっても有意義なものであり、キャリア教育実践のあり方の一つとして、今後も発展的に継続して検討していく。

【引用文献】

水内豊和・芝木智美・新田真理・中島育美（2013）国立大学における計画的な障害者雇用の現状と課題—国立大学に対する質問紙調査から—。富山大学人間発達科学部紀要，7（2），71-84.

富山大学人間発達科学部・附属学校園
共同研究プロジェクト 平成24年度報告書

富山大学スクラムプラン
—学校バリアフリーへの挑戦— 2012

発行日 平成25年7月16日

発行者 富山大学人間発達科学部

〒930-8555 富山市五福3190

TEL 076-445-6251 (総務)

FAX 076-445-6264

富山大学人間発達科学部附属学校園

〒930-8555 富山市五艘1300

TEL 076-445-2800 (事務室)

FAX 076-445-2802